

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第五十冊

善門池西遺跡

2004. 3

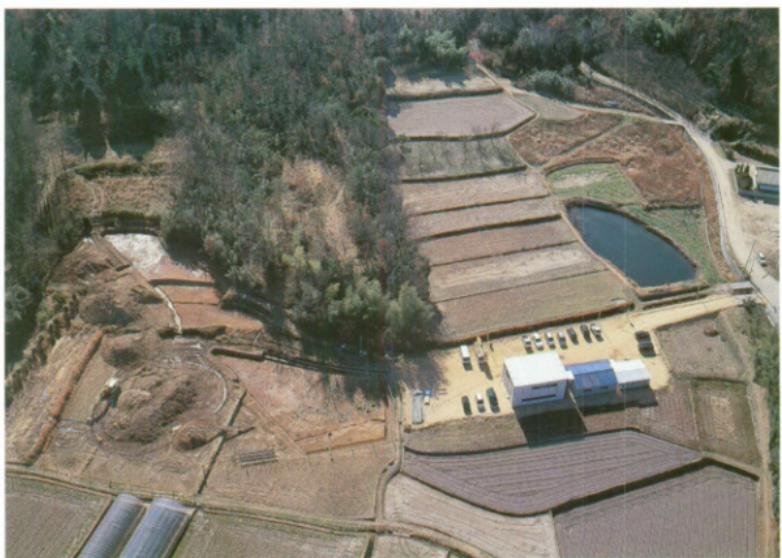
香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第五十冊

善門池西遺跡

2004. 3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団



遺跡俯瞰(南上方より)



遺跡位置(手前)と東の平野部

卷頭図版 2



VII SX01出土丹波焼壺



VII SX01出土中国産(上)・古瀬戸(下)天目

序 文

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、香川県教育委員会からの委託を受け、四国横断自動車道や旧高松空港、サンポート高松の整備など大規模な開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業及び出土した文化財の整理、研究業務を実施いたしております。

四国横断自動車道（津田～引田間）につきましても平成8年度から埋蔵文化財の発掘を、また平成11年度からは発掘調査と並行して出土品の整理業務を行っております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十冊」として刊行いたしますのは東かがわ市白鳥に所在します善門池西遺跡についてであります。

これまでの調査・整理作業により、善門池西遺跡は弥生時代には成重遺跡と池の奥遺跡の中繼点であったことが判明しました。また古墳時代にも小集落が存在したことが明らかになりました。そして中世にはこの遺跡を最も特徴付ける中国産天目・丹波焼壺・古瀬戸各種など流通量の少ない土器を持ちかなりの立場にあったと推測される人がいたことが判明し、香川県の中世集落研究に貴重な成果を提供しました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、日本道路公団及び香川県教育委員会並びに関係諸機関、地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年3月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所長 中村 仁

例　　言

1. 本報告書は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第五十冊で、香川県東かがわ市白鳥に所在する善門池西遺跡（ぜんもんいけにしいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査を担当した。
3. 発掘調査の期間及び担当者は以下のとおりである。

予備調査　期間　平成9年12月

　　担当者　西岡達哉

本調査　（平成9年度）

　　期間　平成10年1月～3月

　　担当者　乗松真也、池田道雄、山坂浩樹
(平成10年度)

　　期間　平成10年12月～平成11年3月

　　担当者　貴岡永光、溝渕大輔、東条貴美
(平成11年度)

　　期間　平成11年7・8月

　　担当者　長元茂樹、松岡宏一、中山尚子

4. 調査・整理に当たって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

香川県土木部横断自動車道対策室（調査当時）、同長尾土木事務所横断道対策課（調査当時）、白鳥町横断道対策室（調査当時）、白鳥町教育委員会（調査当時）、地元対策協議会、地元自治会、篠山市教育委員会、瀬戸市

5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが行った。また、執筆・編集は古野徳久が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり（報告書抄録のみ世界測地系で記載）、標高はT.P.を基準としている。

遺構名は調査時のものを使用した。頭のローマ数字は調査区名を、一部に採用した次の「上・下」は、その調査区に遺構面が複数ある場合に、「上・下」を記してわかるようにした。なお、Ⅲa下SX02のみ、調査時に「集石」で記録されたものに新規に遺構名を付与した。また、遺構は下記の略号により表示している。

S H . . . 穴住居　S K . . . 土坑　S D . . . 溝　S R . . . 自然河川

S X . . . 性格不明遺構　S P . . . 柱穴　S T . . . 墓

7. 石器実測図中、現代の欠損は黒で塗りつぶしている。石包丁でスクリーントーンを貼った部分は磨滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを表す。砥石輪郭線の回りの実線は砥ぎ面を表す。須恵器杯蓋では回転ヘラ削りの範囲を実線と一点鎖線を用いて示している。陶磁器では釉の範囲を一点鎖線を用いて示している。

8. 掘図の一部に国土地理院地形図 三本松 (1/25,000) 及び国土基本図「IV-F F 49」(1/5,000)を使用した。

9. 遺構断面図内に付された「L =」以下の数値は、その下（時に上）に付された横線の標高を示す。図面1枚はすべて同じ標高に揃えたため、1箇所のみの表記で他は省略している。

10. 「遺構別出土遺物一覧」では、包含層出土遺物を扱っていない。

11. 土器観察表は以下の基準で作成している。

「器種・種類」の項では以下のような省略を用いている。

縄：縄文土器 弥：弥生土器 須：須恵器 土：土師器 東播：東播系土器

亀山：亀山焼 備前：備前焼 土師質：土師質土器 瓦質：瓦質土器 丹波：丹波焼

唐津：唐津焼

「残存率」は残存する遺物が復元した場合に占める量を復元径を8等分し表記した。完形品に対する割合ではない。図化部分の表記がないものは口縁に対する割合である。割合が1/8以下または径が割り出せないため算出不能なものは「小片」とする。

「胎土」は含まれる鉱物・岩石の径と量を、以下の省略形を組み合わせて示している。また特殊な鉱物・岩石は別途記した。

微：径0.5mm以下 細：径0.6～1.0mm 中：径1.1～3.9mm 粗：径4.0mm以上

多：非常に多く含む 普：一定量含む 少：少量含む

「色調・釉色調」は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖 1992年版』による。

「外面調整・内面調整」は認められる調整を列記した。

12. 土器の時期判断は以下の論文に依った。

弥生土器；真鍋昌宏 1992「2讃岐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社

東播系こね鉢；森田稔 1995「8. 中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

奈良火鉢；立石堅志 1995「10. [1] 奈良火鉢」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

石鍋；木戸雅寿 1995「13. 石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

古瀬戸；藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』。また、藤澤氏に一部を実見いただきご教示を得た。

青磁；上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会

白磁；森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会

山本信夫 1995「11. [2] 中世前期の貿易陶磁」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

焰烙；佐藤竜馬 1994「18～19世紀の土器・瓦について」『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成5年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他

備前焼；真壁忠彦 1990『考古学ライブラー60 備前焼』ニューサイエンス社

丹波焼；篠山市教育委員会河野克人氏のご教示を得た。

本文目次

序文

例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過と予備調査の結果

- | | |
|-----------------|---|
| 1 調査に至る経過 | 1 |
| 2 予備調査の結果 | 1 |

第2節 調査の経過と体制

- | | |
|-----------------------|---|
| 1 調査の経過 | 7 |
| 2 発掘調査及び整理作業の体制 | 9 |

第3節 調査の方法

- | | |
|----------------|----|
| 1 地区割り | 10 |
| 2 記録類の作成 | 10 |

第2章 立地と環境 10

第3章 調査の成果

第1節 土層序 11

第2節 遺構・遺物

- | | |
|-----------------------|----|
| 1 縄文時代の遺物 | 26 |
| 2 弥生時代の遺構・遺物 | 27 |
| 3 古墳時代～古代の遺構・遺物 | 40 |
| 4 中世の遺構・遺物 | 46 |
| 5 包含層出土の遺物 | 62 |
| 6 近世墓 | 71 |

第4章 まとめ 72

遺構別出土遺物一覧 76

遺物観察表 81

写真図版

報告書抄録

挿図・付図目次

第1図 四国横断自動車道（津田～引田間）埋蔵文化財包蔵地図	2	第33図 VII a 上 S D 08 出土遺物実測図(1/4)	34
第2図 周辺の遺跡分布(1/25,000)	5	第34図 III a 下 S D 02 出土遺物実測図①(1/4)	37
第3図 遺跡位置図(2)(1/5,000)	6	第35図 III a 下 S D 02 出土遺物実測図②(1/2)	38
第4図 調査区割り図(1/1200)	8	第36図 I 下 S R 01 出土遺物実測図(1/2, 1/4)	39
第5図 遺跡土層図①(1/60)	12	第37図 III a 下 S D 08 出土遺物実測図(1/4)	39
第6図 遺跡土層図②(1/60)	13	第38図 VI a S H 01 平・断面図(1/60)	40
第7図 遺跡土層図③(1/60)	15	第39図 VI a S H 01 出土遺物実測図(1/4)	41
第8図 遺跡土層図④(1/60)	16	第40図 VII a 上 S H 01 平・断面図(1/60)	42
第9図 遺跡土層図⑤(1/60)	17	第41図 VII a 上 S H 01 出土遺物実測図①(1/2, 1/4)	43
第10図 遺跡土層図⑥(1/60)	19	第42図 VII a 上 S H 01 出土遺物実測図②(1/2)	44
第11図 遺跡土層図⑦(1/60)	20	第43図 VII a 上 S H 04 平・断面図(1/60)	45
第12図 遺跡土層図⑧(1/60)	21	第44図 VII a 上 S H 04 出土遺物実測図(1/4)	45
第13図 ピット出土遺物実測図①(1/4)	22	第45図 VI a S P 015 平・断面図(1/30)	45
第14図 III a 下 S H 01 出土遺物実測図(1/4)	22	第46図 ピット出土遺物実測図③(1/4)	45
第15図 III a 下 S H 01 平・断面図(1/60)	22	第47図 VI a S D 02 断面図(1/30)	46
第16図 遺構配置図①(1/375)	23～24	第48図 VII a 上 S D 07 断面図(1/30)	46
第17図 遺構配置図②(1/375)	25	第49図 VII S P 001 平・断面図(1/30)、 出土遺物実測図(1/4)	46
第18図 VII a 上 S H 02 平・断面図(1/60)、 出土遺物実測図(1/4)	26	第50図 VII S P 003 平・断面図(1/30)、 出土遺物実測図(1/4)	46
第19図 VII a 上 S H 03 平・断面図(1/60)、 出土遺物実測図(1/4)	27	第51図 ピット出土遺物実測図④(1/2, 1/4)	47
第20図 ピット平・断面図(1/30)	27	第52図 ピット出土遺物実測図⑤(1/2, 1/4)	49
第21図 ピット出土遺物実測図②(1/2, 1/4)	28	第53図 VII S K 01 平・断面図(1/30)、 出土遺物実測図(1/4)	49
第22図 I 下 S K 01 平・断面図(1/30)	29	第54図 VII S K 02 平・断面図(1/30)	50
第23図 III a 下 S K 01 平・断面図(1/30)	29	第55図 VII S K 03 出土 遺 物 実 測 図(1/4)	50
第24図 III a 下 S K 02 平・断面図(1/30)、 出土遺物実測図(1/4)	29	第56図 VII S K 04 平・断面図(1/30)、 出土遺物実測図(1/4)	50
第25図 III a 下 S X 02 平・断面図(1/2)	30	第57図 VII S K 06 出土 遺 物 実 測 図(1/4)	51
第26図 III a 下 S X 02 出土遺物実測図①(1/4)	31	第58図 III a 上 S X 01 断面図(1/40)、 出土遺物実測図(1/4)	51
第27図 III a 下 S X 02 出土遺物実測図②(1/2)	32		
第28図 III a 下 S D 01 出土遺物実測図(1/4)	33		
第29図 VI a S X 03 断面図(1/30)	33		
第30図 III a 下 S D 03 出土遺物実測図(1/2)	33		
第31図 III a 下 S D 04 出土遺物実測図(1/4)	34		
第32図 VII a 上 S D 04 断面図(1/30)、 出土遺物実測図(1/2)	34		

第 59 図	VII b S X 01 平・断面図 (1/30)	52	第 72 図	VII a 上 S D 02 深面図 (1/30)	61
第 60 図	VII S X 01 断面図 (1/30)、 出土遺物実測図① (1/2、1/4).....	53	第 73 図	包含層出土遺物実測図① (1/2、1/4)	62
第 61 図	VII S X 01 出土遺物実測図② (1/4)	56	第 74 図	包含層出土遺物実測図② (1/4).....	63
第 62 図	VII S X 01 出土遺物実測図③ (1/4)	57	第 75 図	包含層出土遺物実測図③ (1/2).....	64
第 63 図	VII S X 02 平・断面図 (1/30)、VII S X 03 平・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)	58	第 76 図	包含層出土遺物実測図④ (1/2、1/4)	65
第 64 図	I 上 S D 02 出土遺物実測図 (1/4)	58	第 77 図	包含層出土遺物実測図⑤ (1/2、1/4)	66
第 65 図	I 上 S D 03 出土遺物実測図 (1/4)	58	第 78 図	包含層出土遺物実測図⑥ (1/2、1/4)	67
第 66 図	III a 上 S D 01 断面図 (1/30).....	58	第 79 図	包含層出土遺物実測図⑦ (1/2、1/4)	68
第 67 図	VI a S D 01 断面図 (1/30)、 出土遺物実測図 (1/2、1/4).....	59	第 80 図	包含層出土遺物実測図⑧ (1/2、1/4)	69
第 68 図	VI a S D 03 断面図 (1/30)、 出土遺物実測図 (1/4).....	60	第 81 図	包含層出土遺物実測図⑨ (1/2).....	70
第 69 図	VI a S D 04 断面図 (1/30).....	60	付図 1	香川県善門池西遺跡 遺構位置図① (1/200)	
第 70 図	VI b S D 01 出土遺物実測図 (1/4)	61	付図 2	香川県善門池西遺跡 遺構位置図② (I・III a 区下層) (1/200)	
第 71 図	VII a 上 S D 01 断面図 (1/30)、 出土遺物実測図 (1/4).....	61	付図 3	香川県善門池西遺跡 遺構位置図③ (VII a 区下層) (1/200)	

表目次

第 1 表	四国横断自動車道（津田～引田）建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧 (1) ...	3	第 17 表	土器観察表 (10).....	90
第 2 表	四国横断自動車道（津田～引田）建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧 (2) ...	4	第 18 表	土器観察表 (11).....	91
第 3 表	遺構別出土遺物一覧 (1).....	76	第 19 表	土器観察表 (12).....	92
第 4 表	遺構別出土遺物一覧 (2).....	77	第 20 表	土器観察表 (13).....	93
第 5 表	遺構別出土遺物一覧 (3).....	78	第 21 表	土器観察表 (14).....	94
第 6 表	遺構別出土遺物一覧 (4).....	79	第 22 表	土器観察表 (15).....	95
第 7 表	遺構別出土遺物一覧 (5).....	80	第 23 表	土器観察表 (16).....	96
第 8 表	土器観察表 (1).....	81	第 24 表	土器観察表 (17).....	97
第 9 表	土器観察表 (2).....	82	第 25 表	土器観察表 (18).....	98
第 10 表	土器観察表 (3).....	83	第 26 表	土器観察表 (19).....	99
第 11 表	土器観察表 (4).....	84	第 27 表	土器観察表 (20).....	100
第 12 表	土器観察表 (5).....	85	第 28 表	土器観察表 (21).....	101
第 13 表	土器観察表 (6).....	86	第 29 表	土器観察表 (22).....	102
第 14 表	土器観察表 (7).....	87	第 30 表	土器観察表 (23).....	103
第 15 表	土器観察表 (8).....	88	第 31 表	石器・金属器観察表 (1).....	104
第 16 表	土器観察表 (9).....	89	第 32 表	石器・金属器観察表 (2).....	105
			第 33 表	石器・金属器観察表 (3).....	106

図版目次

- 卷頭図版 1 遺跡俯瞰（南上方より）
遺跡位置（手前）と東の平野部
- 卷頭図版 2 VII SX01 出土丹波焼壺
VII SX01 出土中國產・古瀬戸天目
- 図版 1 I・II b・II c 区調査終了（俯瞰）
II a 区調査終了（俯瞰）
V 区調査終了（俯瞰）
- 図版 2 VI b・VII a 区調査終了（俯瞰）
- 図版 3 VI a・VII b 区調査終了（俯瞰）
- 図版 4 VII 区調査終了（俯瞰）
- 図版 5 I 区調査前風景（南より）
I 区上層遺構面（西より）
- 図版 6 I 区下層遺構面（東より）
III a 区上層遺構面（東より）
- 図版 7 III a 区下層遺構面北半部（南より）
III a 区下層遺構面南半部（西より）
- 図版 8 IV 区近世墓基壙石散乱状況（南西より）
IV 区近世墓墓坑（東より）
- 図版 9 V 区南壁土層と上層遺構面（北より）
V 区上層遺構面（東より）
- 図版 10 VI a 区調査終了（北より）
VII a 区調査終了（南より）
- 図版 11 VII a 区調査終了（南上方より俯瞰）
VII a 区下層遺構面（南より）
- 図版 12 VII SX 01 検出状況（西より）
VII 区北半部調査終了（北から）
- 図版 13 III a 下 SH 01 調査終了（北より）
VII a 上 SH 02 調査終了（西より）
- 図版 14 VII a 上 SH 03 調査終了（北より）
III a 下 SX 02 検出状況（北より）
- 図版 15 VII a SH 01 調査終了（南より）
VII a 上 SH 01 窟部
使用土器落下破損状況（南より）
- 図版 16 VII a 上 SH 01 窟部支脚検出状況（南より）
VII a 上 SH 01 窟部調査終了
(窓立ち上がりが半円形に残る、西より)
- 図版 17 VII SP 003 埋納土器検出
(3枚重ねの2枚目、南より)
I 上 SP 008 土器検出（東より）
- 図版 18 VII SK 01 土器検出（北より）
VII b S X 01 調査終了（北より）
- 図版 19 VII SX 01 焼土・土器埋め立て状況（西より）
VII a SD 01 埋土断面③（北より）
- 図版 20 出土遺物（1）
- 図版 21 出土遺物（2）
- 図版 22 出土遺物（3）
- 図版 23 出土遺物（4）
- 図版 24 出土遺物（5）
- 図版 25 出土遺物（6）
- 図版 26 出土遺物（7）
- 図版 27 出土遺物（8）
- 図版 28 出土遺物（9）
- 図版 29 出土遺物（10）
- 図版 30 出土遺物（11）
- 図版 31 出土遺物（12）
- 図版 32 出土遺物（13）
- 図版 33 出土遺物（14）

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過と予備調査の結果

1 調査に至る経過（第1図、第1・2表）

四国横断自動車道のうち津田～引田間の建設については、平成5年度に建設大臣から日本道路公団總裁に対し建設の施工命令が下され、平成6年度に路線の中心杭の打設が行われた。

これに伴う埋蔵文化財保護に関し、平成4年度から県教育委員会と日本道路公団高松建設局とで事前協議が開始された。平成7年6・7月には県教育委員会が国庫補助事業として分布調査を行い、津田～引田間の22地区に対し埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公団に通知した。日本道路公団は県教育委員会の意見を踏まえ、平成7年10月文化庁と協議を行い、平成8年1月文化庁から「工事の施工に先立って発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより事前協議は終了し、平成8年4月、県教育委員会と日本道路公団との間で埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、更に県教育委員会と財團法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で発掘調査の委託契約が締結された。

一方、県教育委員会は明石大橋開通に合わせた津田～引田間の高速道路の整備は香川県の緊急かつ重要な課題であることから、平成8・9年度に文化財専門職員を新規採用し、調査体制の充実を図ることで対応した。

津田～引田間22地区の調査対象地区的うち白鳥町内には6地区あり、具体的な遺跡の内容を把握するため、用地買収の進捗にあわせて平成9年度より順次予備調査を実施し、本調査の範囲を確定していった。一方、予備調査により範囲を確定した遺跡の本調査も同じ平成9年度より進められていった。以上、津田～引田間22地区の予備調査及び本調査の位置・調査内容・報告書刊行状況について、第1図及び第1・2表にまとめて示している。

2 予備調査の結果

白鳥町内6地区のうち、「池の奥地区」の予備調査は平成9年度に実施された。

11月10日に土地所有者を対象とした説明会を開催し、同月17日から12月10までの期間で、新川東岸の水田地帯から東谷川東部の山間部に向かって調査を進めた。調査の方法は、小型の機械と人力で遺構面または基盤土まで掘削した後に、遺構の有無を確認し、存在した場合は遺構配置図の作成と写真撮影で記録を残した。最後に埋め戻しを行い、旧状に復した。

調査の結果、善門池を挟んだ東西の地域で遺跡の内容が異なることが判明したため、善門池より東を「池の奥遺跡」、西を「善門池西遺跡」と命名し分割した。調査対象面積は善門池西遺跡7,116m²、池の奥遺跡8,700m²が確定した。



第1図 四国横断自動車道(津田～引田間)埋蔵文化財包蔵地図

遺跡名	地区名	所在地	調査面積(㎠)	調査期間	備考
1 中 谷 遺 跡	中 谷	さぬき市津田町鶴羽	518	8.10.1 ~ 9.1.31	平成 15 年度報告書刊行予定。第 47 冊
2 大 山 遺 跡	大 山	さぬき市津田町鶴羽	2,113	8.10.1 ~ 9.1.31	平成 15 年度報告書刊行予定。第 47 冊
③	馬 篠	東かがわ市馬篠	620	9.7.1 ~ 9.8.31	平成 9 年度概報で報告完了
④	小 砂	東かがわ市小砂	100	9.6.1 ~ 9.6.30	平成 9 年度概報で報告完了
5 坪 井 遺 跡	中 山	東かがわ市中山	6,566	10.9.1 ~ 11.3.31	平成 13 年度報告書刊行。第 40 冊
6 三 殿 出 口 遺 跡	三 殿	東かがわ市三殿	135	11.7.1 ~ 11.7.31	
⑦	町 田	東かがわ市町田	6,370	11.4.1 ~ 11.6.30	平成 16 年度報告書刊行予定
8 楠 谷 遺 跡	楠 谷	東かがわ市水主	69	10.9.1 ~ 10.9.30	平成 10 年度概報で報告完了
⑨	高 原	東かがわ市水主	1,000	11.3.1 ~ 11.3.31	
⑩ 金 昆 罷 山 遺 跡	下 屋 敷	東かがわ市水主	1,578	9.7.1 ~ 10.3.31	平成 15 年度報告書刊行予定
11 塔 の 山 南 遺 跡	別 所	東かがわ市川東	460	8.12.1 ~ 8.12.31	
12 西 谷 遺 跡	枝 の 端	東かがわ市川東	446	8.11.1 ~ 8.11.30	
13 原 间 遺 跡	原 间	東かがわ市川東	100	10.3.1 ~ 10.3.31	平成 12 年度報告書(1)刊行。第 36 冊
14 横 端 遺 跡	横 端	東かがわ市西藤井	3,600	10.4.1 ~ 10.8.31	平成 15 年度報告書(II)刊行。第 46 冊
			1,300	11.12.1 ~ 12.3.31	
			15	9.9.1 ~ 9.9.30	平成 12 年度報告書刊行。第 36 冊
			1,300	11.1.1 ~ 11.3.26	
			2,092	9.6.1 ~ 10.3.31	平成 9 年度概報で報告完了
			500	9.2.1 ~ 9.2.28	
			19,254	9.4.1 ~ 10.3.31	平成 13・14 年度報告書刊行。第 39・42 冊
			24,243	10.4.1 ~ 11.3.31	
			3,590	10.12.1 ~ 11.3.31	
			1,647	11.9.1 ~ 11.10.31	平成 14 年度報告書刊行。第 43 冊

第1表 四国横断自動車道(津田～弓田)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(1)

第2表 四国横断自動車道(津田～引田)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧(2)

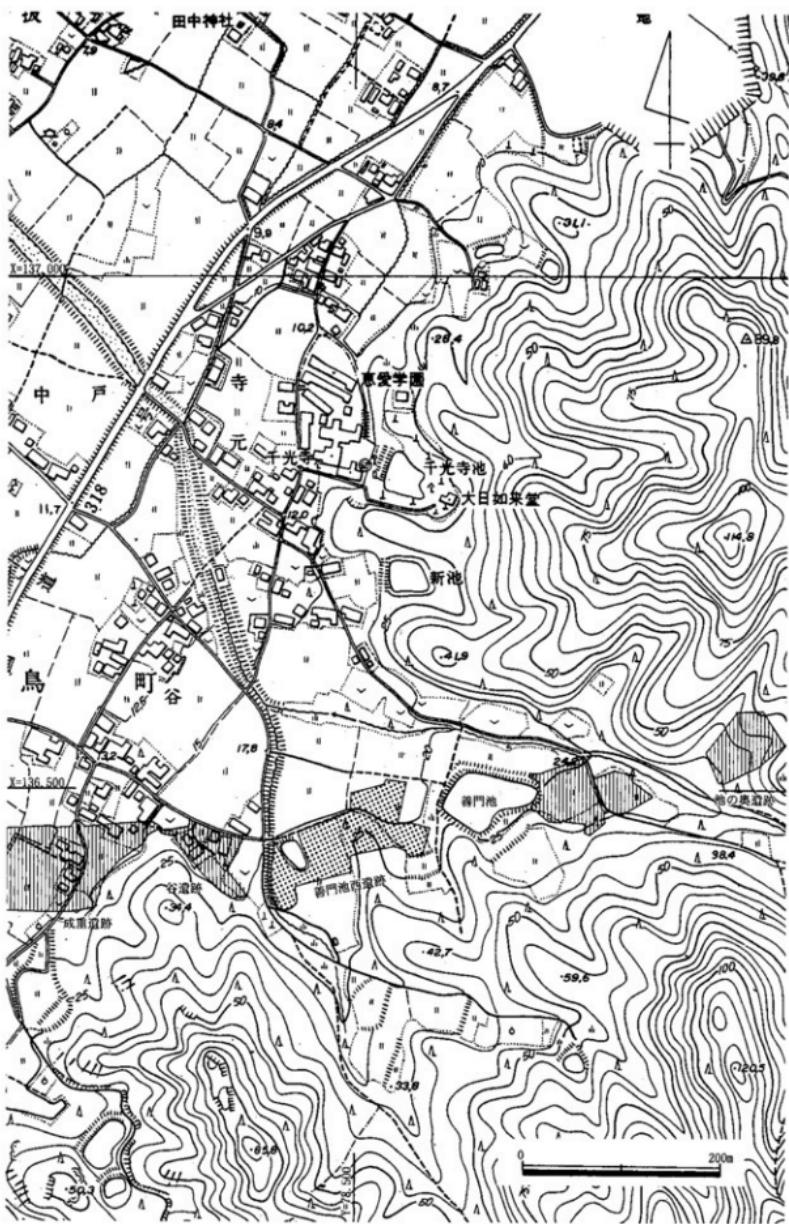
遺跡名	地区名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	備考
15 成重遺跡	成重	東かがわ市白鳥	1,500	9.2.1～9.2.28	
			14,650	9.4.1～10.3.31	平成15年度報告書(I)刊行。第47冊
			6,543	10.4.1～11.3.31	平成16年度報告書(II)刊行予定。
			4,192	11.6.1～12.3.31	
16 谷遺跡	谷	東かがわ市白鳥	111	10.7.1～10.7.31	
			2,741	11.9.1～12.3.31	平成16年度報告書刊行予定
			900	12.4.1～12.8.31	
			3,566	9.11.17～10.3.31	
17 善門池西遺跡	池の奥	東かがわ市白鳥	2,500	10.4.1～11.3.31	本書
18 池の奥遺跡	法月	東かがわ市白鳥	1,050	11.7.1～11.8.31	
⑩			8,700	10.6.1～11.3.26	平成15年度報告書刊行。第46冊
			510	10.1.1～10.1.31	平成9年度概報で報告完了
20 天王谷遺跡	塙屋	東かがわ市引田	1,200	11.1.22～11.3.24	平成14年度報告書刊行。第45冊
21 川北遺跡		東かがわ市小海	1,475	11.7.1～11.8.31	
22 逃田石垣遺跡	逃田	東かがわ市引田	6,038	10.8.1～11.3.31	平成16年度報告書刊行予定
23 逃田谷川下池遺跡			554	10.4.1～10.5.31	
			2,300	11.4.1～11.6.30	
			1,450	10.12.1～10.1.29	平成14年度報告書刊行。第44冊
24 鹿庭遺跡	鹿庭	東かがわ市吉田	310	9.7.1～9.10.31	
25 穂の谷遺跡	黒羽	東かがわ市黒羽	3,800	10.4.6～10.8.31	平成14年度報告書刊行。第44冊
	合計		3,978	9.10.1～10.3.31	平成12年度報告書刊行。第36冊
			145,724		

*遺跡名の数字は第1回の数字と対応する。※遺跡名の数字のうち○で囲んだものは、予備調査のみで調査が終したものと表す。



第2図 周辺の遺跡分布(1/25,000)

- | | | |
|------------------|--------------------|---------------------|
| 1 善門池西遺跡 | 15 高松庵寺(平安時代) | 29 別所古墳 |
| 2 白鳥城跡(室町時代) | 16 大日山2号墳 | 30 別所遺跡(弥生時代) |
| 3 池の奥遺跡(弥生時代) | 17 大日山1号墳 | 31 飛谷遺跡(弥生時代) |
| 4 谷遺跡(中近世) | 18 大日山3号墳 | 32 城の内遺跡(弥生~平安時代) |
| 5 成重遺跡(弥生時代~中世) | 19 小僧遺跡 | 33 笠塚遺跡(弥生時代) |
| 6 成重北遺跡 | 20 住屋遺跡 | 34 風呂遺跡(弥生時代) |
| 7 四房遺跡(弥生時代) | 21 神越古墳 | 35 金毘羅山遺跡(繩文時代~中近世) |
| 8 成重南遺跡 | 22 原間遺跡(弥生~平安時代) | 36 高原遺跡(弥生時代) |
| 9 観音谷遺跡 | 23 幸代池西遺跡(弥生時代) | 37 与田山寺古墳 |
| 10 一支部南遺跡 | 24 原間1号墳 | 38 落合遺跡(弥生時代) |
| 11 藤井古墳 | 25 西谷遺跡(弥生~室町時代) | 39 西村古墳 |
| 12 虎丸城跡(室町時代) | 26 枝の端遺跡(古墳時代) | 40 清塚古墳 |
| 13 白鳥庵寺(白鳳時代) | 27 塔の山南遺跡(弥生時代) | |
| 14 横端遺跡(弥生~古墳時代) | 28 別所池田遺跡(弥生時代~中世) | |



第3図 遺跡位置図(2)(1/5,000)

予備調査結果を善門池西遺跡についてのみ簡単に記すと、現状が水田の部分は耕作土から0.3～0.4mの深さで遺構面を確認した。この時点で判明した遺構内容は古墳時代の堅穴住居跡と中世の柱穴跡である。遺構密度が薄い地点については、予備調査の中で調査を終了させ、密度の濃い地点に対して改めて本格的な調査を行うこととした。

第2節 調査の経過と体制

1 調査の経過

平成9年12月の予備調査の結果を受けて、本調査対象範囲を決定した後の平成10年1月より平成9年度の本調査を開始した。「池の奥地」として予備調査を行い、善門池を挟んだ2つの谷でそれぞれ時代・内容を異にする別の遺跡が営まれているとの判断から、正式に「善門池西遺跡」との名称が与えられた。この年度の調査はI・II a～c・III a・III c・III d・V区の計3,566m²を対象に、発掘作業員を直接雇用する直営方式を行った。このうちI・III a区は2つの遺構面のうち上層である中世遺構面のみ調査を終え、下層遺構面は次年度に調査を行うこととなった。

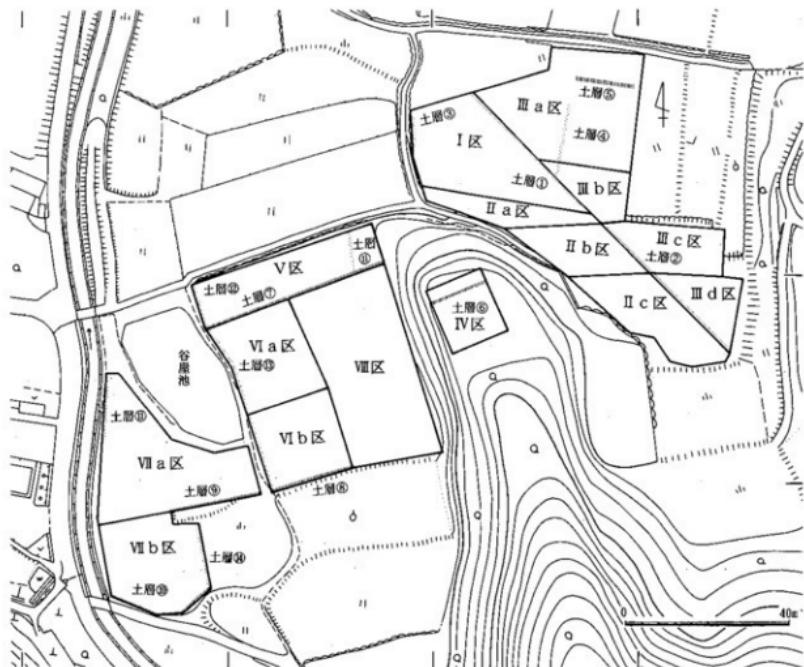
この年の調査は善門池西遺跡が広がる2つの谷のうち東側の谷のV区を除いた範囲を対象としている。調査の結果は谷内では遺構密度が極めて低く、谷の出口の地形がやや平坦になり開けた箇所で遺構密度が極めて高くなかった。中世の居住環境として後者の箇所が適していたことになる。なお、II c・II d区における遺構の残存状況の悪さは、現在の田畠化により上の中世遺構面が削平された可能性もある。II c区では下の弥生時代～古墳時代の遺構面が部分的に残り、遺構を確認している。西側の谷の出口であるV区もI・III a区同様柱穴を中心とした中世の遺構が展開する。東の谷同様流れ込んだ2次堆積土により谷が平坦になった上で生活が営まれたものであることが土層の堆積状況より読み取れる。この2次堆積土は弥生時代（中期中心）・古墳時代（5～6世紀）の包含層、更に中世と考える土石流によるものとなっている。2次堆積土の下は居住面となりうる可能性もあったが、傾斜や凹凸が激しかったため遺構が残されなかったようである。

平成10年度の調査はIII b・VI a・VI b・VII a・VII b区と前年度の残りであるI・III a区の弥生～古墳時代の遺構面の計2,500m²を対象に、発掘作業員を直接雇用する直営方式を行った。

この年の調査は善門池西遺跡が広がる2つの谷のうち主として西側の谷を対象としている。西側の谷で最も深いVII区に最も大きな土石流の痕跡があり、その東斜面であるVI区でも同様の痕跡が認められた。西側の谷は東側の谷より深く大きいため、発生した土石流は谷出口では大規模になるものと思われる。I・III a区では遺構が認められる範囲のみの部分的な調査を行った。またIII b区は2面の遺構面の内上層で遺構を認めず、下層はIII a区の調査区を広げることによりIII a区に取り込んだため、記録上は存在しない。このため第4回調査区割りと実際の調査区範囲には不整合が生じる結果となっている。さてI・III a区の下層遺構面では弥生時代の遺構を検出した。特にIII a区はこの時代の中心居住域であったとみられるが、不整形の溝状遺構が多く検出しており、弥生時代においても小規模の土石流が発生する環境の中で生計を営んでいたことが判明した。

平成11年度の調査はIV・VII区の計1,050m²を対象に、発掘作業員を直接雇用する直営方式で行った。IV区は丘陵上の削平された平坦面で、時代幅の広い遺物が出土しているものの、遺構は確認できていない。削平された可能性は残る。現状は近世の墓地となって円形の墓坑が掘られ、無縁墓の墓石群が散乱していた。「寛永通宝」を多く表探しており、墓坑と一緒に供えられていたものであろう。VII区は現状ではVI区と同じ水田であったがより尾根側で高く、床土下で遺構面を検出した。これがVII S X 01検出面で、調査終了後の下層確認トレンチではこの下に遺構面はない。トレンチが遺構面まで届いていない可能性もあるが、トレンチでの遺物の出土はなく、この遺構面が土石流による堆積上にあることが確認された。急斜面で居住に適していなかったのであろう。

整理作業は整理員1名、整理補助員1名、整理作業員4名の体制で、平成15年4月～9月の6ヶ月間で実施した。調査で出土した42箱の遺物から、遺構の時期を示す遺物を中心に実測を行う遺物を抽出した。抽出率は、単純に1箱あたり12点の計算となる。中世の土師器が多くいたため、実測作業は順調にいった。また遺物中重要と判断したものについて遺物の比較による類例調査を行った。その結果、四国ではわずかしか出土が確認できていない中世丹波焼が遺物に含まれることが判明した。この結果は報告書中に反映させている。



第4図 調査区割り図 (1/1,200)

2 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査

	平成9年度		平成10年度		平成11年度	
香川県教育委員会文化行政課						
総括	課長 課長補佐	菅原良弘 北原和利	課長 課長補佐	小原克己 北原和利	課長 課長補佐	小原克己 小国史郎
総務	係長 主査 主査 主事	山崎 隆 星加宏明 (～5.31) 松村崇史 (6.1～) 打越和美	副主幹兼係長 係長 主査 主査	西村隆史 中村禎伸 三宅陽子 松村 崇	係長 主査 主査	中村禎伸 三宅陽子 松村 崇
埋蔵文化財	副主幹 文化財専門員 技師	渡部明夫 木下晴一 塙崎誠司	副主幹 係長 主任技師	渡部明夫 西村尋文 塙崎誠司	副主幹 係長 文化財専門員 主任技師	廣瀬常雄 西村尋文 森 格也 塙崎誠司
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						
総括	所長 次長	大森忠彦 小野善範	所長 次長	菅原良弘 小野善範	所長 次長	菅原良弘 川原裕章
総務	副主幹兼係長 副主幹兼係長 主査	前田和也 田中秀文 (6.1～) 西川 大	参考 副主幹兼係長 主査 主査	別枝義昭 田中秀文 西川 大 (～5.31) 新 一郎 (6.1～)	副主幹兼係長 副主幹兼係長 係長	六車正憲 田中秀文 新 一郎
調査	主任文化財専門員	大山眞充	参考 主任文化財専門員	長尾重盛 大山眞充	参考 主任文化財専門員	長尾重盛 大山眞充

整理作業

	平成15年度			
香川県教育委員会文化行政課		財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長 課長補佐	北原和利 森岡 修	所長 次長	中村 仁 渡部明夫
総務	主任 主査 主事	香川浩章 須崎陽子 八木秀憲	副主幹 係長	野保昌弘 多田敏弘
埋蔵文化財	副主幹 主任 文化財専門員 主任技師	大山眞充 片桐孝浩 佐藤竜馬 松本和彦	主任文化財専門員 文化財専門員 文化財専門員	真鍋昌宏 森 格也 古野徳久

第3節 調査の方法

1 地区割り（第4図）

全体を地形・調査着手順によって8つに分け、I～VIIの大調査区とした。次にその中を基本的に田畠1区画ごとに小調査区とし、英語小文字でaから順につけた。第2節1で述べたように、III a・b区については調査着手後に調査区境を変更したため、記録上はIII a区がIII b区北半部まで拡張し、これをIII a区としている。この結果III b区の調査区名を持つ遺構・遺物は存在しない。また、当初V区も小調査区に分ける予定でV a区で記録を作成したが、その後V b区以降は設定されなかったため、この報告書ではV区で調査区名を統一した。

2 記録類の作成

検出した遺構については、航空写真測量による1/50の縮尺の図面を作成した。更に詳細な記録を必要とする堅穴住居跡のような遺構については、手書き作業により適宜1/10～1/20縮尺の図面も作成した。写真は35mmサイズの白黒フィルム、リバーサルフィルム、カラーフィルム及び6×7判の白黒フィルムにより記録を残した。また、航空写真測量の際に、35mmサイズのリバーサルフィルム及び4×5判のリバーサルフィルムによる俯瞰写真も撮影した。焼付けのみであるが、航空写真測量に用いた各調査区の完全俯瞰写真も保管している。

第2章 立地と環境

周辺の遺跡については、これまで刊行された本シリーズの第47冊成重遺跡Ⅰ他で解説が行われている。ここでは紙数の都合と同シリーズでの重複を避けるため再録を省いたが、本遺跡を理解・研究する上で一読しておく必要がある。

立地で重要な点は、本遺跡が湊川右岸に開けた平野部でなく（ここに大集落である成重遺跡が位置する）、それより東の谷に入ろうとする位置にあることであろう。もちろん大集落が展開する余地はなく、なぜあえて小集落となってまでこの地点が居住域に選ばれたかの解明が課題となる。弥生時代にあっては、更に東の谷奥にありながら規模の大きい集落である池の奥遺跡まで含めた視野が必要となる。一方、中世においては集落の面積としては成重遺跡が大きく付近の中心かと目されながら、遺物内容では面積の狭い善門池西遺跡に遙かに及ばないという状況がまず目に入る。これを読み解くことから善門池西遺跡の中世集落（屋敷）のもつ特異性の解明への第1歩が始まる。

本報告では以上の課題を常に念頭に置きその解明に努めた。不明に思われる点は、記録を保管する埋蔵文化財センターで資料をごらんいただきたい。

第3章 調査の記録

第1節 土層序

善門池西遺跡は、自動車道路線が山すその尾根を横断するため、遺跡の中に谷と尾根を含んでいる。このため、遺跡全体を通して同一の土が堆積しそれにより遺構面や包含層の同時性を検討するという作業は困難なものとなっている。ここでは遺構面の標高・傾斜を追うことにより主として旧地形の復元を行うこととする。なお、土層番号とその位置は第4図に対応する。

土層①（第5図）

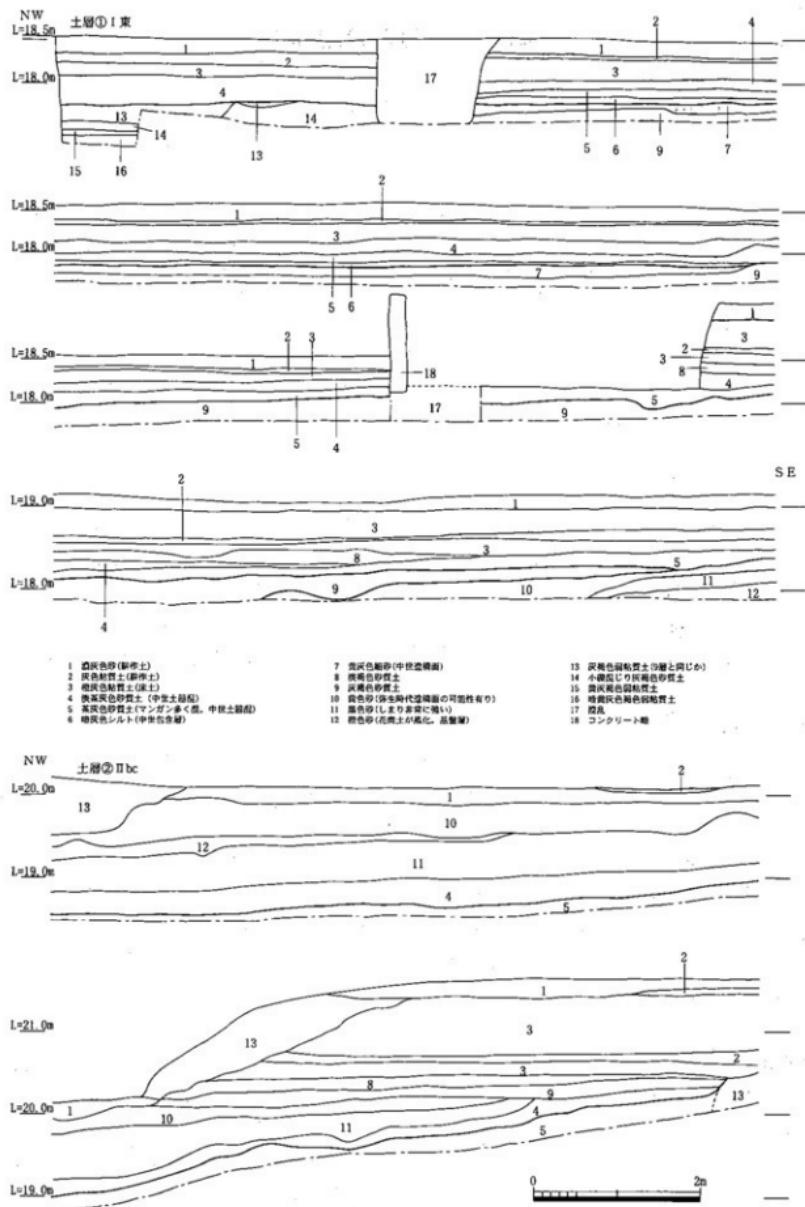
記録地点はⅠ区とⅢ区の境で、遺跡内の東側の谷が平地に出る場所になる。現代の耕作土・床土の下に厚さ30cmほどの粘性のある中世遺物の包含層があり、その下の砂層上面が中世の遺構面となる。この周辺では古代以前の遺構の検出がなくまた遺物の出土も少ないため、これより下層の遺構面をこの土層図では明確に把握できていない。しかし、Ⅲ区やⅠ区でも西よりでは下層遺構面を検出しているため、それにつながる遺構の希薄な遺構面が存在することになる。これを10層上面と考える。2つの遺構面は南東際で標高差がなくなり、これより谷奥の土層②にかけては弥生時代から中世は同一の遺構面となる。土層の傾斜は、下層遺構面は北の平野に向かって低くなり、上層遺構面は谷から平野に出ると標高が一定になるため（17.8m前後）、中世には安定した生活面が存在したことがわかる。12層は土石流によらない花崗岩の岩盤が風化した古い地層である。

土層②（第5図）

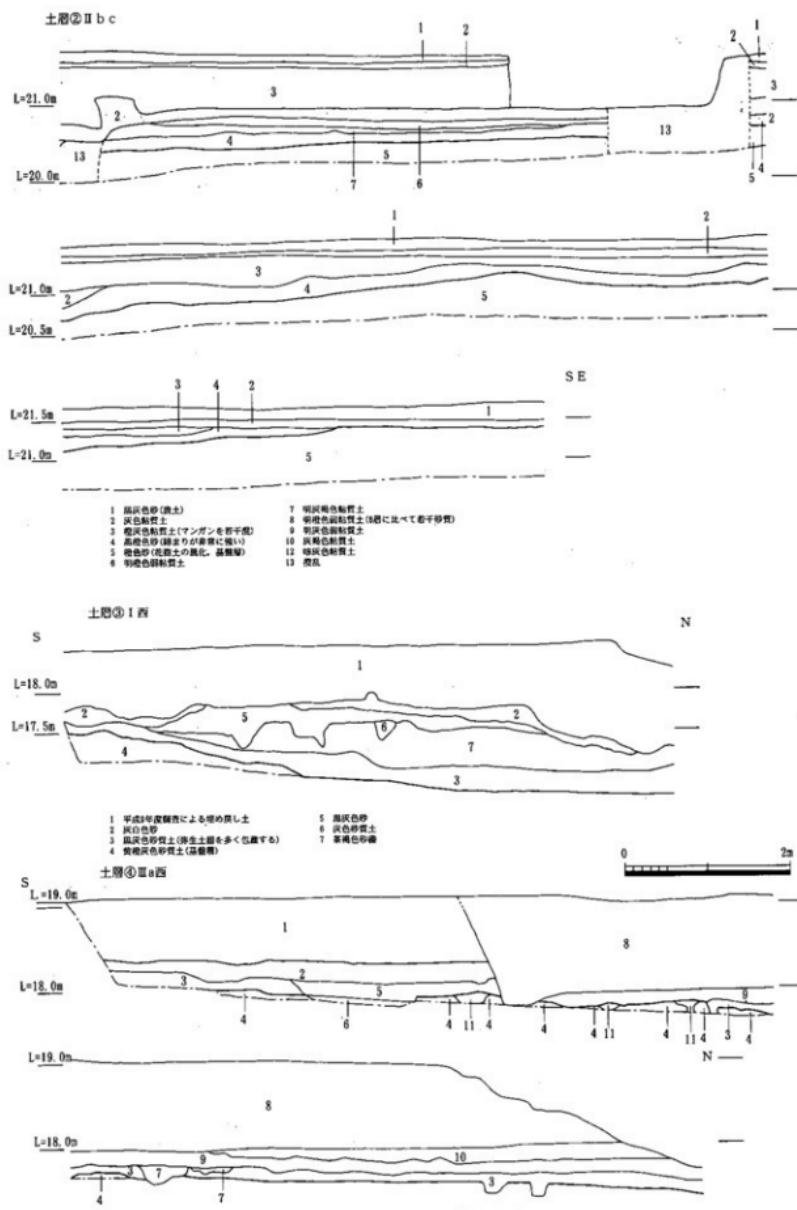
記録地点は遺跡内の東側の谷中央にあたる。土層①に続く遺構面はそれを構成する土層が花崗岩の風化土である。土層①南東端で弥生時代～中世の遺構面を形成した黄色砂はここではみあたらない。遺構面を覆う黒褐色砂は色・土質から弥生時代の土石流の可能性があるが、そうであれば土層①と②の境で再び遺構面が2面以上になることになる。但しこの上には明瞭な遺構面はない。Ⅱ区で出土している土器のほとんどが弥生時代のものであることから、古墳時代以降は生活域から外れていたため明瞭な遺構面が形成されていないと判断する。遺構面は45mの距離で2.5m標高が上がるという傾斜面である。包含層遺物で掲載した土器の出土した「弥生包含層」がどの層に対応するかの記録はない。

土層③（第6図）

記録地点はⅠ区西端である。平成9年度に上層遺構面のみ調査していったん埋め戻したものを、平成10年度に再掘削し、下層遺構面を調査した際に記録したものである。3層黒灰色砂質土は弥生土器の包含層で、この下が弥生時代の遺構面である。これを形成する4層黄橙灰色砂質土は土層①の10層黄色砂と同一のものであろう。この遺構面の傾斜が急であるのは尾根先端であるためであろう。当然生活域から外れ、遺構が少なく、ゴミなどの廃棄場所になったと思われる。



第5図 遺跡土層図①(1/60)



第6図 遺跡土層図②(1/60)

土層④（第6図）

記録地点は①やや東である。土層③同様、平成10年度に下層遺構面を調査した際に記録したものである。南側は初めての調査であったため耕作土・床土の下に中世に当たる上層遺構面が残っていた。弥生時代の下層遺構面（4層上面）は北に下がる斜面で、この間に2・3・5層の弥生土器の包含層が形成されている。4層は土層①の10層黄色砂や土層③の4層黄橙灰色砂質土と同一のものであろう。

土層⑤（第7図）

記録地点は④の北に当たる。2層黒色砂質土が弥生土器を特に多く含んでいた層で、遺跡北端のⅢa下SX02でも集石の間に詰まっていた。弥生時代の下層遺構面を形成する4層は東から西に傾斜する。おそらく土層①辺りが谷の最も深い地点に当たるのであろう。

土層⑥（第7図）

遺跡中央に南から張り出す尾根の上で記録した。2層上面が遺構面で、尾根に直交する方向で記録を作成したため両側が下がる。調査時には近世の無縁墓の墓石（斜線部分。図版8参照）が散乱していた。Ⅳ区で少量出土した遺物のほとんどは近世のものであるためこの墓群に関わるもので、それ以前の利用はなされていないものと考えるが、弥生土器や中世土器も若干含まれる。

土層⑦（第7図）

記録地点はV区とVI・VII区の境で、遺跡内西側の谷の出口に当たる。中世に当たる上層遺構面は標高19.4m前後で安定している。I区の中世の上層遺構面とは2m近い標高差がある。弥生時代に当たる下層遺構面は標高18mあたりで、この間は厚い包含層に覆われている。15層暗橙色砂はVIaSD03の続きであり、また東部でも認められる。このため記録を作成したV区調査時には遺構面を構成する土のひとつとして認識されることとなり、VI区とは記録の基準に差が出ている。22層灰褐色砂質土は純粋な弥生時代の包含層である。下層遺構面は東部では把握できなかったが、この時代の遺構がV区で認められないように、生活域から外れていたため明瞭な遺構面が形成されていないと判断する。

土層⑧（第8図）

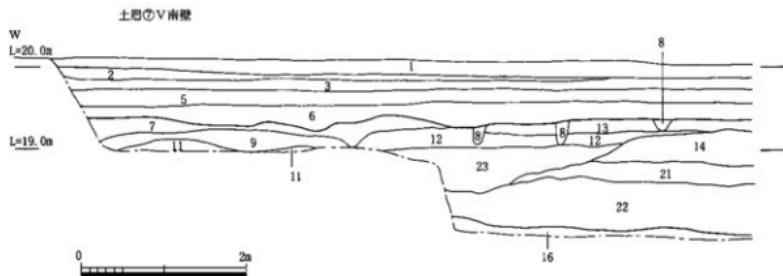
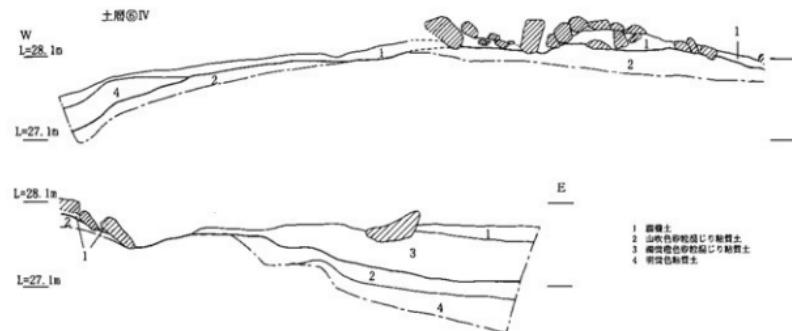
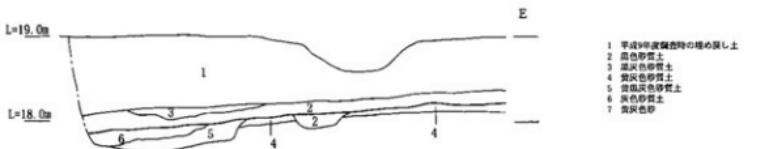
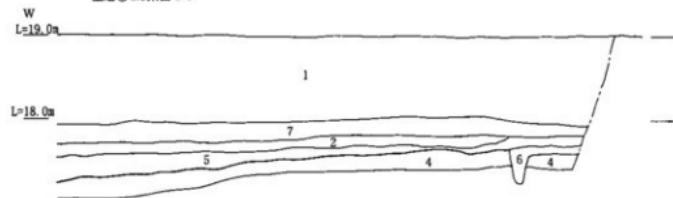
遺跡内西側の谷奥側で、VIb区南境に当たる。遺構面は21.1m前後で灰色砂層系の土の上面である。これを覆う土も砂層系であるが、拳大～人頭大の礫・岩を含んでおり、土石流の可能性が高い。遺構面が中央から東へ急に落ち込んでいるのは、この土石流で削られた可能性がある。VIb区は不整形土坑を中心となっているように出土遺物量も少なく、生活域から外れていたと考える。

土層⑨（第9図）

遺跡内西側の谷奥側で、⑧の西続きに当たる。谷屋池の上にあるため、この谷では本来最も深い

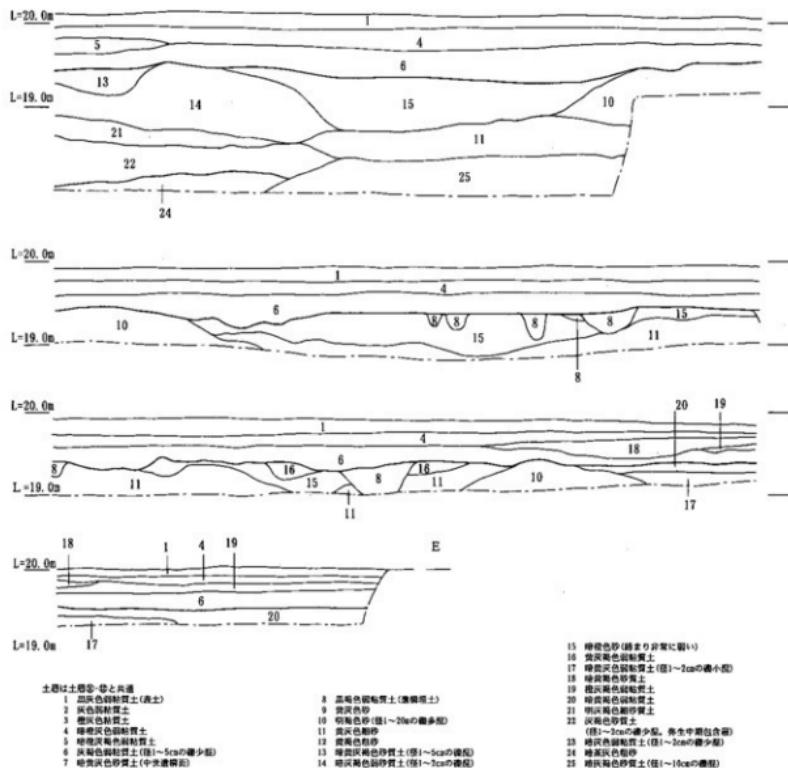
- 1 黒褐色土と黒土
 2 黄褐色砂質土(発生土層を包囲する)
 3 黄色砂質土(発生土層を包囲する)
 4 黄褐色砂質土(基盤層)
 5 黄褐色砂質土(発生土層を包囲する)
 6 黄色砂質土

土層⑤Ⅲa東西Tr

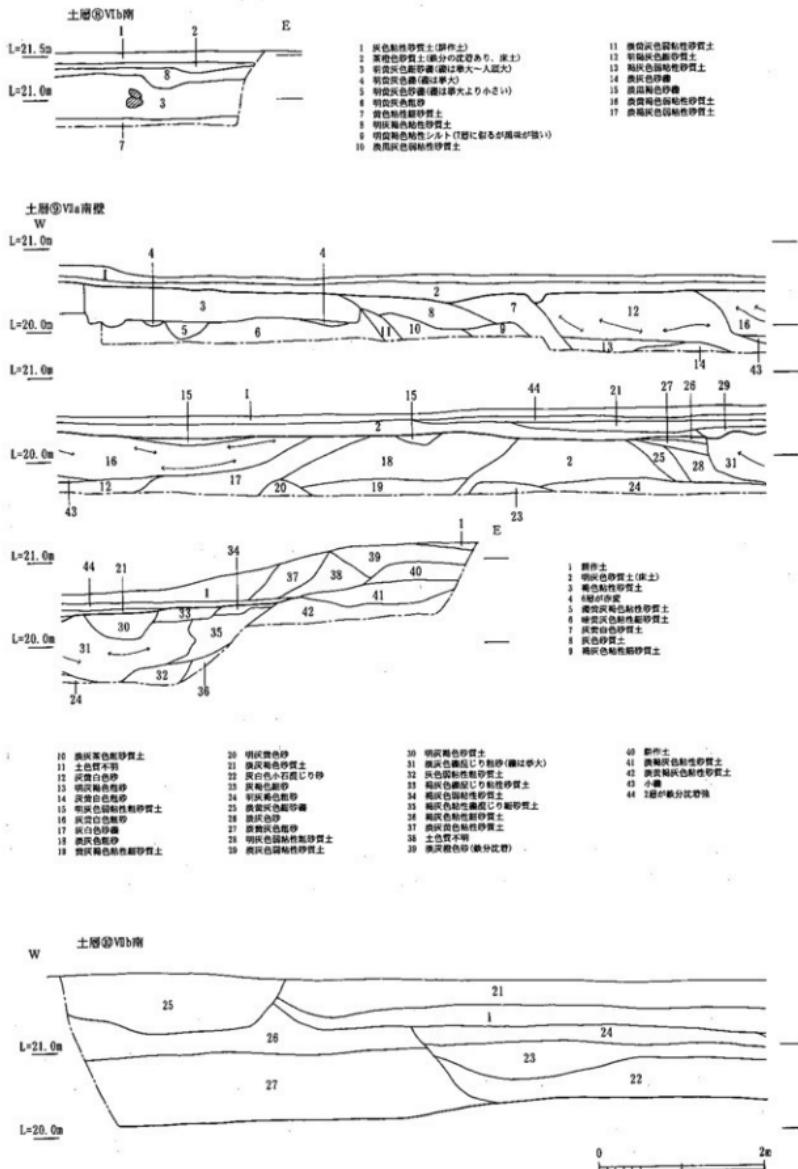


第7図 遺跡土層図③(1/60)

土層②V南壁



第8図 遺跡土層図④(1/60)



第9図 遺跡土層図⑤(1/60)

位置に当たると考える。これを反映して、明瞭な遺構面は把握できず、また実際遺構もほとんど見当たらない。堆積土は粗砂が多く、両矢印部はラミナ状の分層ができる。川の痕跡であり、粗砂は流れの速さを示し土石流ともとれる。一方西端の3層が平面図との整合からVII a上SH 03の埋土であるなら、遺構面は標高 20.6 mとなる。但し、⑧の遺構面より高く矛盾が生じる。また3層を川が削っており、川はVII a上SH 03の埋没した後に多くの砂を流したことになる。

土層⑩（第9図）

記録地点は遺跡内西側の南西奥であり、調査区外には南西に尾根が張り出しているため、本来北向きの斜面になると予想される。検出した遺構面は標高 20.2 m前後で比較的安定しているが、この面の埋没は若干低い東側に最初ゆっくりと土が溜まってゆき、その後一気に 1 m近い厚さで砂礫が堆積していったと砂の粒径から判断した。VII b 区に遺構が少ないので、このような一気の埋没が起りうるような不安定な地形による可能性もある。

土層⑪（第10図）

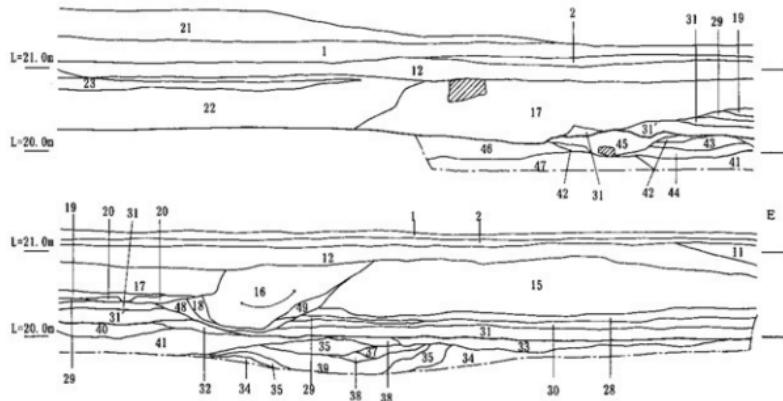
土層⑦東端から北に向けて記録を作成した。表土除去後の記録であるため中世に当たる上層遺構面が最も上の位置にある。この下に古墳時代や弥生時代の包含層があるが水平堆積ではなく、急激な土砂の堆積が発生しやすい不安定な地形であったと判断する。下層遺構面の可能性を考えた線は著しい凹凸を示す。いずれも土層⑦で判断を下したように生活域とはなりえない状況を示している。

土層⑫（第11図）

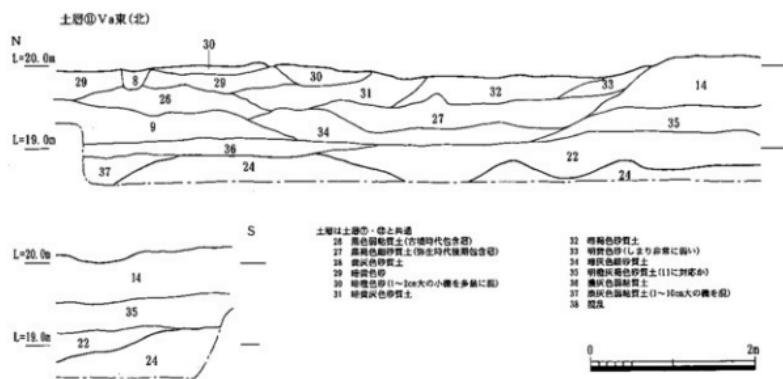
土層⑦西端から北に向けて記録を作成した。中世の上層遺構面は北部で少し低い標高 19.0 mになる。下層遺構面は北に向かって傾斜し、南部で標高 18.8 m、北部で 18.1 mとなる。この上に弥生時代や古墳時代の包含層が堆積している。土層⑦・⑪・⑫の関係から下層遺構面は全体的には土層⑪から⑫へも傾斜し、やはり現谷屋池が最も低いと予想される。とはいえこの傾斜は一定ではなく、VI a 区と接する部分の中央が標高 18 mと最も低く、これより⑫へ 0.8 mも急に高くなる。この窪地は後々まで残っていたと思われ、これに向かってVI a SD 01・03・04 の土砂が流れ込んできたと考える。

土層⑬（第11図）

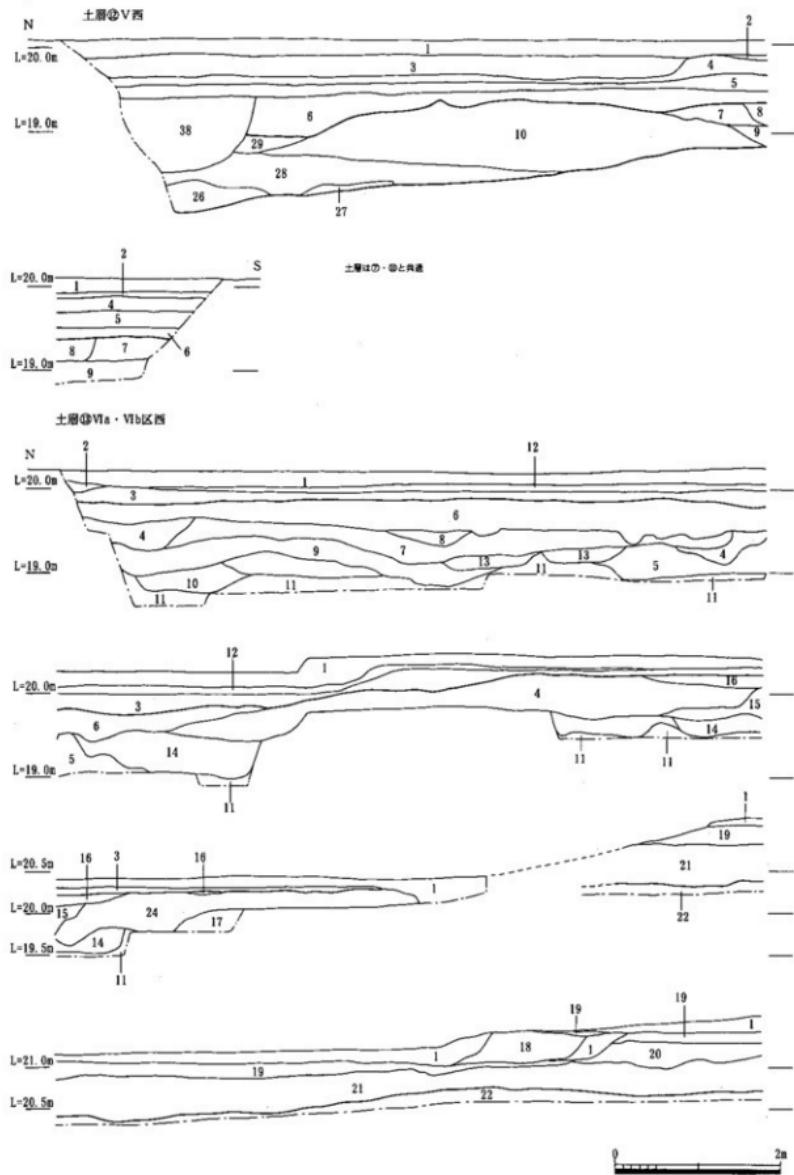
1～3層の耕作土・床土直下に唯一の遺構面が存在する。北部で標高 19.8 m、12 m南の1段高い水田との境付近から緩斜面となり、南端は標高 21.0 mとなる。VI・VII区では尾根側で一段高く土石流の心配もなくかつ谷出口付近で傾斜も安定している理由で、中世にはⅤ区北部が居住域として選ばれたと考える。⑫で認められた下層遺構面は、ここでは存在しない。理由としてはⅤ区とVI a 区境の未調査部分で下層遺構面が高さ 1 mの急斜面となって上層遺構面と合体したか、遺構面の検出ミスが考えられる。前者は考えにくいが、全くありえないことではない。後者とすれば、4・7層と9層がそれぞれ⑫6層と⑫7層に似ており、この境界の線が下層遺構面と考えられなく



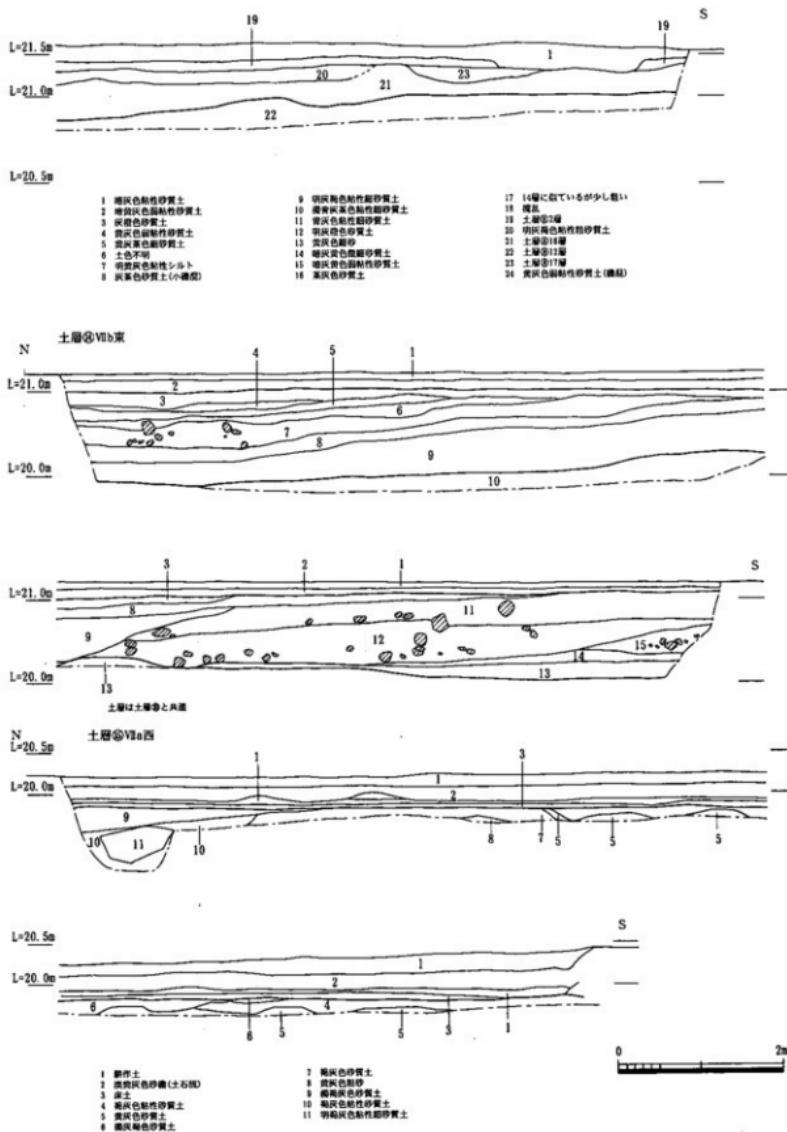
土層付土壤名と共通	
1	褐灰白色砂質土(砂質土)
2	洪積色砂質土(粉分性砂, 土)
3	褐灰黑色砂質土
4	褐灰色砂質土
5	褐灰黑色砂
6	褐灰黑色(あるいは褐色)の風化土
7	褐色色砂(砂の大きな塊状)
8	褐灰色砂(砂の塊状)
9	褐白色砂(砂の塊状)
10	黄褐色色砂
11	褐灰黑色砂質土(風化土)
12	褐灰黑色砂(砂の塊状)
13	褐灰白色砂質土
14	褐灰黑色砂(砂)
15	深褐色色砂(砂多)
16	褐色色砂
17	褐白色砂質土
18	褐褐色色砂
19	褐褐色色砂
20	褐灰黑色砂
21	褐灰白色
22	赤褐色色砂質土(砂大の塊)
23	褐褐色色砂
24	褐褐色色砂
25	褐褐色色砂(風化の可能性有り)
26	褐灰白色砂(風化の可能性有り)
27	褐褐色色砂(風化の可能性有り)
28	褐褐色色砂(砂の塊状)
29	褐灰白色砂(砂)
30	褐褐色色砂(砂の塊状)
31	褐褐色色砂(砂少)
32	褐褐色色砂
33	褐褐色色砂(砂少)
34	褐褐色色砂(砂少)
35	褐褐色色砂(砂多)
36	褐褐色色砂(砂少)
37	赤褐色色砂
38	褐灰白色砂
39	褐赤褐色砂質土(5cm~5cmの塊)
40	褐褐色色砂(5cm~10cmの塊)
41	褐褐色色砂(5cm~10cmの塊)
42	褐褐色色砂(5cm~10cmの塊)
43	長褐色色砂(5cm~10cmの塊)
44	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
45	褐色色砂(5cm~10cmの塊が、砂少)
46	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
47	褐色色砂質土
48	褐色色砂(5cm~10cmの塊が、砂少)
49	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
50	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
51	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
52	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
53	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
54	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
55	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
56	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
57	褐色色砂(5cm~10cmの塊)
58	褐色色砂(5cm~10cmの塊)



第10図 遺跡土層図⑥(1/60)



第 11 図 遺跡土層図⑦(1/60)



第 12 図 遺跡土層図⑧ (1/60)

もない。これにしても北から 12 m の地点で上の遺構面と合体する。VI a SH 01 の断面の標高が、この遺構面が中世同様弥生・古墳時代の遺構面でもあることを示している。

土層⑭（第 12 図）

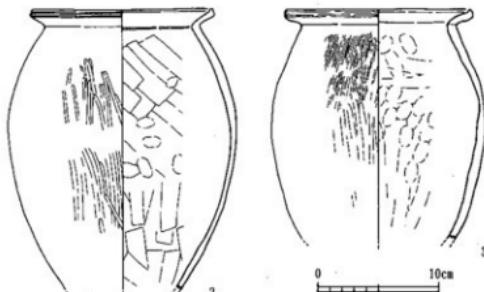
土層⑩の東から北へ向けて記録を作成した。ここでは 6・7・11・12・15 層の多量かつ大きな礫が目に付く。いずれの土層も低いほうへ向かって傾いており、土層⑨につながる川もしくは土石流であることがわかる。これらの上下、標高 21 m と 20 m 付近で 2 つの遺構面を認識している。標高 21 m 側は遺構を検出していないため、土石流の最終埋没後の高さを示している。20 m 側は VII b S X 01 を検出した遺構面である。

土層⑮（第 12 図）

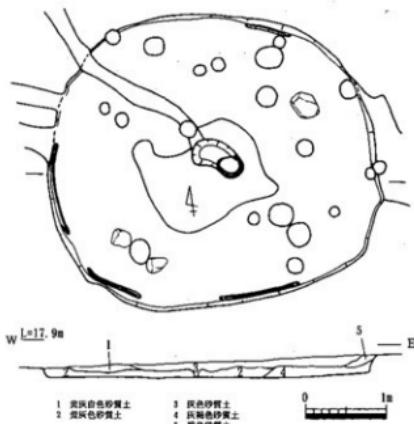
谷屋池西側で、遺跡北西端に当たる地点で記録した。池の西に当たることからこの付近は東向きの斜面であることが予想される。遺構面は 1 つで標高 19.8 m である。土層⑨・⑩・⑭・⑮ から見る限り、VII 区の遺構面は 1 つで、標高 20 m 前後で比較的安定していることになる。調査時に VII a 区で下層遺構面として標高 19.3 ~ 19.7 m でピット数十を検出しており、土層から見た単一の遺構面と矛盾する。ピットからは弥生土器細片が出ているため、標高 20 m 前後の遺構面での掘り残しを全体を掘り下げることにより検出できたものと考えておきたい。



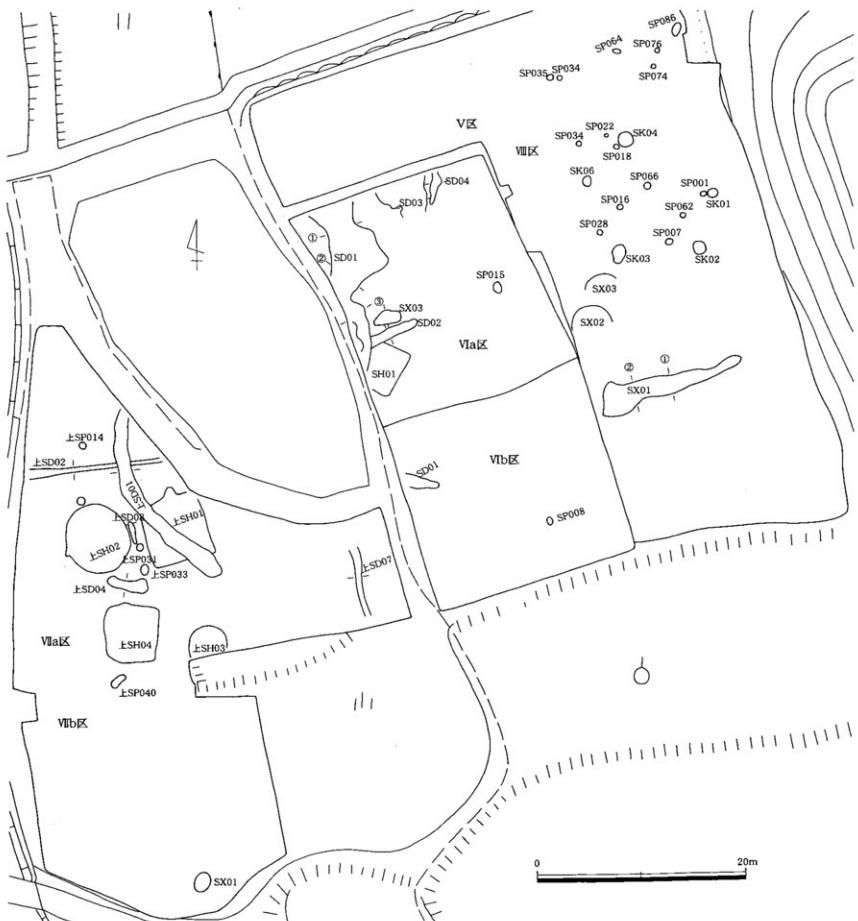
第 13 図 ピット出土遺物
実測図①(1/4)



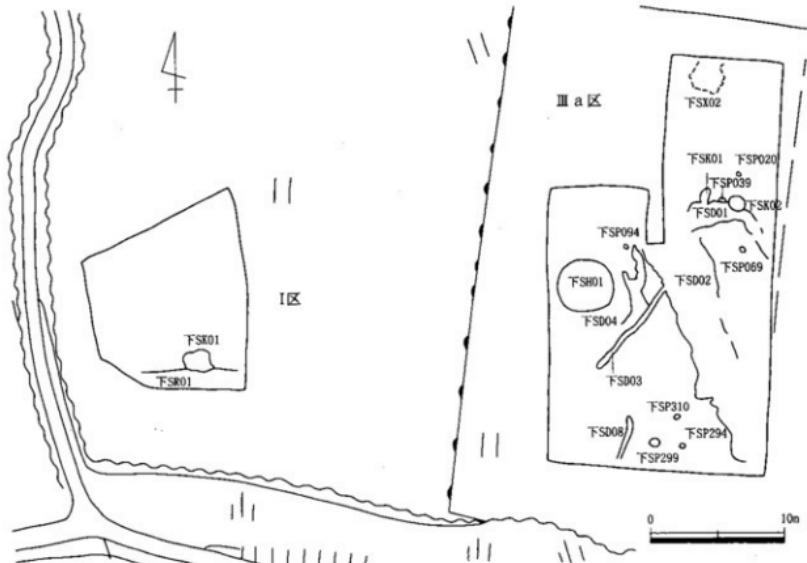
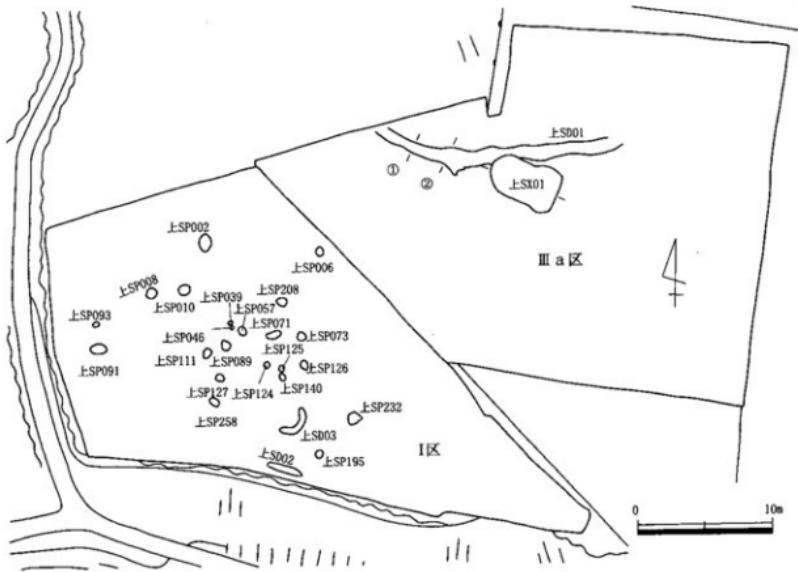
第 14 図 III a 下 S H 01 出土遺物実測図(1/4)



第 15 図 III a 下 S H 01 平・断面図(1/60)



第16図 造構配置図①(1/375)

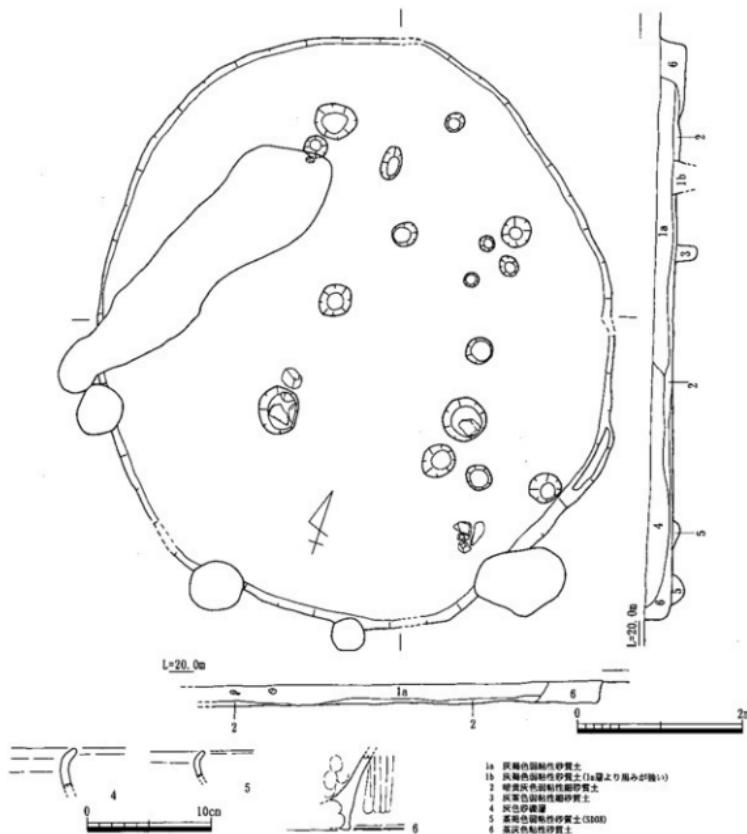


第17図 遺構配置図②(1/375)

第2節 遺構・遺物

1 縄文時代の遺物（第13図）

1はVII S P 09より出土した深鉢である。口縁は波状に湾曲する。口縁外が厚くなり、そこに弧状を組み合わせた文様を細いヘラで描く。後期中頃の津雲上層式～彦崎K1式にあたると考える。表面はやや磨滅し破片1点のみでもあり、このピットへは混入と考える。



第18図 VIIa上SH02平・断面図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)

2 弥生時代の遺構・遺物

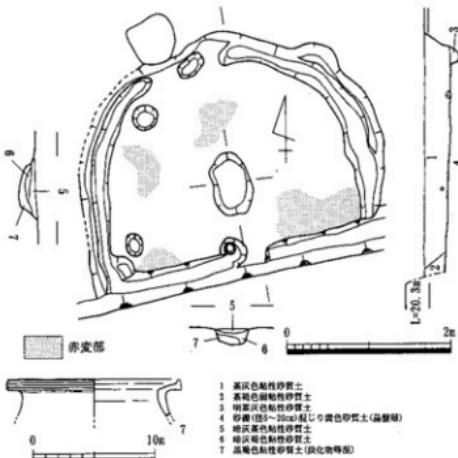
III a 下 SH 01 (第 14・15 図、図版 13・20)

III a 区下層中央で検出した。円形で、壁溝が部分的に巡る。伴う柱穴は見当たらないが、中央に楕円形のすり鉢状に埋む穴があり、これが炉とも考えることができる。但し、埋土や炭化物の有無の記録がなく断定はできない。弥生土器・サヌカイト・混入と見られる古墳時代の土師器が少量出土した。

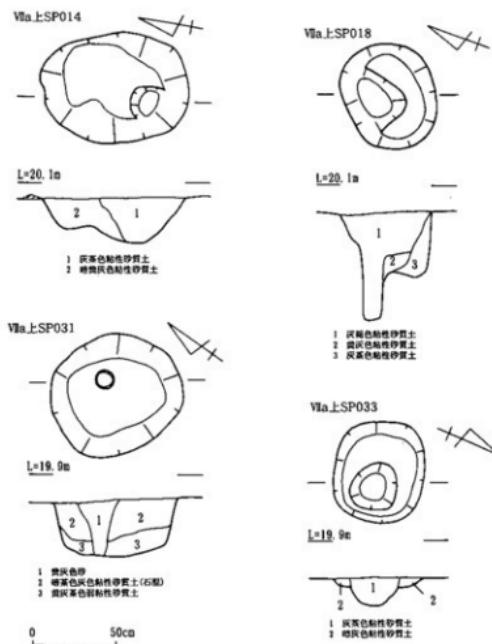
2・3 は甕である。口縁は外反し、端部を上に摘み上げ広げた端面に沈線が走る。胴部最大径は口径より大きい。3 は胎土に金雲母を少量含み、外面に煤が付着する。いずれも III-1・2 様式頃のものであり、III a 下 SH 01 はこの時期に属すると判断する。

VII a 上 SH 02(第 18 図、図版 13)

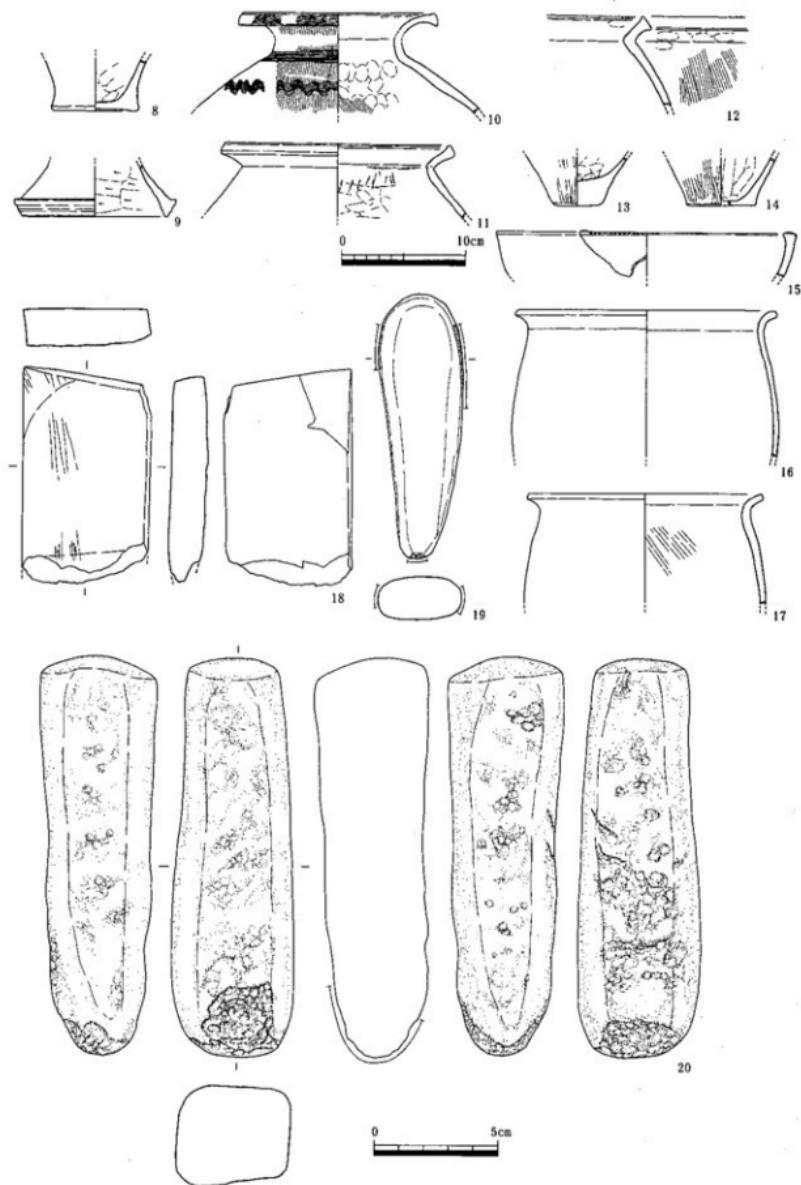
VII a 区中央で検出した不整円形の竪穴住居跡である。壁溝はない。住居内には十数かのピットがあるが深さも不揃いで、いずれが主柱穴か確定できない。南寄りの 2 つのピット底に礫石があるためこの 2 つを主柱穴の一部と考えることもでき、また平面図上に南北に長い長方形に組める 6 つのピットとも考えられる。また炉穴や炭化物の集中も認められなかった。遺物は混



第 19 図 VII a 上 SH 03 平・断面図(1/60) 出土遺物実測図(1/4)



第 20 図 ピット平・断面図(1/30)



第21図 ピット出土遺物実測図②(1/2、1/4)

入と見られる縄文土器・弥生土器・サヌカイトが少量出土した。ほとんどが磨滅した小片である。4・5は口縁の外反が弱く、最大径は胴中位にありそこから前期前半の壺の可能性がある。6は甕底である。中期に下る可能性もある。4・5から前期前半の竪穴住居跡と考えることもできるが、破片が小さく磨滅しておりかつ少量であることから、甕底の示す時期をこの竪穴住居跡の属する時期と考えたい。

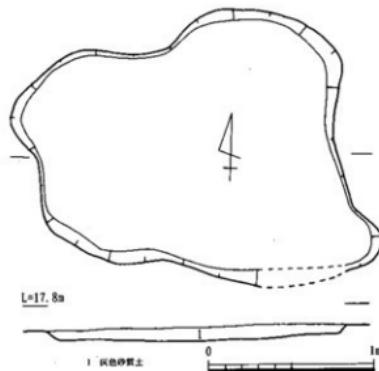
VII a 上 SH 03 (第 19 図、図版 14)

VII a 区南壁際で検出した。

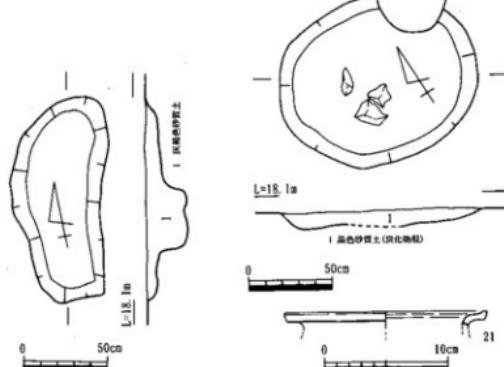
一部は調査区外に広がる。円形の竪穴住居跡で壁溝が巡る。基盤層は礫が多く含んでいるため、この露出により小さな凹凸が著しい。ここでも主柱穴は確定できない。壁溝内側の 2 つをその一部と考えたい。中央には楕円形の炉穴がある。そこに炭が堆積している。このほか調査者により赤変部とされたものが 4 カ所に広がるが、火災家屋でもなく原因は不明である。弥生土器少量とサヌカイト製石包丁の破片 1 個、緑泥片岩製の磨製石斧の破片 2 個などが出土した。7 は甕である。口縁端に凹線が走り、IV 様式から V-1 様式ごろのものと判断した。竪穴住居跡もこの時期に属すると考える。

VII a 上 SP 014 (第 20 図)

VII a 区北部で検出した。柱部分のみ深い。磨滅した弥生土器がわずかに出土した。出土量が少なく確定できないが、遺構の時期をとりあえずこの土器の時期においておく。



第 22 図 I 下 SK 01 平・断面図 (1/30)



第 23 図 III a 下 SK 01 平・断面図 (1/30) 第 24 図 III a 下 SK 02 平・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)

VII a 上 S P 018 (第 20 図)

VII a 区北部で検出した。北側が小さく 1 段深くなる。磨滅した弥生土器がわずかに出土した。出土量が少なく確定できないが、遺構の時期をとりあえずこの土器の時期においておく。

VII a 上 S P 031 (第 20 図)

VII a 区北部で検出した。磨滅した弥生土器がわずかに出土した。出土量が少なく確定できないが、遺構の時期をとりあえずこの土器の時期においておく。



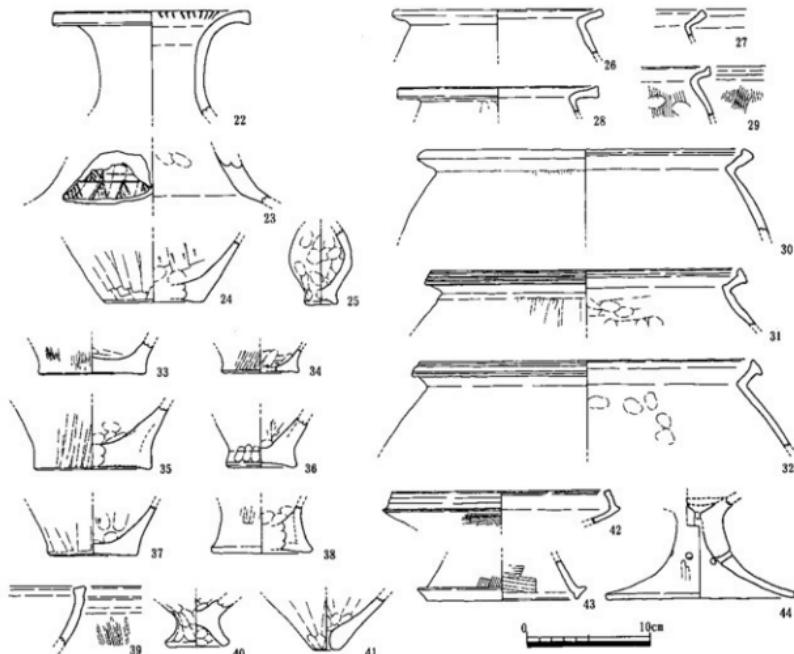
第 25 図 III a 下 S X 02 平・断面図(1/2)

VII a 上 S P 033 (第 20 図)

VII a 区北部で検出した。南隅がやや深い。磨滅した弥生土器がわずかに出土した。出土量が少なく確定できないが、遺構の時期をとりあえずこの土器の時期においておく。

ピット出土の弥生時代の遺物 (第 21 図・図版 20)

8・9は I 上 S P 195 から出土した。8は甌の底、9はIV-2・3 様式期の高杯脚部である。10はIII a 下 S P 094 から出土した壺である。口縁、頸、肩に櫛描沈線文を描く。III-1 様式期のものである。11はIII a 下 S P 039 から出土したIII 様式期の甌である。12はIII a 下 S P 310 から出土した甌である。III-1 様式期頃のものである。13はIII a 下 S P 020 から出土した甌の底である。底が厚くやや不安定である。14はIII a 下 S P 299 から出土した甌の底である。13・14とも中期に属するを考える。15はVI b S P 008 から出土したIII-1 様式期の鉢である。口縁端の外面側に刻み目をいれ、端部上面には円形浮文を貼り付けている。16・17はVII a 上 S P 040 から出土した甌である。特徴である刻み目や削り出しの段がないが、口縁の屈曲が弱いため前期のものと考える。このピットからは他に須恵器片が出土した。18はVII S P 028 より出土した扁平片刃石斧である。シリト岩製と思われる。擦痕の可能性のある傷が左面に多数入る。刃先は折れている。他に土師器



第 26 図 III a 下 S X 02 出土遺物実測図①(1/4)

片が出土している。19はⅢa下S P 294から出土した砂岩製の敲き石である。下端と両側面上部に敲打痕が残り、2種類の敲き方に用いられたことがわかる。20も敲き石で、Ⅲa下S P 069から出土した。下端は斧状に扁平に尖り気味で、敲きによる割れ・剥離が著しい。上面のみ磨いているのか表面が滑らかである。

以上のうち新しい時期の遺物が出土していないピットの所属時期は、とりあえず弥生時代としておく。

I 下SK 01 (第22図)

I区下層南部で検出した。浅く不定形の土坑で、中から少量の弥生土器が出土した。

Ⅲa下SK 01 (第23図)

Ⅲa区下層北部で検出した。小さく深い土坑で、中央のみやや深い。中から弥生土器がわずかに出土した。

Ⅲa下SK 02 (第24図)

Ⅲa区下層北部で検出した。小さく深い土坑で、埋土は炭化物を多く含んでいる。弥生土器・サヌカイトがわずかに出土した。21は壺としたが甕の可能性もある。口縁端は上につまみ上げている。Ⅲ様式に属すると考える。わずかに出土した遺物は細片で磨滅しており、必ずしも土坑の時期を示すもの

ではない。

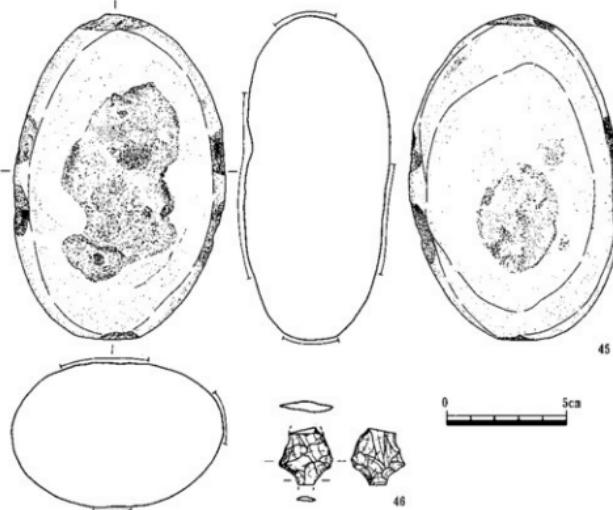
Ⅲa下SX 02

(第25～27

図、図版14)

Ⅲa区北端で検出した。

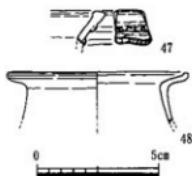
調査時に「集石」と呼んでいたものである。およそ径2.5mの範囲に石が集中し、石の隙間に土器片が含まれていた。高さは40cmで、中央がわずか



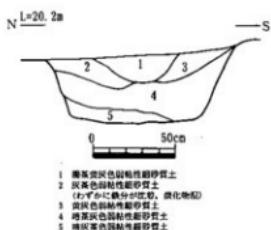
第27図 Ⅲa下SX 02 出土遺物実測図②(1/2)

に高い。石の大きさは不揃いで、分布と大きさの間に相関関係はない。また配置を感じさせる並びもない。土器は破片ばかりで、こちらも分布にまとまりがない。つまり石が集中しているという以外に人間の意志は感じられない。断面を見ると石と石の隙間にはかなりの量の土がつまり、石の集中にもそれ自体を目的として積極的に集めたようには見えない。むしろ土の堆積と平行して石が積み上げられていったような感じを与える。その土も分層されているものの上下大きな差なく、自然堆積は明らかである。更にこの土と石を除去した下には掘り込みもなかつた。よって石の散漫な集中だけを目的としたこの遺構に対しては、周辺の基盤層土に礫を多く含むため、地均し・遺構の掘削等の際に地中より出てきた礫が集落の端の低い地点にまとめて捨てられたような状況を想定しておく。

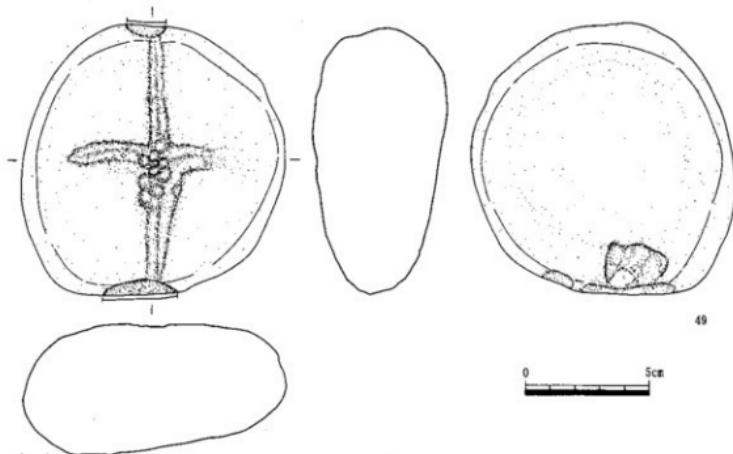
28 ℥コンテナ1箱程度の弥生土器・石器・サヌカイト片、混入であろうが須恵器・中近世陶器が少量出土している。直下(分層不可能)の包含層(黒色砂質土)の遺物を多数含んでいると思われる。22~25は壺である。22は直線に並べた櫛による刺突文を口縁内面に施している。Ⅱ~Ⅲ様式に属する。23は首と胴の境の肩部で、沈線で区切った上下に連続する三角形の文様を描いている。終末期によく見られる文様で、形態もこの時期のものとしてよいと考える。24は底部である。外面の板ナデは粗く、少しヘラ削り気味となっている。25は手



第28図 III a 下 S D 01
出土遺物実測図(1/4)



第29図 VI a S X 03 断面図(1/30)



第30図 III a 下 S D 03 出土遺物実測図(1/2)

捏ねの小型品である。26～38は甕である。26～32は甕の口縁で、26～28の口縁端を頭部から折り曲げたままのものやわずかに上につまみ上げているものはⅢ様式に含まれる。26・28は磨滅が著しい。29～32は口縁端を上、一部は下までもつまみ出して広げ、31・32は広げた面に凹線を施す。IV-1・2様式期に属する。26～28に比べ、頭部の屈曲とそれによる胴の張りが強い。33～38は底部である。34内面は最下部位までヘラ削りを行っている。36は蓋の可能性もある。39・40は鉢である。39は口縁端の内外への広がりが弱い。Ⅲ様式に属するが、外面の凹凸を広い凹線とすればⅣ様式にまで下る。40は調整が指押さえのみでV様式後半のものであろう。41は斷である。V様式にみられる。42～44は高杯である。42・43はIV-2・3様式期に属する。44は一見儀式用に杯底に当初から穿孔した高杯とも見えるが、筒を絞った際に残った穴で、本来この上に杯底をふさぐ円盤状粘土を詰めていたと判断した。V-3様式期に属する。45は敲き石である。両平坦面、縁辺4ヶ所を敲きに使用している。46は石鎌で、先が欠ける。

遺構の時期の検討に際し上記のような遺構の性格の判断に立てば、小面積の土地の開拓という比較的短い時期幅の中で「集石」が形成されたことになろう。遺物を見ると包含層遺物を含むとはいえ、時期幅が大きい。遺物に従い遺構の時期幅を大きく取ることは、この小さな石捨て場が世代を越えて認識され続ける必要があり、これはやはり考えがたい。V様式後半が「集石」の時期であり、それ以前の土器は包含層遺物と考えておく。

III a 下 S D 01 (第 28 図)

III a 区下層東部で検出した。深さは10cm弱で、溝底は付近の地盤同様西へ低くなり、III a 下 S D 02 に合流する。弥生土器・サヌカイト片を少量出土した。47は弥生土器の壺で、口縁外面に2条の刻み目凸帯を貼り付ける。48は弥生土器の甕で、口縁端が上を向き曲がる。ともにⅢ-1様式期のものであるが、磨滅が著しい。

VI a S X 03 (第 29 図)

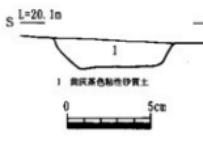
VI a 区中央西よりで検出した不定形で深い土坑である。中からは弥生土器がわずかながら出土したため弥生時代に属すると判断したが、それ以降の時期の可能性も残す。

III a 下 S D 03 (第 30 図)

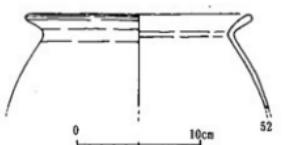
III a 区下層中央部で検出した。深さは10cm弱で溝底の標高はほぼ一定しているが、北



第31図 III a 下 S D 04出土
遺物実測図(1/4)



第32図 VII a 上 S D 04 断面図(1/30),
出土遺物実測図(1/2)



第33図 VII a 上 S D 08 出土遺物
実測図(1/4)

東でⅢa下SD 02とつながることからそちらに流れ込むと思われる。Ⅲa下SD 04など周囲の溝との新旧は明らかでない。49は石錐で、対向する側縁に抉りを入れ、平坦面片側にも浅い溝をつけて紐が外れないようにしている。他に弥生土器が少量出土している。

Ⅲa下SD 04（第31図）

Ⅲa区下層のⅢa下SH 01東側で検出した。不整形を呈し、深さは10cm弱で、溝底は付近の地盤同様北へ低くなる。弥生土器がわずかに出土した。50は甕である。口縁端が著しく上に伸びる。Ⅲ-3様式期頃に属する。Ⅲa下SD 04もこの時期に属すると考えておく。

Ⅶa上SD 04（第32図）

Ⅶa区上層の中央で検出した長さ4mの溝である。51は平基式の石錐である。他に磨滅した弥生土器が少量とサヌカイト片1が出土した。とりあえず遺物の時期からこの溝も弥生時代に属すると考えておく。

Ⅶa上SD 08（第33図）

Ⅶa区上層のⅦa上SH 01とⅦa上SH 02の間で検出した長さ2mの溝である。磨滅した弥生土器がわずかに出土した。52は甕である。口縁形態と最大径の位置からⅢ-1様式期頃のものと考える。とりあえず遺物の時期からこの溝もこの時期に属すると考えておく。

Ⅲa下SD 02（第34・35図、図版21）

Ⅲa区下層東部で検出した。溝底は付近の地盤同様北へ低くなるが、南端で深さ30cm、北端では深さ50cmになり、この中に黒灰色砂質土が堆積している。一方溝の位置と周辺の地形の関係を見ると、溝は両側の尾根に挟まれた谷のちょうど真ん中で最も深い地点に位置すると考えられる。溝の方向もこの谷の方向に一致するため、溝というより土石流とすべきと考える。堆積土も埋め立て或いは長期的な埋没を示さず下流ほど厚く堆積することから、この判断と矛盾しない。

28ℓコンテナ3箱分の弥生時代中期ごろの土器・打製石包丁等片10・サヌカイト片200・練泥片岩製石斧片2・結晶片岩2・鉄製刀子片1が出土した。

53～94は弥生土器である。53～70は壺である。53は口縁端の平坦面を上下に広げ、凹線を描く。54は口縁上面に櫛描きによる格子文と穿孔・端部に刻み目を入れて、豊富に飾っている。55は無頸壺で、凹線を3本引いた後に刻み目を入れている。56も無頸壺で、凹線の下に櫛描きによる波状文と直線文を引いている。57は胴に凹線を連続して多数入れている。58～60は小型の壺口縁である。逆さにすると製塙土器に形態が似るが脚部調整が丁寧で頸が長いため、それではないと判断した。61～64は口縁端が内側に広がりながら水平に上を向く。62は頸部に刻み目凸帯を貼り付け、64は凸帯の上に更に縦方向に紐状の粘土を貼り付けている。65～67は口縁端が斜め外を向き、頸部のくびれが長い。67は刻み目凸帯を貼り付けている。68は口縁端の平坦面を下に広げ、細く浅い刻み目を入れる。頸部には段ができる。削り出し或いは刷毛目の起点として生じた可能性もあるが、磨滅のため詳細は不明である。69は口縁が水平に開き、端部を上につまみ上げた

ためその外側が凹線状に窪んでいる。71～81は甕である。71～73は口縁端つまみあげの形状が69に似る。74～76は口縁端が上に伸びる。77～81は底部である。81は上げ底で外面を丁寧に磨いている。83～88は高杯である。83は上向きの口縁端に凹線を引く。84は浅く広い皿状の杯である。85は角閃石を多く含む下川津B類土器である。86～88は脚部である。86は沈線を上部に引き、裾もヘラで刻み目を入れている。穴は中途で止め貫通させない。87・88は裾を外へ折り返したように鋭く摘み上げている。88はヘラで大きく細い透かしを入れている。82・89～94は鉢である。82は口縁上面及び外面に凹線を引いている。89・90は手捏ねの小型品である。90は逆さで蓋になる可能性もある。91はバケツ状の形態をしている。92・93も手捏ねである。94は外面で刷毛目が異なる。特に外面は粗い刷毛目を用いている。以上はほとんどがⅢ～Ⅳ様式の時期幅の中に収まる。70・85・94はV様式のものである。

95～116は石器である。95～110は石鎚で、凸状の基部を持つ。96は基部がつぶれ磨滅している。98は側縁の細部調整が美しく仕上がっている。101は表面が少し風化している。107・108は基部が平らである。110は幅が狭く、石鎚の可能性もある。111は石鎚である。112は石包丁である。上の側縁はつぶれている。113～116は石斧である。113は一点鎖線右の黒塗りが使用による磨滅部分である。115は上の残存面が光っており、擦痕の可能性がある。116も木とこする部分に擦痕らしき痕跡が認められる。

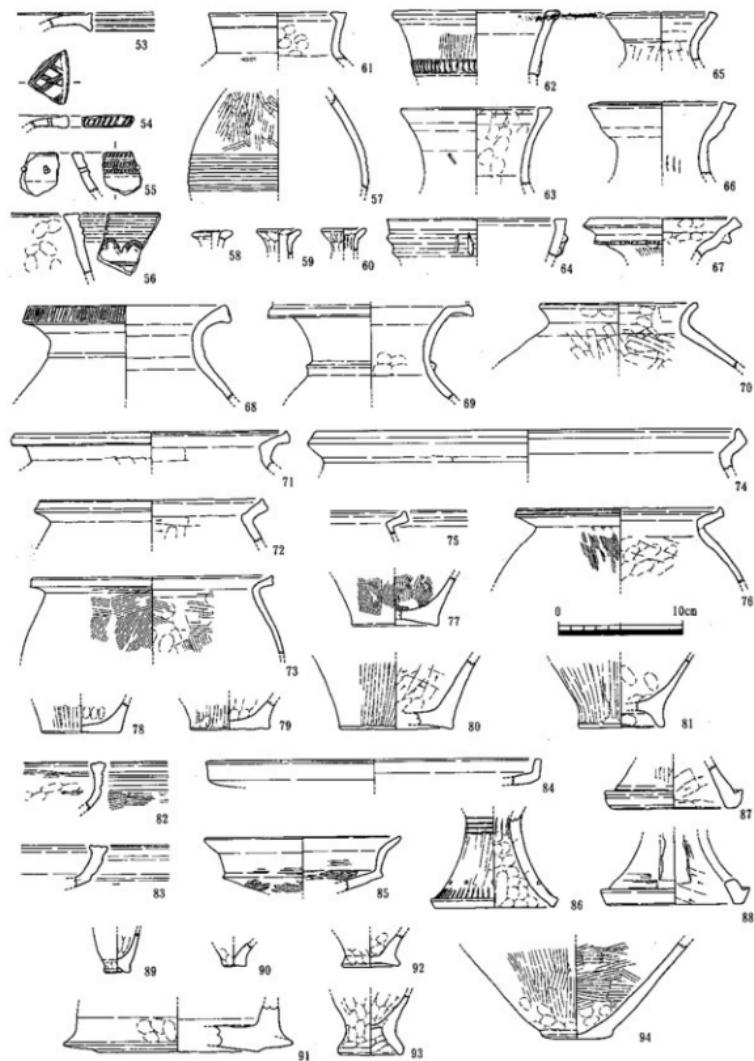
117は鉄製の刀子である。

Ⅲa下SD02が土石流とすれば、この時期幅はきわめて限られたものとなる。弥生時代の中でこの時期を求めるなら、最も新しい84のV様式後半が第1候補であるが、溝内でのこの時期の遺物の割合が小さいため混入の可能性もあり、82～84・87～89のⅣ-2・3様式期も考えておく必要がある。

I下SR01(第36図、図版21)

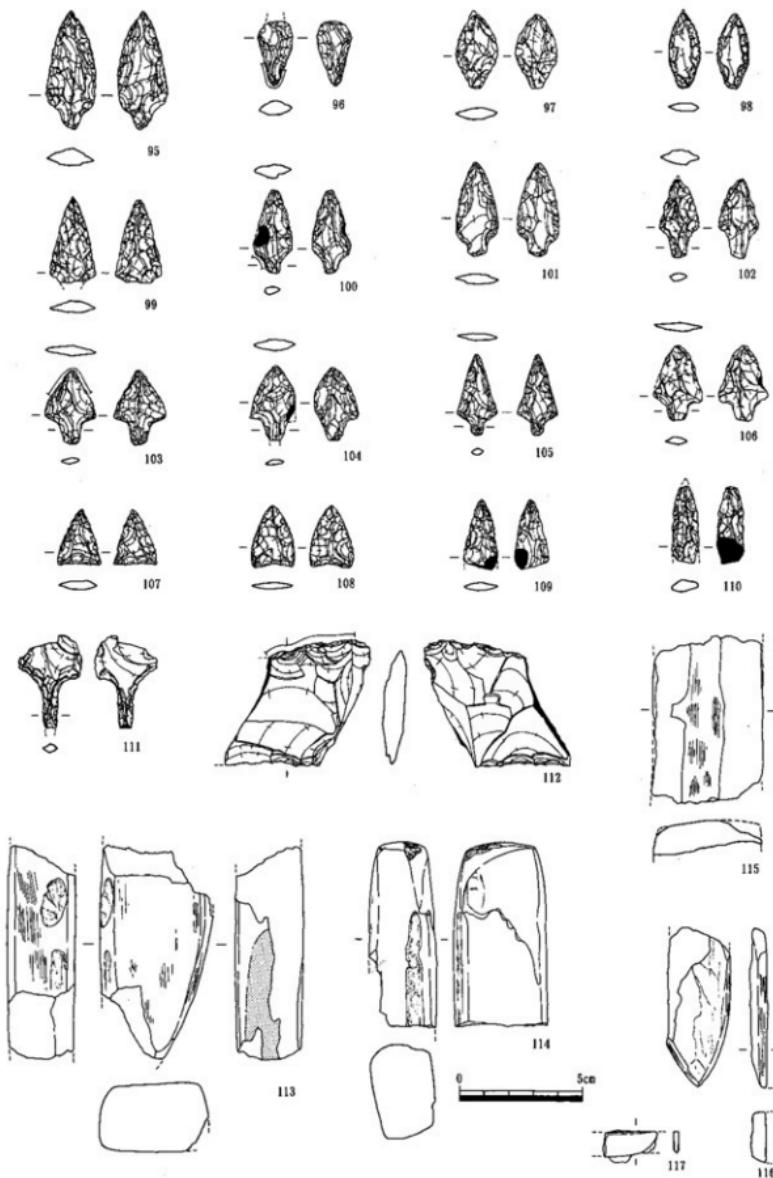
I区下層で検出した。下層調査区の全範囲に広がり、土層③(第5図)によると、黒灰色砂質土に該当する。Ⅲa下SD02と同様の遺物内容と堆積土をもつが、尾根先であるため土石流とはみなしがたい。斜面の低い地点に堆積した包含層と考えておく。

弥生時代中期の土器がコンテナ1箱程度と打製石包丁等片3・サヌカイト片140・結晶片岩製石包丁片1が出土した。弥生土器はほとんどが磨滅した細片である。118～127は弥生土器である。118～121は壺である。118は口縁端に沈線、上面に櫛描きの格子文を施している。120は頭部のくびれに多数の凹線が巡る。122～126は甕である。123は上下に広がった口縁端に凹線が巡る。124は口縁端が118同様「コ」の字となる。125は口縁端が上に少し伸び、126は更に伸び広がって端面に凹線が入る。127は鉢で、15と同じ形態である。128は須恵器杯の蓋である。身は薄く、外面にヘラ削りは認められない。口縁端内面にはわずかに稜が残る。TK10～TK43型式に該当する。129～142は石器である。129・134は基部が平らである。130～132・135～137は基部が突出している。130は両面に礫面の残る粗製品である。136は形態が整っていない。137は剥片に刃部とする範囲のみ細部調整を加えたような粗製品である。138は片面に礫面が残る。139～141は石包丁である。140は短い製品で、割れたものに再度加工して仕上げたのであろうか。141は結晶片岩を用いている。

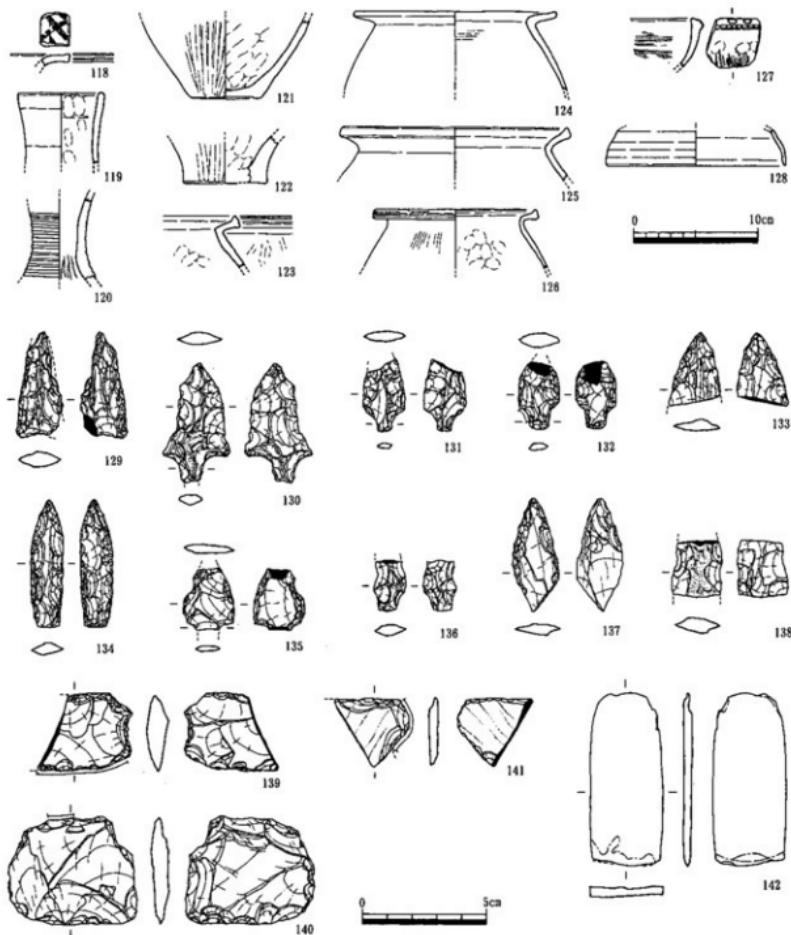


第34図・III a 下 S D 02 出土遺物実測図①(1/4)

142は扁平片刃石斧で、柱状片刃石斧が薄く割れた破片に刃をつけて再利用している。使用の磨滅による光沢が刃部に残る。



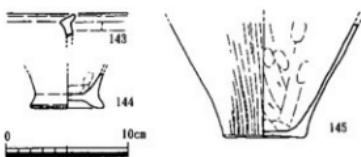
第35図 III a 下 S D 02 出土遺物実測図②(1/2)



第36図 I下S R 01出土遺物実測図(1/2、1/4)

III a 下 S D 08 (第37図)

III a 区下層の南端で検出したが、不整形で浅かったため、最終的に上面に堆積した包含層の残りと判断した。弥生土器・古墳時代の土師器・須恵器が少量と、サヌカイト片2・石鐵1・種不明石器1が出土した。143～145は弥生土器である。143は甕で、口縁が短く内湾すること



第37図 III a 下 S D 08出土遺物実測図(1/4)

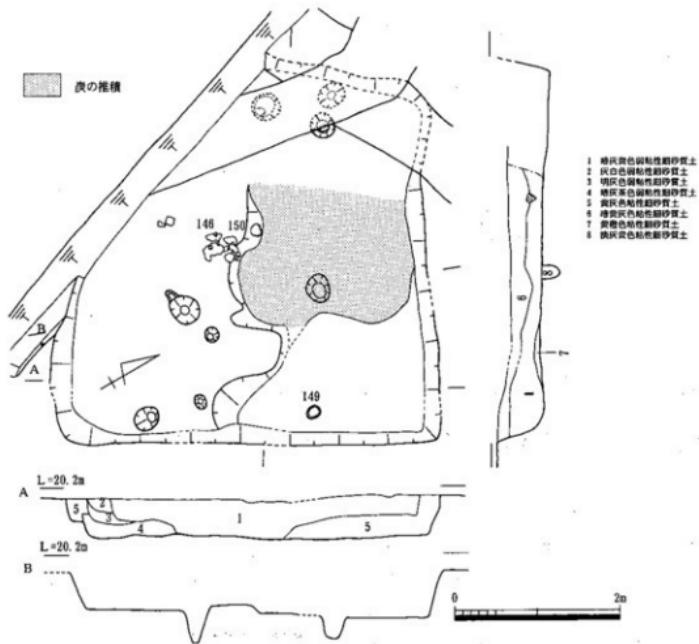
から I 様式後半ごろのものと考える。144 は胴へ向けての開きが小さいので甕にしたが、逆さで蓋になる可能性もある。145 は甕の下半分である。

3 古墳時代～古代の遺構・遺物

VI a S H 01 (第 38・39 図、図版 15・22)

VI a 区南西部で検出した方形の竪穴住居跡である。北西部は調査区境界と VI a S D 01・VI a S D 02 とで詳細をうかがいにくい。作りつけ窓は見当たらないが、竪穴内北部がやや低くここに炭の散布が認められるため、この辺りに移動式窓が置かれていたのではないかと想像する。ピットは深いものはあるが主柱穴を構成できるよう竪穴内に整然と配置されたものはない。断面図を作成した 2 本とこれより直角に北西に位置し底に石のあるピットとで 4 本柱の主柱穴を構成することができるかもしれない。床面上で遺棄された土器群を検出した。

弥生土器・須恵器・土師器・サヌカイト片が少量出土した。147～149 は須恵器である。147・148 は杯の蓋である。天井の平坦面のみヘラ削りし、その下には天井と口縁の境の稜線が残る。口縁端内面には明瞭に稜ができる。148 の薄さは 128 と似ている。149 は杯で口縁立ち上がりの端部



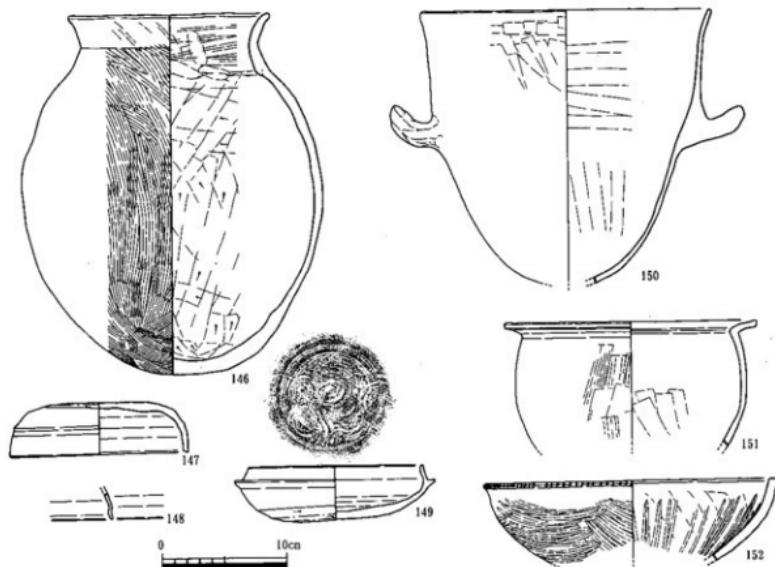
第 38 図 VI a S H 01 平・断面図 (1/60)

は丸い。内面底に径 3.7 cm の当て具痕が複数残る。これらは TK 10 型式に該当する。146・150 は土師器である。146 は壺で、外面は粗い刷毛目、内面には口縁と胴の継ぎ目が明瞭に残る。150 は薄手の甌である。取っ手より下の胴の傾きは断定できない。151・152 は混入と判断したⅢ-1 様式期の弥生土器である。151 は甌・152 は鉢で、152 は 15 に似る。内外面とも磨き、外面は 6 区に分割して弧状のヘラ磨きを施している。

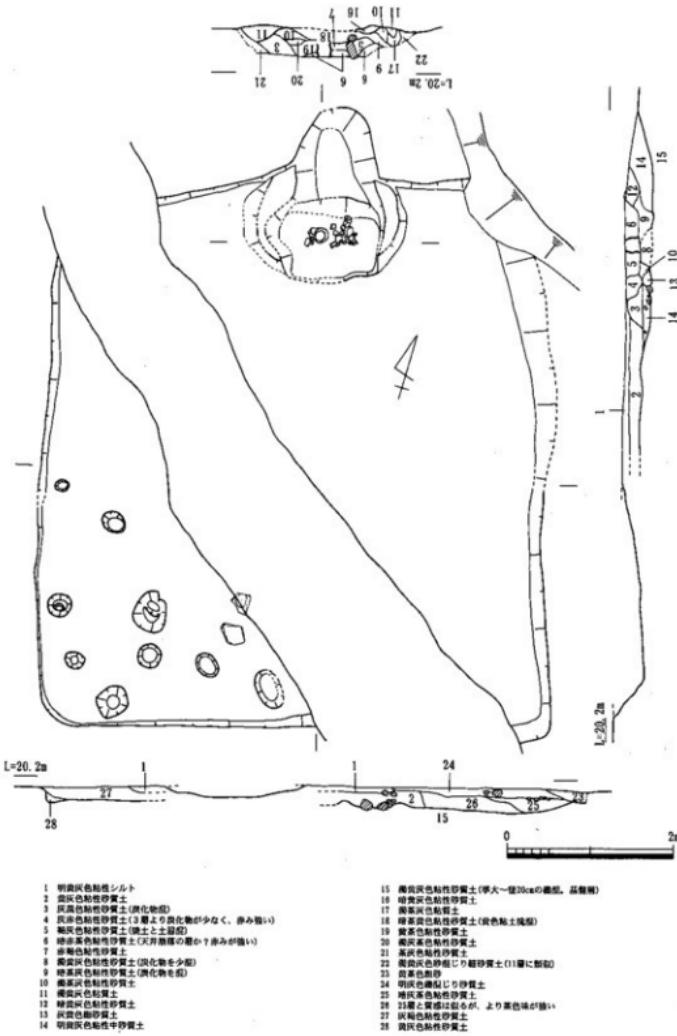
出土した須恵器により、VI a SH 01 は TK 10 型式の時期に属すると判断する。

VII a 上 SH 01 (第 40 ~ 42 図、図版 15・16・22・23)

VII a 区上層中央で検出した方形の竪穴住居跡である。VII a 上 SD 01 より古い。中でピットを幾つか検出しているが、いずれも浅く柱穴を構成するものではない。北側に作りつけの竈を持つ。焚き口奥の竈部は若干低い。中に伏せられた甌 (160。断面図では底が欠けるが実際は完形品) と棒状の石を立てて並べていた。甌鍋をのせる支脚と考えられているが、2 つでは安定しないので失われたもう 1 脚があったと思われる。甌・石とも向かい合う側が被熱で赤変している。これらと当初の竈底との間には粘土ブロックを含む土層 18 が盛られており、竈を作りなおしたものと思われる。土層 9 のつながりより竈の壁も同時に作りなおされているので、竈の崩壊が作りなおしの原因と思われる。両側には竈の壁の残存である土手状の高まりが残り、支脚との間には竪穴住居の放棄段階で崩落した竈の天井らしき土層 6 も確認された。



第 39 図 VI a SH 01 出土遺物実測図 (1/4)

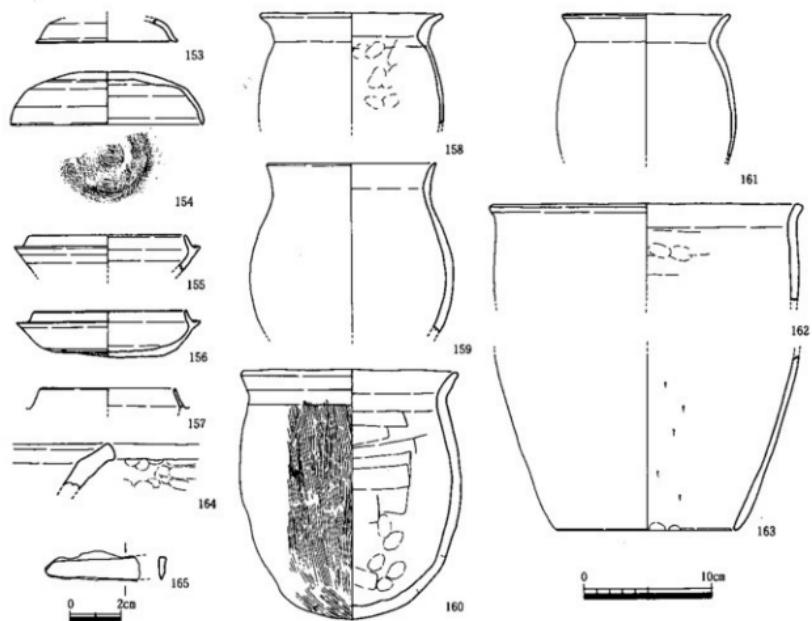


第40図 VIIa上SH 01平・断面図(1/60)

28㌢コンテナ半箱程度の遺物が出土した。弥生土器・須恵器・土師器・サスカイト片・結晶片岩片が含まれる。153～157は須恵器である。153・154は杯蓋で、153は小さく低い蓋の口縁端が外に広がる。杯の可能性もある。154は内面天井にあて具痕が残る。口縁内面には稜の名残が見える。ヘラ削りは削り方が弱い。155～157は杯で、口縁立ち上がり端部は丸い。底をヘラ削りする。

155は外面に櫛状工具の擦痕が残る。158～164は土師器である。158～161は甕で、薄手が多い。159は胴に最大径があり甕にも見える。160は甕の支脚に転用されていたものである。頸部を強く横ナデする。外面に赤変部があり、甕による二次被熱かと思われる。外底は滑らかに丸く、内底は指頭痕が顕著に残る。型枠に粘土を入れて押えて底を成型したと考える。162・163は同一個体と思われる甕である。これも薄手である。土師器は全体に表面が磨滅しているものが多いが、特に磨滅している。159・161～163は甕内からの出土であり、被熱により表面が融けやすくなる変化がおきたのであろうか。164は土師器鍋で傾きは断定できないが、浅く口径の大きなものに見える。165は鉄製刀子の切先である。166は竪穴住居内より出土したため、第一に何らかに利用されていたと考えた。調整痕は全くなく、唯一使用痕の可能性があるのは、径1cmの窪みである。これらは2個1対になるかのように並ぶものが多い。しかし立てるのが困難な側面にもあり、深さ0.3～1.0cmで一定せず、使ったかのような細部の痕跡も確認できなかった。このため窪みは自然生成と最終判断したが、参考に図示しておく。

154～157はTK 10～TK 43型式であるが、153はTK 217型式頃以降散見される口縁形態である。一方土師器では164の鍋がTK 217型式頃から出現する。以上より、VIIa上SH 01は、TK 10～TK 217型式の時期に属すると判断する。



第41図 VIIa上SH 01出土遺物実測図①(1/2, 1/4)

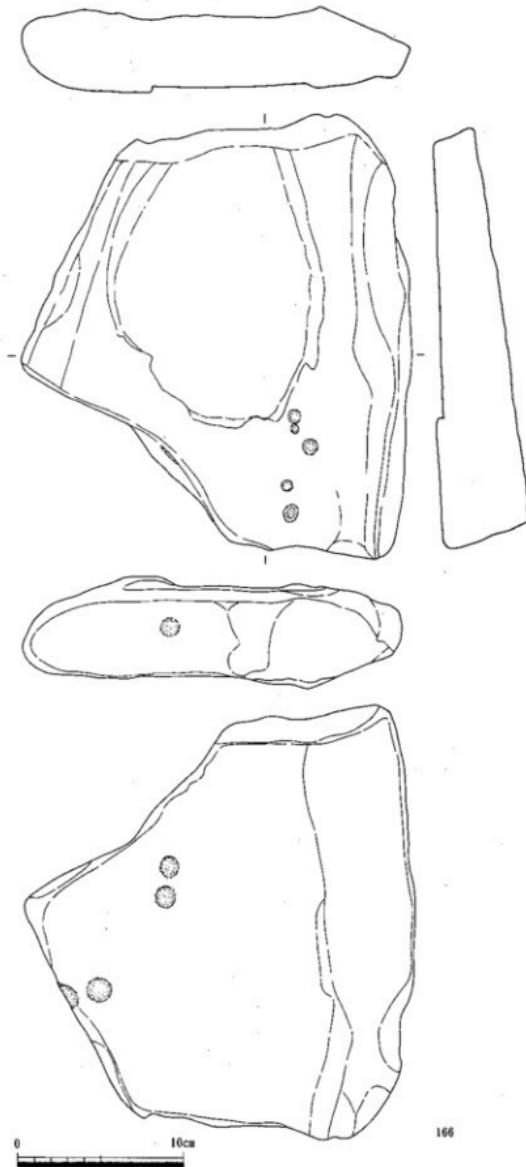
VII a 上 SH 04 (第 43・44 図)

VII a 区上層中央で検出した方形の竪穴住跡である。柱穴は見当たらず、また炉や竈も存在しなかった。磨滅した弥生土器少量とサヌカイト片・石包丁片が出土した。167は弥生土器の高杯である。口縁内側に凸帯を貼り付ける。口径が小さい。

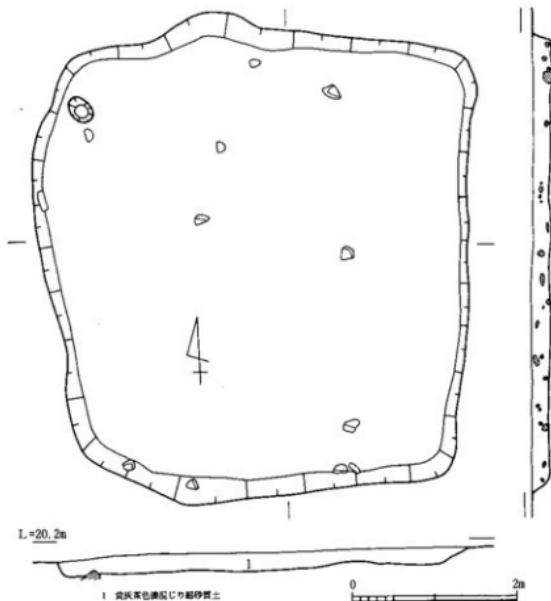
VII a 上 SH 04 の時期は、柱穴を持たない方形の形態から古墳時代と判断したが、柱穴や炉の欠如を住居とは異なる用途によるものと考えれば、出土遺物に示される弥生時代に属すると考えることも可能である。

VI a SP 015 (第 45 図)

VI a 区中央東よりで検出した。穴の中は北に向かって深くなる。埋没が人為的なものか明らかでないが、その途中に厚さ 5 cm ほどの炭の層（2 層）があり、何かが焼かれたもしくは焼け残った炭を捨てたことが読み取れる。4 層から古墳時代の須恵器・土師器がわずかに出土しており、VI a SP 015 はこの遺物の時期の遺構と判断した。

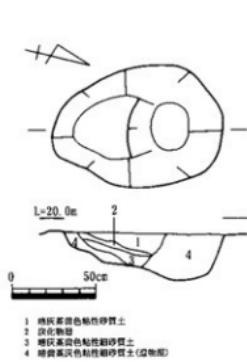


第 42 図 VII a 上 SH 01 出土遺物実測図②(1/2)

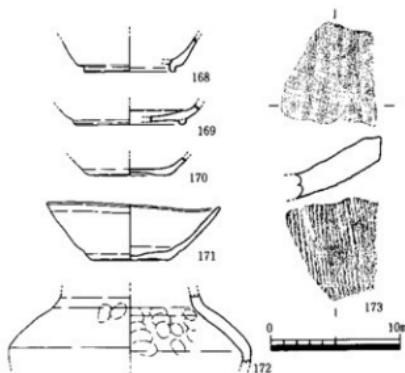


第43図 VII a上 S H 04 平・断面図(1/60)

第44図 VII a上 S H 04
出土遺物実測図(1/4)



第45図 VI a上 S P 015 平・断面図(1/30)



第46図 ピット出土遺物実測図③(1/4)

ピット出土の古墳時代～古代の遺物（第46図）

168はⅥ a上 S P 007から出土した須恵器高台付杯である。他に土鍋が出土している。169はⅠ上 S P 073から出土した須恵器高台付杯である。ほかに土師器杯が出土している。170～173はⅤ a上 S P 086から出土した。170・171は須恵器杯である。171は内面に火ダスキーが走り、外面底にヘラ切の

痕が残る。172は須恵器壺で、外側に自然釉がかかる。173は平瓦である。凸面は縄目叩きで、内面が断面波状になるのは、幅2.1cmの桶の側板の痕跡であろう。他に土師器小皿が出土している。168・172はTK 48型式のもので、169はMT 21型式、170・171は10世紀代に属する。

VI a S D 02 (第47図)

VI a区南西部で検出した長さ6.5mのまっすぐの溝である。VI a SH 01より新しく、VI a S D 01より古い。遺物が出土していないため、詳細な時期判断はできない。

VII a 上 S D 07 (第48図)

VII a区東部で検出した南北方向の溝である。この位置は溜め池上流にあたり、溝も底の深さから北に流れることになる。埋土は砂礫層が認められることもあり、谷底の小さな流れと考える。古墳時代の須恵器・土師器がわずかに出土している。

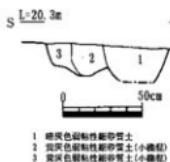
4 中世の遺構・遺物

VII S P 001 (第49図)

VII区北東部で検出した浅いピットである。174は埋土上部で上を向いていた。器高の高い杯の割れ口が磨滅して口縁に見えている可能性もある。内面底に強い指頭痕が残る。他に土師器杯・糸切小皿片がわずかに出土している。底部直上外面の沈線状のヘラ痕を特徴的なヘラ痕と捉えるなら、この形態がVII SK 01出土杯に多く含まれることから、VII SK 01と同じ時期と考えることができる。

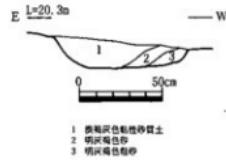
VII S P 003 (第50図、図版17・23)

VII区北部で検出したピットである。底には石があるが、根石か基盤層に含まれる石が露出しているのかわからない。断面図から、柱を抜いた後その部分に炭と一緒に3枚重ねの土師器杯を埋



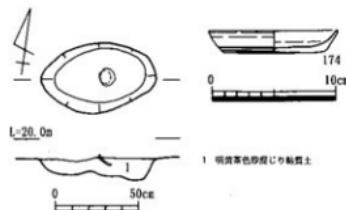
第47図 VI a S D 02 断面図

(1/30)



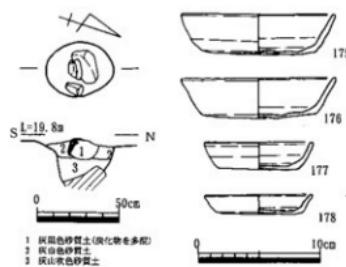
第48図 VII a 上 S D 07 断面図

(1/30)



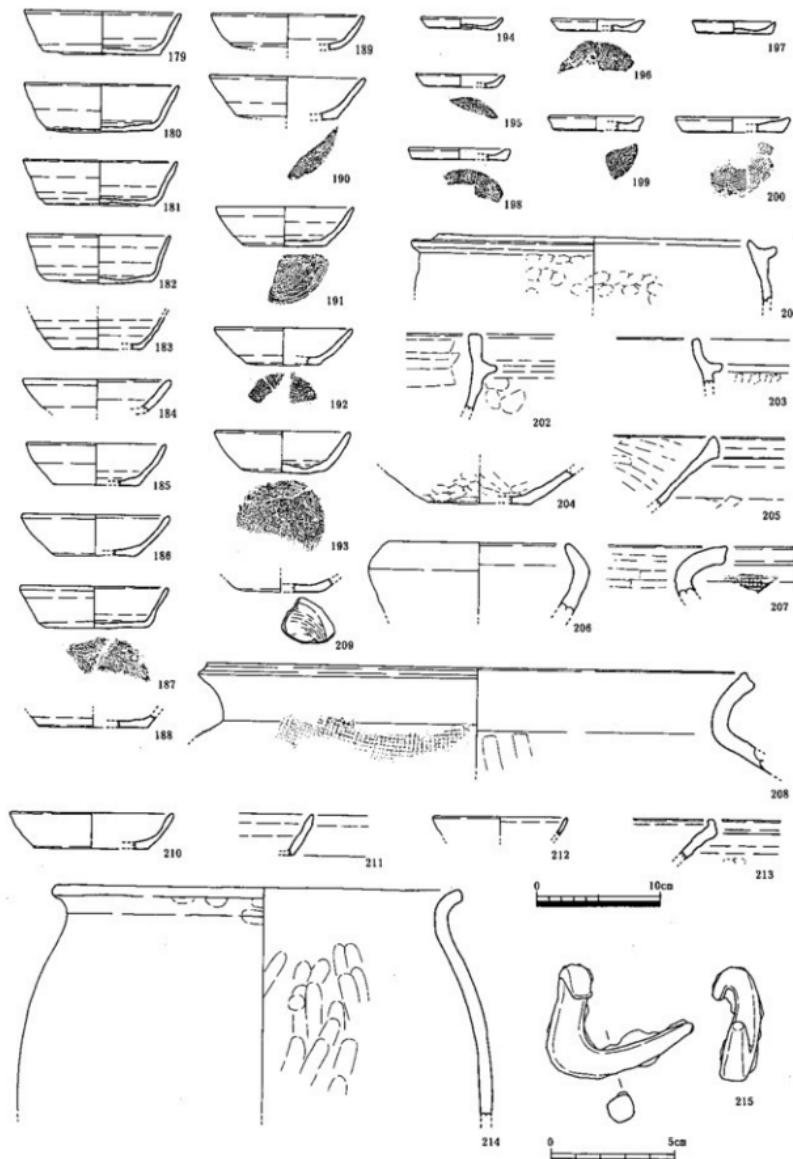
第49図 VII S P 001 平・断面図 (1/30),

出土遺物実測図 (1/4)



第50図 VII S P 003 平・断面図 (1/30),

出土遺物実測図 (1/4)



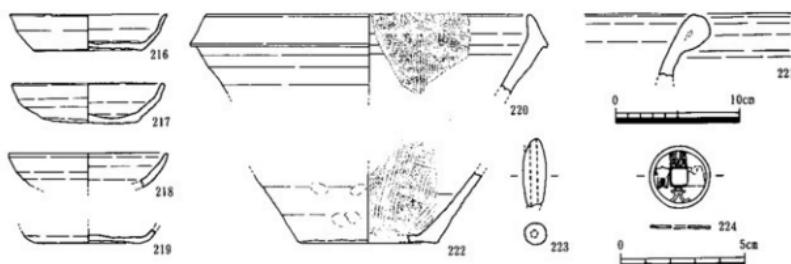
第51図 ピット出土遺物実測図④(1/2、1/4)

めたと読める。地鎮遺構であろう。175～177がその3枚で、この順に内側に重なる。底をヘラ切りしその後板でなでついている。178は小皿でこれもヘラ切りである。土師器杯・小皿の口径・器高・形態の一一致、特に土師器杯の体部中位を強く横ナデすることでこの部分が窪むという技法上の特徴から、ⅧS P 003はⅧS X 01と同一の時期と判断する。

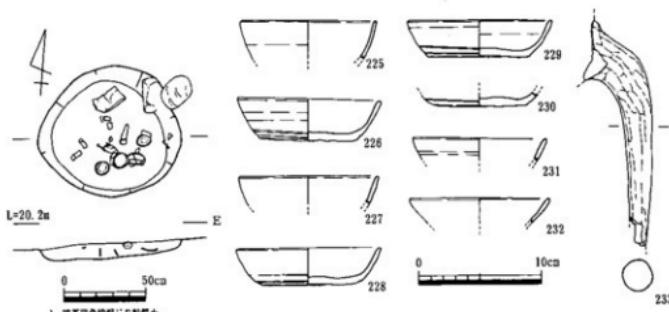
ピット出土の中世遺物（第51・52図、図版17・23）

179～182はI上S P 008から出土した土師器杯である。器高4cm、口径12.6cmで揃う。底部はヘラ切りである。183～193は底から口縁への開きが大きい土師器杯で、口径11～12cmに揃う。186～193は糸切りである。194～200は土師器小皿である。194・195は口縁が薄く、196～200は口縁が断面三角形で厚い。183・193・194はI上S P 039から出土し、183は内外面とも強い横ナデで明瞭な稜ができる。184はI上S P 046から出土し、身が厚い。185・186はI上S P 071から出土した。186は底部糸切りの可能性があるが、その後板でなでておりヘラ切りがそのように見えるのであろう。187はI上S P 140から出土した。188はI上S P 057から出土した。189・196はI上S P 125から出土した。190はI上S P 208から出土した。191・202はI上S P 006から出土した。192・200・205はI上S P 124から出土した。204・205は東播系のこね鉢で、205は12世紀のものである。204はI上S P 126から出土した。195・198はI上S P 002から出土した。このピットからは他に糸切りの土師器杯か小皿や甕、炭、焼土が出土した。197はI上S P 093から出土した。小皿では珍しくヘラ切りでしかも他のヘラ切りと輪轆の回転が反対である。199はI上S P 010から出土した。201～203は土師質の土釜である。202は外面全体に煤が付着している。201・203と胎土が異なり、産地が異なることを窺わせる。201はI上S P 127、203はI上S P 089から出土した。I上S P 089からは他に糸切りの土師器杯か小皿や焼土が出土した。206はI上S P 111から出土した。備前焼の小さな鉢であろう。このピットからは焼土が28ℓコンテナ半箱分出土した。これらは両面を平坦面とするものや直角に隣り合わせた平坦面を持つものが多数あり、建物の土壁と判断した。厚さ4～6cmで、中心に5cm間隔で径2cmの円形の材を縦横に組み合せたものを木舞としていることが観察できる。I上S P 111がもともとこの建物の柱穴であったかは不明である。207・208は亀山焼の甕である。208は須恵質に近い焼成である。一般に12～13世紀は須恵質、14世紀以降は瓦質になっていく。207はI上S P 232、208はI上S P 091から出土した。215はI上S P 258から出土した鉄製品で、形状から團炉裏の上に耳付き鍋を釣るような吊り手と考える。

209はV S P 064から出土した土師器杯である。210はV S P 034から出土した土師器杯である。211・212はV S P 074から出土した土師器杯である。213はV S P 076から出土した東播系のこね鉢である。12世紀中葉から後半のものである。214はV S P 035から出土した土師質の甕である。216はⅧS P 022から出土した土師器杯である。217はⅧS P 002から出土した土師器杯である。外面底のヘラ切り痕を板できれいにナデ消している。218・222はⅧS P 028から出土した。216～218は形態・口径とも似ている。219はⅧS P 034から出土した土師器杯である。220はⅧS P 062から出土した備前焼のすり鉢である。卸し目は8本で、使用により少し磨滅している。221はⅧS P 016から出土した備前焼の甕である。223はⅧS P 066から出土した土錐である。224はⅧS P



第52図 ピット出土遺物実測図⑤(1/2、1/4)



第53図 VSK 01平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

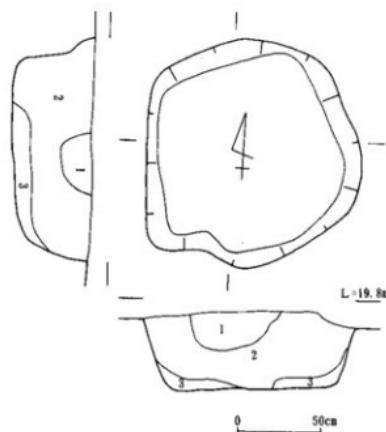
018から出土した銅錢で「開元通寶」と読める。

以上杯でいえば、①口径12～13cm・器高3cm台後半で体部中位が窪み気味ながら直線的に開くもの(179～182・187)、②口径12～13cm・器高3cm台前半で体部中位が逆に外に張り出すもの(185・186・216・217)、③口径11～12.5cm・器高3cm前後で体部が浅く大きく開くもの(184・189・190～193・210)におよそ分かれる。①と②は強い横ナデを施す部位の違いと捉えることができる。また形態は②と③が近い。外面底部はヘラ切りのものと糸切りのものがほぼ半数の比率で存在し、形態との関係では①・②とヘラ切り・③と糸切りという傾向があるものの完全に分かれるものではない。①にはVSK 01より14世紀末から15世紀初頭、③にはI上SP 124から12世紀末葉から13世紀初頭という時期を与えるなら、③→②→①という変化を想定できる。次に土師器小皿ではa体部が薄く、底部との境が丸みを帯びるもの(194・195)、b体部断面が厚い三角形で、底部との境が角を持つもの(196～200)、に大きく分かれる。200には③同様に12世紀末葉から13世紀初頭という時期を与えるが、小皿の場合口径は7～9cmの間に分布するものの、VSK 01でも口径9cmのaがあり、一方で①・②の土器を持ち14世紀末から15世紀初頭のものと考えられるVSK 04でも口径7cmのbがあることから、時期差を窺いにくい。

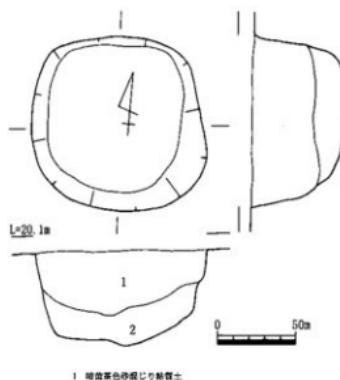
なお、③については主としてⅠ区で出土しておりこの時期の遺構分布の中心といえるが、時期については東播系こね鉢片1点のみによる判断であり、同じ調査区の包含層から14世紀前半までの遺物が出土しているため、このこね鉢が後世に混入した可能性も含めて慎重な判断が必要である。より新しい②と想定した315も同じ時期のこね鉢と出土している。但し、Ⅰ区では15世紀まで下る遺物が見られないことから、①を新しくする変化の方向性は正しいと考える。

VII S K 01 (第53図、図版18・24)

Ⅷ区北東部Ⅶ S P 001の東隣で検出した浅い土坑である。まとまりや規則性のない土器の出土状況から、廃棄坑と判断した。225～232は土師器杯で、口径11～12cm内にまとまる。外面底ヘラ切りで、その後板でなでて



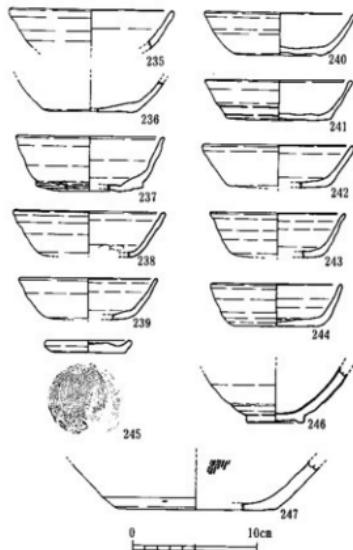
1 暗赤色砂凝じり粘土(少しきの化物)
2 淡赤色砂凝じり粘土(灰土、灰化物多)
3 暗赤白色砂土



第54図 VII S K 02 平・断面図(1/30)



第55図 VII S K 03 出土遺物実測図(1/4)



第56図 VII S K 04 平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

仕上げる。230は内面底に強い指押さえ痕が残る。233は土師質の土釜の脚である。土釜との接合部ではざれている。上記ピット出土土師器杯の分類に従えば②・③に含まれ、口径は小さい側に集中する。VII SK 01の時期を①と③の間に置くことができるかもしれないが、VII SK 04で記した236・240・244と230の内面底の強い指押さえ痕が同一製作者或いは同時期の技法上の痕跡を示すものなら、VII SK 04と同時期とも考えうる。

VII SK 02 (第54図)

VII区南東部で検出した隅丸方形の深い土坑である。底部ヘラ切りの土師器や備前焼や用途不明の鉄製品などがわずかに出土した。

VII SK 03 (第55図)

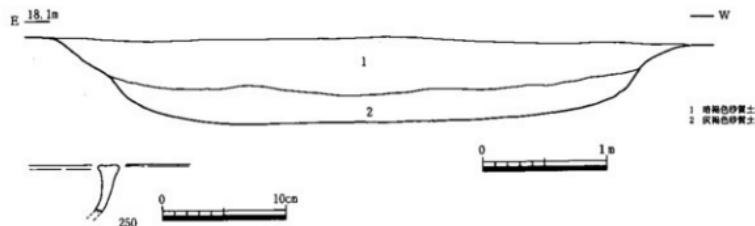
VII区中央で検出した長径1.7mの梢円形の土坑である。土師器杯が少量出土した。234は底部の切り離し方は不明で、浅く外反が強い。口径が小さく器高も低いためピット出土土師器杯の傾向に従えば古いことになるが、類似する形態がないため時期判断は難しい。

VII SK 04 (第56図)

VII区北部で検出した深い土坑で、埋土全体に焼土・炭が含まれていた。少量の土師器杯の他、釘状鉄製品が出土した。廃棄坑と判断する。焼土はI上S P III同様壁土と考えられ、平坦面より0.5～2cm内側に木舞らしき径1cmの窪みの痕跡が残る。235～244は土師器杯である。口径10.6～12.4cmの範囲内に納まる。すべて外面底ヘラ切りである。235は産地の違いか使用によるのか他と色が全く異なる。外面口縁下を強く横ナデする。236・240・244は230同様、内面底に強い指押さえ痕が残り、245の土師器小皿も同様である。この



第56図 VII SK 04 出土遺物実測図(1/4)



第57図 III a 上 S X01 断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/4)

強い指揮さえが同一の製作者を示す可能性もあるが、同一の製作者でありながら器種による切り離し方法の差異が存在するのか検討を要する。241は口縁下内外面を強く横ナデする。246は古瀬戸の天目である。高台置付きに糸切り痕が残る。内外面に黒釉がかかる。輪高台を削り出して作っていることから、古瀬戸後期様式Ⅰ～Ⅱ期に属する。247は備前焼のすり鉢である。内面は使用により磨滅が著しい。古瀬戸より14世紀末から15世紀前葉の遺構と判断する。埋土に含まれる焼土・炭を近接するⅧ S X 01と同じ要因により生じたものとすれば、この時期判断は正しいことになる。また土師器杯の比較もⅧ S K 04出土品が口径がわずかに小さい傾向を示すが、時期判断を肯定する。

Ⅷ S K 06 (第57図、図版24)

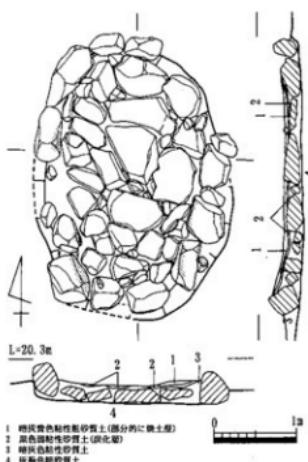
Ⅷ区北部で検出した長径0.9mの楕円形の土坑である。土師器杯などがわずかに出土した。248は土師器杯で、体部が直線的に開く。249は土釜の脚で、土釜との接合部ではずれている。49頁で行つた土師器杯の分類①に含まれ、Ⅷ S X 01と同時期と判断する。

Ⅲ a 上 S X 01 (第58図)

Ⅲ a 区上層中央で検出した。長楕円形を呈する大きな土坑である。弥生土器・石鏃・サヌカイト片・須恵器・焼土が少量出土した。250は弥生土器の鉢である。口縁端が両側に広がり上向きの広い平坦面を形成する。磨滅が著しい。弥生時代Ⅲ-1様式期に属すると考える。焼土はⅠ上SP 111出土のものに似ており、壁土と考える。開いている穴から壁塗り前木舞などの段階で2種類の工法があったように観察できる。遺物の示す時期とは異なるが、この焼土の類似から判断してⅢ a 上 S X 01は中世に属すると考えておく。

Ⅷ b S X 01 (第59図、図版18)

Ⅷ b 区南端で検出した。深さ20cmほどの楕円形の穴に、その壁に沿って径40cmの石を立て並べ、その後埋めた中に大小さまざまな石を敷き平坦面を作り出している。出土遺物もなく遺構の性格もわからないが、この中で火を焚いたらしく石の平坦面の上に薄い炭化物の層が形成され、その上の層には焼土も含まれていた。この焼土は量も少なく上屋や壁の存在を示すところまでは行かない。また立石の内向きの面には一部火によると思われる赤変も認められた。立石は西と北東の2ヶ所が欠けている。本来あったように見え、そうだとすれば横から火を入れる焚き口はないことになり、上から火を入れたことになろう。また石を平たく敷いていることは、土でなく石の



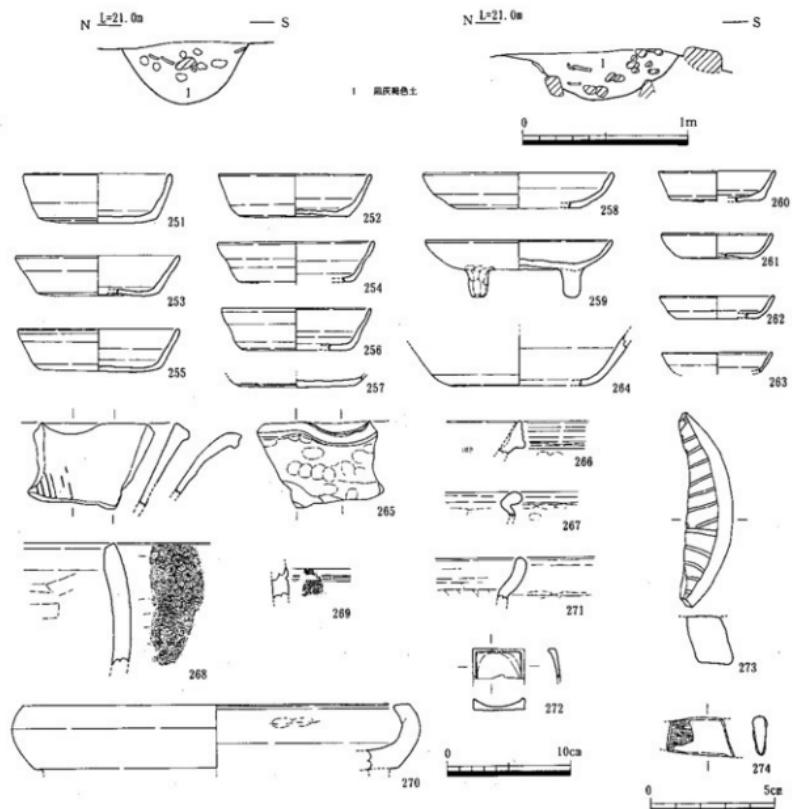
第59図 VII b S X 01 平・断面図(1/30)

- 1 棕褐色粘性軟質土(部分的に焼土層)
- 2 褐色粘性砂質土(炭化層)
- 3 煙灰色粘性砂質土
- 4 灰褐色粘性質土

うえで焚くことに意味があり、しかも平坦面が必要であったことを示している。

VII S X 01 (第 60 ~ 62 図、図版 19・24 ~ 30)

VII区南部で検出した。全長約 14 m、幅平均 0.8 m、ほぼ東西方向の不整長方形の溝状の土坑である。深さ 30 ~ 40 cm の穴の中に炭・焼土を多量に含んだ黒灰褐色の土が埋まっていた。焼土は 28 ℥ コンテナ 2 箱分採集できた。平坦面を持つものが多く、それらは平坦面より 1 ~ 3 cm の深さの部分が被熱のため赤変している。それより内へは黒くなり、植物繊維の炭化したものが認められる。表面観察より判断したのは、焼土は建物の壁土で、植物繊維は木舞部分、黒が本来の壁の色に近く、赤変部は壁表面のみ火で焼けたということであり、全体が火事に遭った家の廃材であるということである。



第 60 図 VII S X 01 断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/2、1/4)

コンテナ3箱分の土器が出土した。掲載遺物種類の他、弥生土器・磨製石斧片・須恵器壺・瓦器椀・土釜・土師質耳付き鍋釜・石鍋・銅錢（「皇宋通宝」）・鉄器・青銅器などが含まれている。鉄器は釘らしくまた青銅器は器種不明であるが、いずれも高熱のため歪んだり熔けたりしている。これもまた建物が火事に遭ったことを示している。

焼土・遺物両者から、図版S X 01が火災現場を整地した際に集まったゴミを主体とすることは明らかである。

251～259・264は土師器杯である。251～256は49頁で行った土師器杯分類①である。258・259は口径が大きく深い。底から内湾しながら口縁が延びる。259は三脚が付く極めて珍しいものである。264は更に口径が大きい。上部は外反し、厚手で丁寧な仕上げをしている。260～263は土師器小皿で、口径は9cm前後である。いずれも土師器小皿分類aに含まれる。251～263はすべて外面底ヘラ切りである。265は土師質すり鉢である。外面には片口部を引き出す際につけたのか指頭痕がたくさん残る。地元産なのか産地は明らかでない。266は備前焼のすり鉢である。外面に凹線が入るため備前焼第V期と考えるが、口縁内面の形状が不明なため断定はできない。267は近世の瓦質の焙烙である。佐藤氏分類b式の形態をしており、18世紀後半のものである。268・270は畿内で作られたと考えられる瓦質の「奈良火鉢」である。268は深鉢形で外面に輪状の印花文を施す。270は平面円形の浅鉢形で外面は丁寧に磨き上げている。14世紀後半～15世紀前半ごろのものと思われる。269は土師質の火鉢で沈線と印花文を外面に施す。271は口縁部が丸く内湾する土師質の土鍋である。口縁端は角を持たない。272は石製の硯である。墨が付着している。273は花崗岩製と思われる石臼の上臼で、周りは全部割れている。石臼は一般的には15世紀以降に広まる。274は鉄製刀子で鞘の木目が残る。275は白磁碗である。森田氏論文の觀世音寺出土資料に同様の口縁をもつものがあり、15世紀初頭におかれている。276～279は青磁碗で、276は内面見込み部に花文を印刻する。278は体部外面上位までヘラ削りし、釉は全体にやや厚い。276～278は口縁が外反する。上田氏分類のD類にあたり、14世紀後半から15世紀中葉に属すると考えられる。279は口縁が直線的に開くが、外面に鶴蓮弁文を施す。その形態から15世紀前半に属する。280～285は青磁盤で、280は高台疊付部分のみ無釉で、全体に厚い釉がかかる。281は内面に蓮弁文を刻む。見込み部に文様があるが、絵柄は不明である。282は高台疊付部分のみ無釉で全体に厚い釉がかかる。気泡の痕跡がある。高台と体部が同一個体であるか断定できない。283は281と同一個体の可能性がある。284は全面施釉で、底外面を蛇ノ目釉剥ぎしている。内面見込みには草花文を刻んでいる。口縁の折れははっきりし、端部は平たくない。これらは14世紀中ごろの大宰府S X 1200や鎌倉光明寺裏で同様のものが出土している。286～301は古瀬戸である。286は平碗で内面に粒状のトチン跡が5～6残る。内外面の釉は貫入が認められる。外面にも重ね焼きの痕が認められる。287は内面施釉で、削り出して作った高台の底に糸切り痕がある平碗である。削り出し高台の初現は古瀬戸後期様式2期とされる。陶土は須恵質に近い。288～291は天目で、289・291は中国産と指摘されている。灰色の締まった陶土で、288・290の肌色で締りの悪い陶土とは明らかに異なる。また289・291は施釉部と無釉部の間に暗灰色のごく薄い化粧がけ状の部分がある。同一個体の可能性がある。288は釉が沸騰して泡立ってしまっている。高台部を欠くため詳細な時期判断ができない。290は灰釉である。292は鉢皿である。釉には貫入が認められ、陶土はやや締りが

悪い。古瀬戸後期様式2期に属する。293～295は古瀬戸後期様式2～3期に属する直線大皿である。293は内面と外面下半までツケガケにより施釉する。294は内面見込み部の釉はハケヌリの可能性がある。陶土は須恵質に近い。295はハケヌリ後ツケガケか。陶土は締まりが悪い。296は取っ手下側の付け根らしきものが残り水注かと思われる。体部最大径より上部に自然釉が付着し、古瀬戸でないと指摘もある。297は筒形香炉である。古瀬戸後期様式に属する。298～301は瓶子である。外面全体と内面底部に施釉する。302～310は備前焼である。302・303は小型の壺である。同一個体の可能性がある。陶土はやや締りが悪い。304・305はそれより大きな壺である。305は口縁が玉縁とならず、備前焼IV期後半以降のものであろう。306～309は甕である。凹線が入らないため第IV期に属する。310は内面の板ナデ調整に2～3種の異なる工具を用いている。311は産地不明の陶器である。壺かと思われる屈曲した肩を持ち、その上に同様の構成の刻印を押している。312は丹波焼の壺である。すばまつた胴上端からラッパ状に短く開く口縁が特徴的で、外面にとび色の自然釉が垂れ、窯壁片が一部付着している。胎土はよく締まり灰色で長石片を含む。内面は口縁から壺の肩までの範囲を丁寧に回転ナデするが、その下の調整は粗く粘土の維ぎ目やそれを指で押さえて消した痕が残されている。口縁の形態が14世紀後半から15世紀中頃に操業した稻荷山窯表採品に似る。

遺物から時期を検討すると、量・時期のまとまった古瀬戸から14世紀末～15世紀前葉がVII S X 01の時期として妥当かと考える。備前焼はこれと重なるが時期幅がある。青白磁は14世紀代のものが混じるが下限はやはり15世紀前半に置ける。丹波焼については、上記の時期幅の中でも14世紀後半に操業の主体があると考えられている。これらのうち威信財ともなりうる貴重品は伝世の可能性も考えておく必要がある。また近世の遺物も若干含んでおり、未実測の完形の小壺などもあるが、これらは混入と考えたい。

VII S X 02 (第63図)

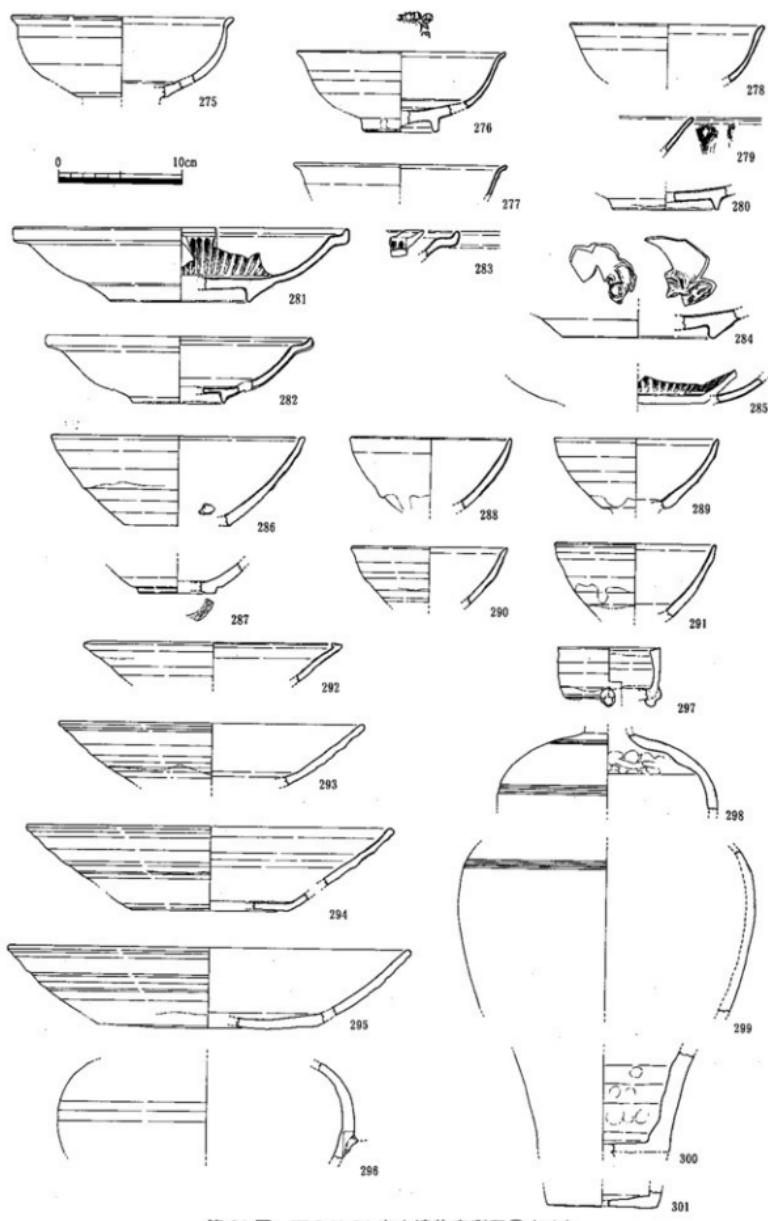
VII区中央で検出した。浅い土坑で、中には礫のたくさん混じった黒い土が埋まっていた。また2ヶ所で深さ15cmのピットを検出した。弥生土器と土師器がわずかに出土した。礫の集中する理由はわからない。

VII S X 03 (第63図)

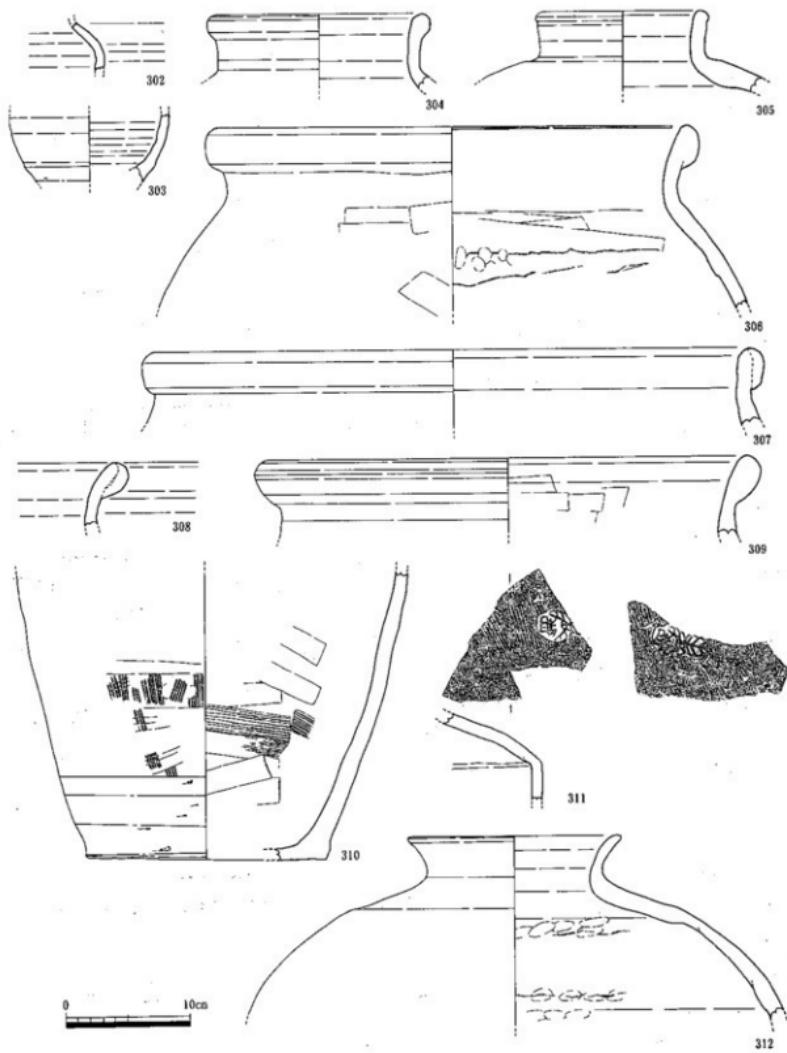
VII区中央で検出した。VII S X 02に近く、同様の形態・埋土をしている。中から土師質土釜・備前焼・肥前陶器・釘状鉄製品が少量出土した。313は古瀬戸の平碗である。両面に灰釉を塗っている。古瀬戸後期様式I～II期に属する。肥前陶器は近世の刷毛目皿と思われ、この遺構が近世まで下る可能性を示唆する。

I上SD 02 (第64図)

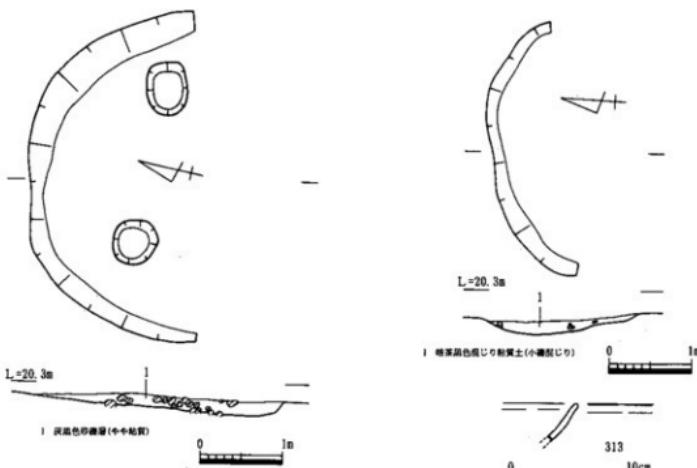
I区上層南端で検出した細く短い溝である。掲載した遺物のほか焼土状の土がわずかに出土した。314は弥生時代中期の壺の底である。上層の遺構面で検出しており、溝の時期は中世以降と考える。



第 61 図 VII S X 01 出土遺物実測図②(1/4)



第62図 VII S X 01 出土遺物実測図③(1/4)



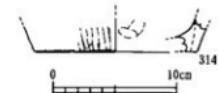
第63図 VII S X 02 平・断面図(1/30)、VII S X 03 平・断面図(1/30)・出土遺物実測図(1/4)

I上S D 03 (第65図)

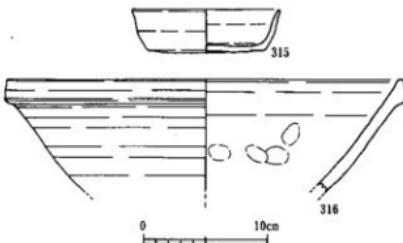
I区上層南部で検出した細く半弧を描く溝である。掲載遺物のみ出土した。315は49頁で行った土師器杯分類②である。316は東播系こね鉢である。口縁形態から12世紀末葉から13世紀初頭ごろのものと判断する。重ねて焼いた際に露出していた口縁部のみ自然釉が付着している。

III a上S D 01 (第66図)

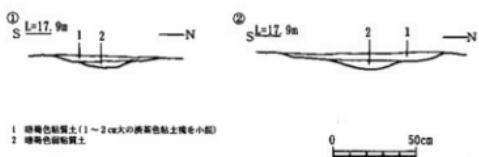
III a区上層中央で検出した。浅いが、ほぼ東西方向に延長20mの長さで続く。III a上S X 01より古い。弥生土器・土師器がわずかに出土した。上層の遺構面で検出していることから、溝の時期は中世以降と考える。



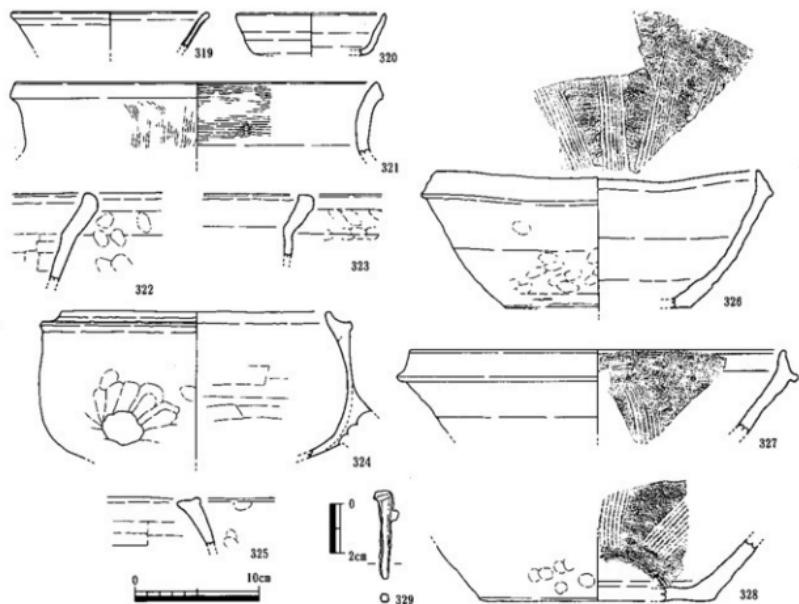
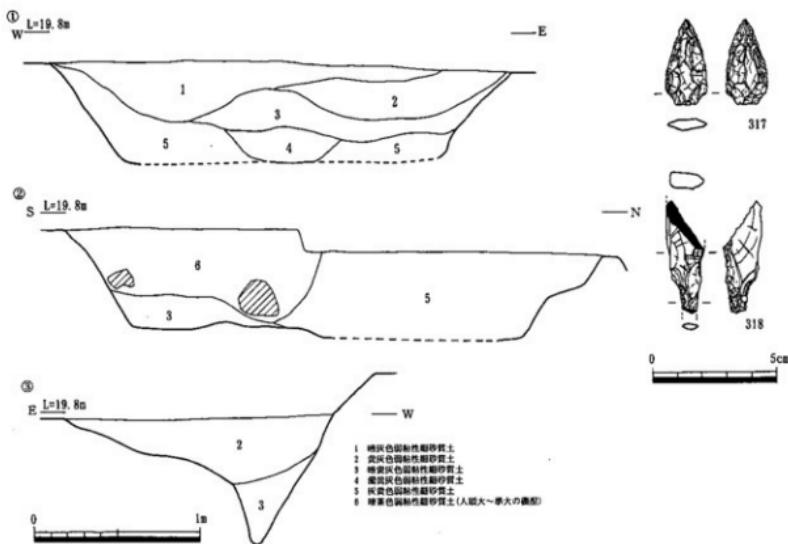
第64図 I上S D 02 出土遺物実測図(1/4)



第65図 I上S D 03 出土遺物実測図(1/4)



第66図 III a上S D 01 断面図(1/30)



第67図 VIa SD 01断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/2、1/4)

VI a S D 01 (第 67 図、図版 19・30)

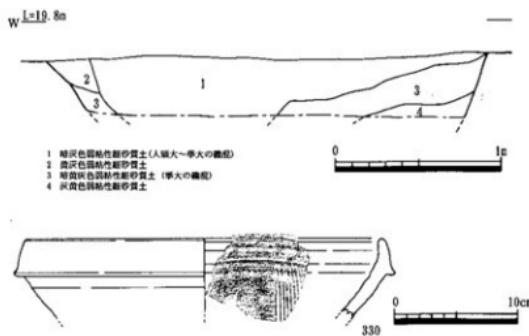
VI a 区北西で検出した。周囲の地形は緩やかに北に下がる。溝として調査したが、調査区内を蛇行し更に北と南で断面形が極端に異なるため、川の可能性もある。位置も溜め池脇の谷で最も深い地点に当たる。埋土は自然堆積を示し、6 層は人頭大の礫が混じることから、一気の土石流も連想させる。しかし、全体を土石流とするには、上層（6 層）に大きな礫を含むため通常の堆積順とは逆である。いずれにしても下手（20 cm 低い）の V 区で検出していない点は、自然の流れである可能性が高い。

コンテナ半箱程度のサヌカイト片・弥生土器・須恵器・土師器・土師質土釜・土師質すり鉢・備前焼・古瀬戸・青磁碗・瓦・釘状鉄製品等が出土した。317 は石鑿、318 は石錐である。319 は青磁碗で体部は直線的に開き、口縁が外反する。上田氏分類の D 類にあたり、14 世紀後半から 15 世紀中葉に属すると考えられる。釉全体に貫入が入る。320 は 49 頁の土師器杯分類①である。321 は土師質壺、322・323 は土師質

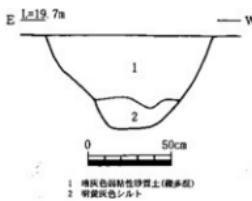
土鍋、324・325 は土師質土釜である。321 は近世に属するようにも見える。322・324 は外面に煤が付着する。326～328 は備前焼すり鉢である。口縁が下に突出し、内面見込みには節目がないため、備前焼 IV 期の 14 世紀後半から 16 世紀初頭に属する。329 は頭部がつぶれる釘と考える。また未実測であるが、古瀬戸には灰釉のかかる平碗と、茶褐色の鉄釉と高台周辺に錆釉を施す天目が含まれる。後者は古瀬戸後期様式 II 期以降の特色とされる。瓦は両面ナデで、凹面に細い刷毛目が残る。出土遺物から VI a S D 01 は 15 世紀代に属すると判断する。

VI a S D 03 (第 68 図、図版 30)

VI a 区北端で検出した。断面・埋土が VI a S D 01 に似る。これも V 区で検出していない。掲載遺物のほかに、土師質すり鉢が出土している。330 は備前焼す



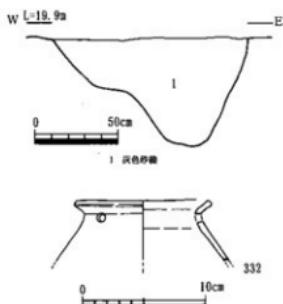
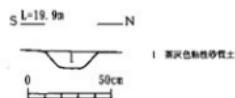
第 68 図 VI a S D 03 断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)



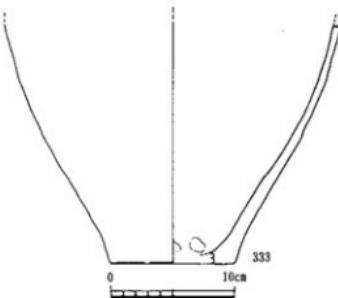
第 69 図 VI a S D 04 断面図 (1/30)



第 70 図 VI b S D01 出土遺物実測図 (1/4)



第 71 図 VII a 上 S D 01 断面図 (1/30),
出土遺物実測図 (1/4)



第 72 図 VII a 上 S D 01 断面図 (1/30),
出土遺物実測図 (1/5)

り鉢で、口縁外面の突出が著しく、備前焼IV期前半の14世紀後半～15世紀前半に属する。

VII a S D 04 (第 69 図)

VII a S D 03 の東で検出した短い溝である。瓦がわずかに出土した。礫を多く含むことから、これもVII a 区 S D 01 やVII a 区 S D 03 同様の流れであると考える。

VII b S D 01 (第 70 図)

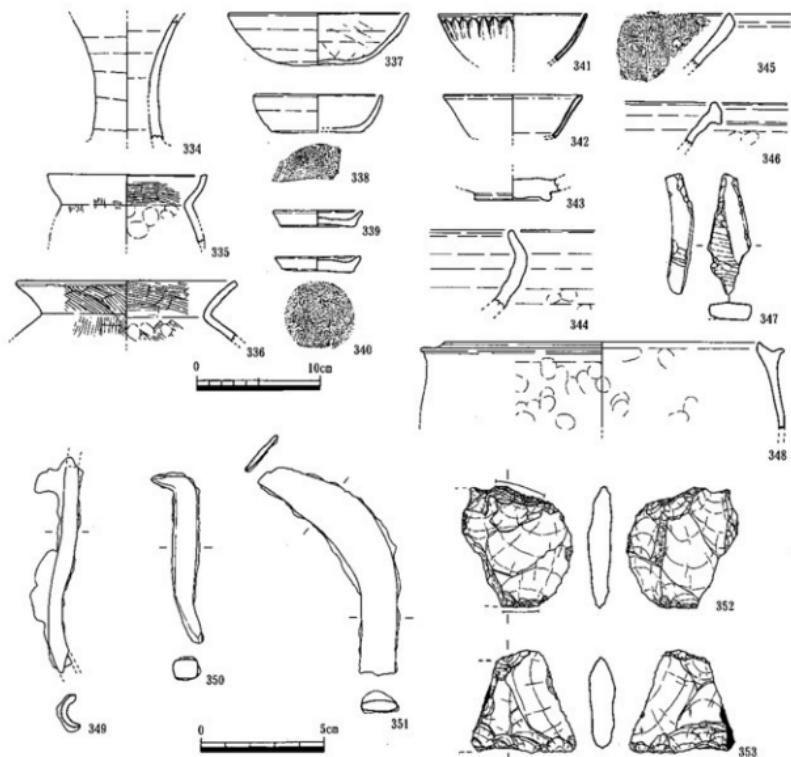
VII b 区北西部の調査区外に延びる現存3mの溝である。掲載した遺物の他、弥生土器がわずかに出土した。331は磨滅した土師器小皿である。

VII a 上 S D 01 (第 71 図)

VII a 区中央の弧状を描く深さ60cmの溝で、埋土に人頭大の礫を含み土石流と判断されている。弥生土器・須恵器・縁泥片岩製石斧片が少量出土した。332は弥生土器甕で、弥生時代中期に属する。穿孔が1ヶ所残る。遺構はVII a 上 S H 01より新しいが、土石流であることを考慮して、VII a S D 01 同様の時期を考えておきたい。

VII a 上 S D 02 (第 72 図)

VII a 区北側にある東西方向の直線の溝で、浅く細い。地形から東に流れると思われる。磨滅した弥生土器が少量出土した。333は弥生土器甕である。表面は磨滅している。出土遺物からは溝の



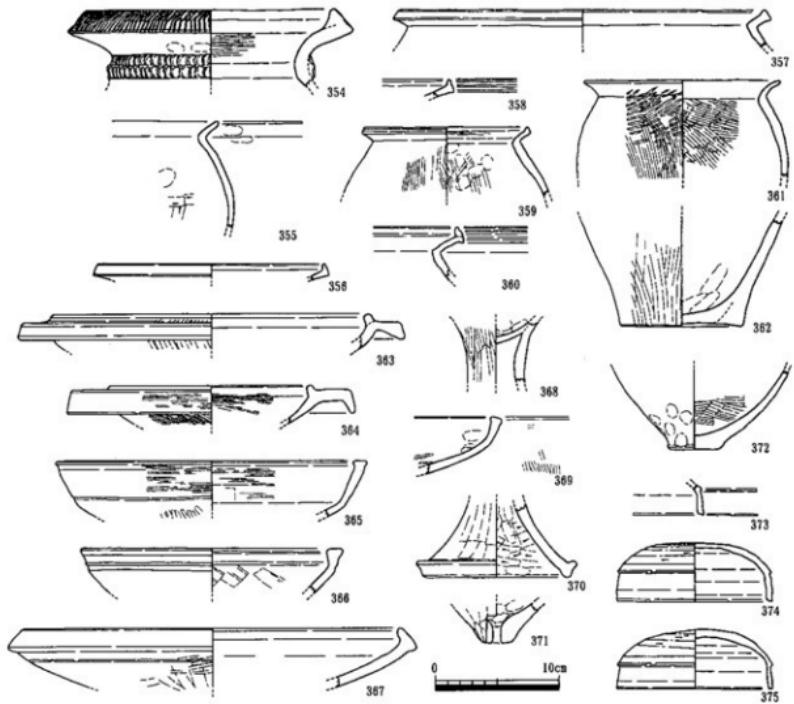
第73図 包含層出土遺物実測図①(1/2、1/4)

時期を判断できない。

5 包含層出土の遺物（第73～81図、図版30～33）

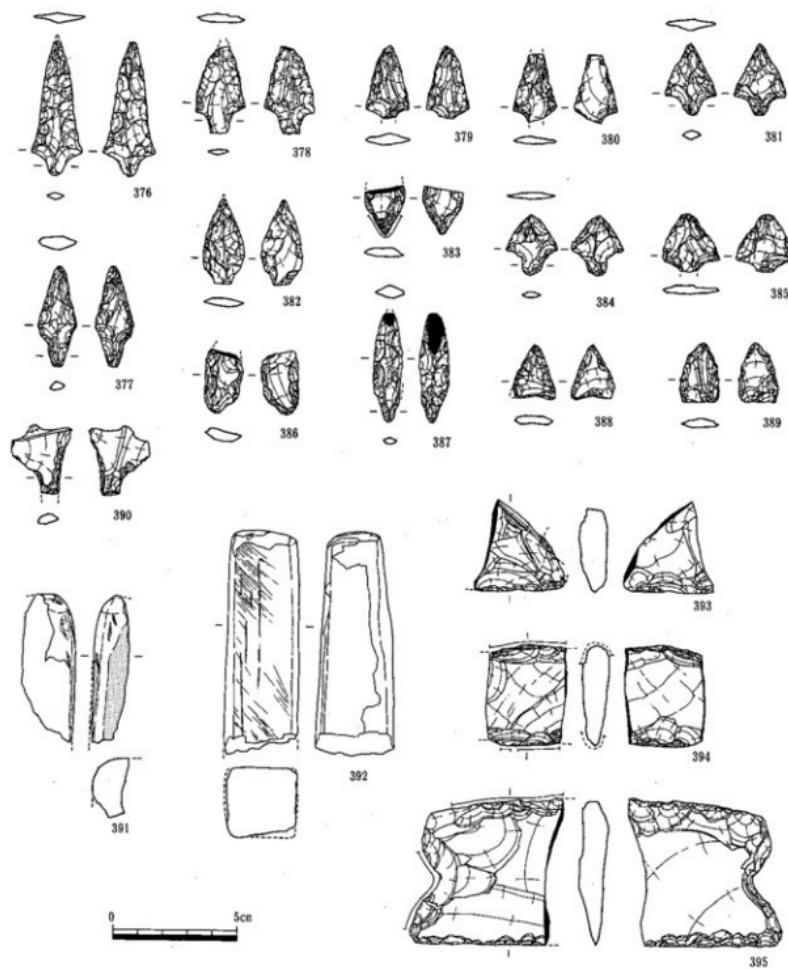
遺跡全体で、28ℓコンテナ20箱分の遺物が出土した。ここではその中から残存状況の良好なものを抽出して掲載している。遺物の抽出は遺構同様任意であり、特異なものや石器については目に付いたものとなるだけ掲載している。掲載遺物の構成が包含層出土遺物全体に占める比率を反映している訳ではないことをお断りしておく。遺物は調査区更に同一包含層等のまとまりごとに掲載している。遺物の散布はその調査区がその遺物の時期に利用されていたことを示すという仮定の下に、各調査区の時期別の利用状況を把握し、遺構による検討結果を補完することを目的とした。

334～353はI区出土の遺物である。ここではコンテナ2箱分の遺物が出土した。表土掘削・遺



第74図 包含層出土遺物実測図②(1/4)

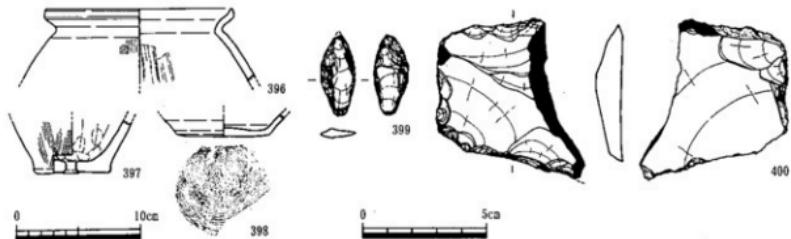
構面精査による出土がほとんどである。334は須恵器壺である。335・336は古代の甌である。335は口縁が内湾し、端部には上向きの平坦面を作り出す。336は口縁外面も刷毛目を施す。337は深く椀状の土師器杯である。11～12世紀ごろのものである。底部はヘラ切りの痕跡をナデ消している。338も土師器杯である。体部は滑らかに湾曲し口径は小さい。底部は糸切りしている。339・340は土師器小皿である。前者は土師器小皿分類a、後者はbである。341は青磁碗で、外面に片切り彫りで鶴蓮弁を描く。342は口禿げの白磁碗IX類である。341・342とも13世紀中頃～14世紀初頭のものである。343は青磁碗で、高台底にも釉がかかる。また内面見込みには砂目積みらしき跡が残る。12世紀中頃～13世紀前半に属すると考える。344は備前焼と思われる鉢である。345は土師質のすり鉢である。単目は1本単位に入る。346は東播系のこね鉢である。口縁のみ自然釉がかかる。口縁形態より14世紀前半のものと判断する。347は滑石製石鍋の破片を転用した温石である。石鍋時の外面には煤が付着する。ノミで鉄を削り取り、上部両側にぶらさげる紐をかけるための抉りを入れる。石鍋としての形状から12～13世紀のものと考える。348は土師質の土釜で、鉄の下に煤が付着する。349は断面U字形の縁金具になりそうな鐵器である。歪みが原型どおりなのかわからない。350は釘で、頭部は直角に折れ曲がっている。351は鉄鎌である。現在の鎌



第75図 包含層出土遺物実測図③(1/2)

と同じ形状をしている。右下の長方形部分は木の柄に差し込むのであろう。352・353は弥生時代の石包丁である。いずれも破片である。側縁に紐等をかける抉れはない。また352は刃部とその反対側の縁は使用によるのか潰れている。

354～400はⅢa区から出土した。Ⅲa区ではコンテナ4.5箱分の遺物が出土した。このうち3箱が同一の包含層である黒色砂質土（第7図土層⑤第2層）から、残りが表土掘削・遺構面精査による出土である。354～395は黒色砂質土包含層出土遺物から抽出した。ほとんどが弥生時代の遺

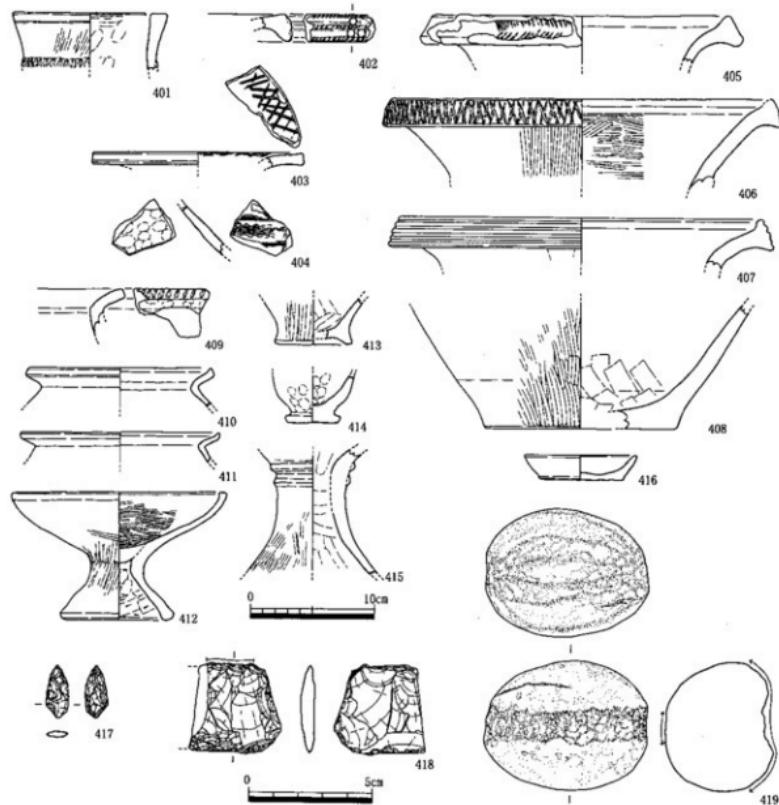


第 76 図 包含層出土遺物実測図④(1/2, 1/4)

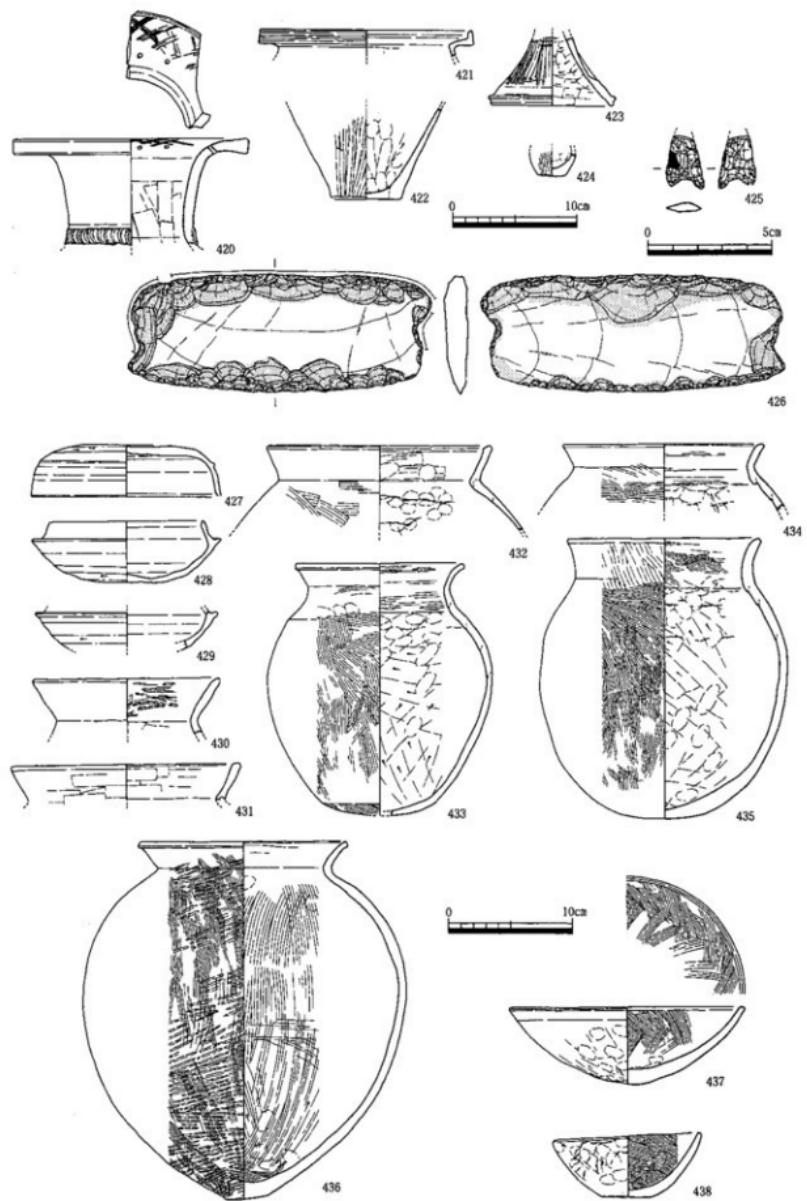
物で古墳時代の遺物がごく少量含まれる。他の調査地点で、弥生時代の包含層の上に薄く古墳時代の包含層が堆積することを確認しており、ここでも古墳時代の遺物は上位の包含層のものを混じって取り上げたものと判断する。354は壺である。突帯には爪先で左から右へと2段の刻み目を入れる。355～362は甌である。358～360は口縁端に凹線がある。361は外面に叩き目が残る。胎土に金雲母が多く含む。363～370は高杯である。363は外面に放射状のヘラ磨きを施す。366は凹線が2条ある。367は磨滅で不明瞭だが内外面ともヘラ磨きの可能性がある。368・370は脚部である。371は瓶である。372は鉢である。内面に板目が文様状に残る。これらの弥生土器はほとんどがⅢ～Ⅳ様式に属するが、361・372はV様式後半～終末のものである。373～375は古墳時代中期の杯蓋である。口径からTK 47型式のものと考える。376～389は石鎌である。390は石錐である。391・392は緑泥片岩製の柱状片刃石斧である。391は右上の網目部分に使用による磨滅が認められる。392に残る斜めの線は、使用の結果としては方向が斜めなので研磨痕と考える。393～395は石包丁で、394は表面が風化し、刃部とその反対の背縁は漬れ更に使用による磨滅が著しい。395は側縁と背縁が潰れる。396は弥生時代の甌である。397は甌の底を穿孔し瓶としている。398は底部糸切りの土師器杯である。399は石鎌、400は石包丁である。

401～419はⅡc区出土の遺物である。Ⅱc区ではコンテナ3.5箱分の遺物が出土した。このうち3箱が「弥生包含層」とした層から、残りが表土掘削・遺構面精査による出土である。409は下部土層確認トレンチ、416・417は機械掘削等で出土し、他は「弥生包含層」から抽出した。401～408は壺である。401は頸部に刻み目凸帯を貼り付け、402は凹線と刻み目と円形浮文貼り付けとを組み合わせている。403は口縁上面に櫛描きの斜格子文、404は平行及び波状の櫛描き文、405は綾状の刻み目と無文を一定間隔で繰り返し、406は交差する刻み目、407は4条の深い凹線と、さまざまな文様が用いられている。409～411・413は甌である。409は口縁に刻み目が入る。411・412は胎土に金雲母を多く含む。412・415は高杯である。414は手捏ねの鉢である。弥生土器は409のみⅠ様式中頃に属し他はⅢ～Ⅳ様式に属すると考える。Ⅱc区とⅢa区は同じ谷の上流と下流に当たり時期も同じであることから、「弥生包含層」と黒色砂質土は同一の包含層で、これらの遺物は斜面上から流れ込みまたは投棄されたものと判断できる。416は底部ヘラ切りの土師器小皿である。417は小型の石鎌である。418は石包丁で背縁が潰れている。419は表面を打ち欠いて紐をかける凹部を作り出した石鎌である。石材は砂岩に見える。

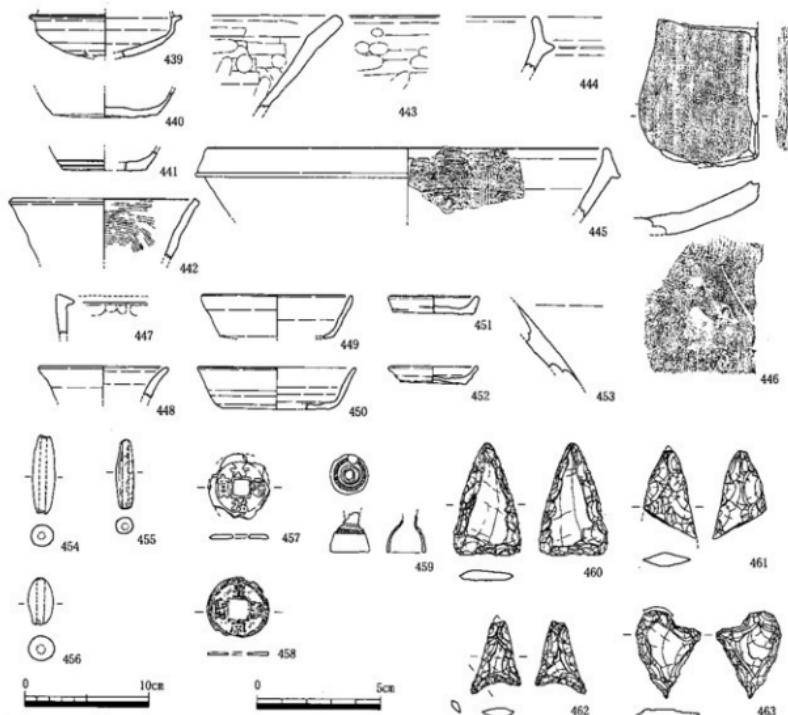
420～435・439～441・443～446・457はV区出土の遺物である。V区では、弥生・古墳時代の包含層と表土掘削・遺構面精查でそれぞれコンテナ1箱ずつ計2箱分の遺物が出土した。420～426は弥生時代の包含層である灰褐色砂質土出土遺物から、426～435は古墳時代の包含層である黒色弱粘質土出土遺物からそれぞれ抽出した。420は壺で、口縁上面を斜格子と穿孔、頸部を刻み目凸帯で飾る。421は壺で口縁は3条の凹線を入れる。422は甕底部である。423は高杯の脚部で、透かしにはならない三角形の大きな刻みを入れる。以上弥生時代Ⅲ～Ⅳ様式に属する。424はごく小型の壺である。425は石鏃である。426は完存する石包丁で、磨滅による光沢が全体に顕著に残る。427～429は須恵器蓋杯で、427は天井が低く、口径が大きい。428は口縁に重ね焼の痕跡が残り、429は外面ヘラ削りが弱い。MT 15型式に属する。430～435は土師器甕である。433は底を型枠に入れて成型したのか、体部から急角度で丸まる。刷毛目も体部と底で工程が明らかに異



第77図 包含層出土遺物実測図⑤(1/2、1/4)



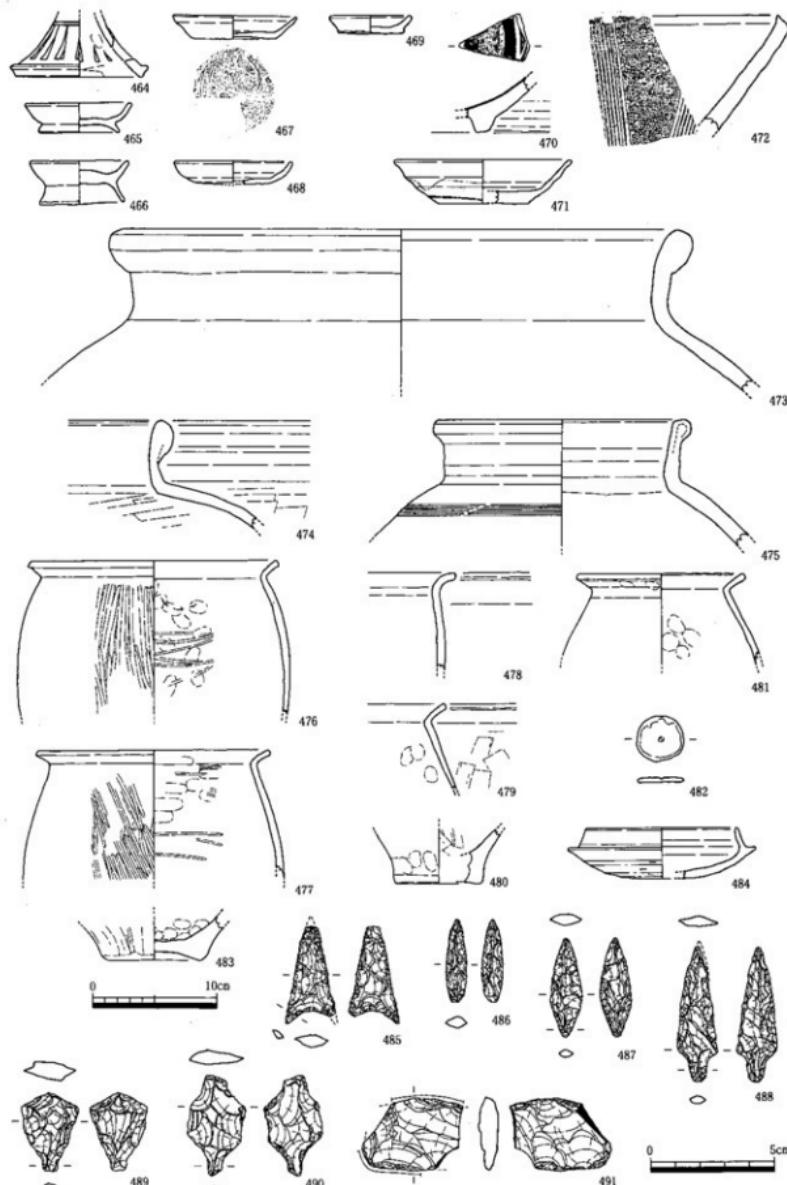
第78図 包含層出土遺物実測図⑥(1/2、1/4)



第79図 包含層出土遺物実測図⑦(1/2、1/4)

なる。434・435は口縁と体部の接合痕が内面に顯著に残る。435は2種の刷毛目原体を使用している。状況から同じ包含層の427～429と同一時期のものと判断する。439は須恵器杯である。TK 209～TK 217型式に属する。440・441は土師器杯である。440は上が欠けている様子が実は口縁が少し磨滅しているだけで皿の可能性もある。441はヘラ切り時にヘラ先が体部に触り、沈線状の痕跡を残す。443は土師質土鍋で外面に煤が付着する。444・445は備前焼すり鉢である。いずれもIV期後半の15世紀代のものである。446は須恵質の平瓦で凹面に布目、凸面に繩目叩きの痕跡が残る。また端面・側面は糸切りで、凹面は桶に幅1.7cmの側板が使われていたことが観察できる。古代に属する。457は宋代の嘉祐通宝である。

VIb区では、調査区東端に自然流路がありここから遺物がわずかに出土している。436は弥生時代の甕で、底部は小さく外面に叩き目が残る。437・438は弥生時代の鉢で、437内面は刷毛目に装飾性も与えており、刷毛目の方向を変えることにより、綾杉状文様を意図したと思われる。438も同様に刷毛目で放射状の文様を作り出している。以上の形態より、この自然流路は弥生時代終末期のものと判断する。



第80図 包含層出土遺物実測図⑧(1/2、1/4)

VI a 区では、表土掘削・遺構面精査中にコンテナ 0.5 箱分の弥生土器・須恵器蓋杯・土師器杯・青磁・備前焼・東播系こね鉢・土師質すり鉢・古瀬戸天目・土師質土鍋・土師質土釜・網目瓦・鉄釘等が出土した。442 は古墳時代中期ごろの土師器壺の口縁である。459 は中空の銅製で、形態は密教に用いられる鉢に似るが小型である。461・462 は弥生時代の石鎧である。

VII 区では、表土掘削・遺構面精査中にコンテナ 1.5 箱分の弥生土器・須恵器杯・土師器杯（ヘラ切り・糸切り）・土師器小皿（ヘラ切り）・和泉型瓦器椀・産地不明陶磁器・備前焼すり鉢・須恵質こね鉢・土鍋・土釜・火鉢・焼土等が出土し、VII S X 01 周辺の包含層掘削中にコンテナ 0.5 箱分の弥生土器・須恵器・土師器杯（糸切り・ヘラ切り）・土師器小皿（糸切り・ヘラ切り）・備前焼すり鉢・土師質すり鉢・産地不明陶磁器少量・土釜・土鍋等が出土した。447 は弥生土器甕で、外面に沈線が認められないが、I 様式後半～II 様式ごろのものであろう。448 は須恵器壺である。ハソウの可能性もある。449・450 は 49 頁で行った土師器杯分類①に含まれる。451・452 は土師器小皿で、451 は 245 同様内面底に強い指頭痕が残るが、こちらは底部ヘラ切りである。453 は備前焼甕である。454～456 は穿孔した管状土錐である。458 は宋代の皇宋通宝である。460 は弥生時代の石鎧である。463 は弥生時代の石錐で、棒状の錐部を持たず、握りの先端を尖らせており、上部の縁は一部潰れている。

IV 区では、包含層からコンテナ 0.5 箱分の弥生土器・須恵器杯・土師器杯（ヘラ切り）・白磁？・備前焼・古瀬戸・焰烙・近世陶磁器・焼土等が出土した。464 は弥生土器高杯の脚部で、透かし穴を多く入れる。465・466 は土師器で高台付き杯としたが、口径・形態は小皿である。形態はさまざまで、少量が 10～13 世紀の香川県全域で出土する。467～469 は土師器小皿でともに底部糸切りである。471 は古瀬戸折縁中皿で、折りが弱い。形態から古瀬戸後期様式 II 期の 14 世紀末から 15 世紀前葉に属すると思われる。被熱部があり、内面見込みには釉がかっていない。その他の部分の釉はハケヌリ後ツケガケかハケヌリである。492 は石鍋を転用した温石と思われるが、滑石とは石材が異なるように見える。また石鍋とすれば径はかなり大きくなる。上から 3 cm の所が最もくびれ、ここに紐をかけるように加工していると考える。470・472～475 は IV 区との間の斜面部で出土したもので、IV 区から転落したものと判断し、ここに含める。470 は肥前陶器の刷毛目皿である。内面に砂目積みの痕が残り、17 世紀以降のものである。472 は備前焼すり鉢で、口縁内面が突出し IV 期前半の 14 世紀後半～15 世紀前半のものである。外口縁下に重ね焼の痕が薄く残る。473～475 は備前焼壺で、いずれも IV 期前半のものである。

VII a 区では、表土掘削・遺構面精査中にコンテナ 1 箱分の弥生土器・須恵器杯・古墳時代の土師器甕・備前焼すり鉢・瓦・サヌカイト片 44 等が出土した。476～481 は弥生時代の甕である。478 は胴から口縁に緩やかに外反し、他は稜を持って曲がる。前者は I 様式後半ごろ、後者は II 様



第 81 図 包含層出土遺物実測図⑨ (1/2)

式ごろのものである。482は弥生時代の紡錘車である。土器片の転用であるが、穿孔途中の未製品である。483は弥生時代の壺である。484は須恵器杯である。TK 10型式に属する。485～488は石鏡である。489・490は石錐である。ともに先端が折れている。491は小型の石包丁と思われる。残存する縁はすべて潰れている。

6 近世墓（図版8）

IV区で検出した近世の墓群において、17基の墓の内、14基で墓標を確認した。東京都新宿区教育委員会1987『自證院遺跡一新宿区立富久小学校改築工事に伴う緊急発掘調査報告書一』で行われた墓標調査の墓標分類を用いて記録を作成したので、ここに記載しておく。

第1号墓；墓標頂部が斜めに裁断され、向かって左が低くなる。銘文なし。

第2号墓；非塔形墓標で、舟形光背を持つ。銘文は「享保十三申天（改行）妙岸信尼（改行）十一月十九日」と読める。

第3号墓；不整形墓標で、銘文もない。

第4号墓；非塔形墓標で、仏像形を呈する。左側面に「宝暦十三未天（改行）十月廿六日」、右側面に「□（梵字）慈法信女」と読める銘文を配する。

第5号墓；非塔形墓標で、舟形光背を持つ。銘文は「享保九辰天（改行）智善信尼（改行）十二月十九日」と読める。

第6号墓；非塔形墓標で、舟形光背を持つ。銘文は「元禄十五午天（改行）了□□（改行）十一月七日」と読める。

第9号墓；非塔形墓標で、方柱形で頂部は四角錐状を呈する。正面に「□（梵字）□□月□信士」、左側面に「六月十日」、右側面に「享保十九寅天」と読める銘文を配する。

第10号墓；非塔形墓標で、方柱形で頂部は半円形を呈する。正面に「□（梵字）善苗信士」、左側面に「四月廿四日」、右側面に「天明七未年」と読める銘文を配する。

第11号墓；非塔形墓標で、方柱形で頂部は半円形を呈する。正面に「□（梵字）智□信尼」、左側面に「七月十日」、右側面に「天明八申年」と読める銘文を配する。

第12号墓；非塔形墓標で、舟形光背を持つ。銘文は「寛政二戌年（改行）□（梵字）道圓信士（改行）正月廿九日」と読める。

第14号墓；不整形墓標で、銘文もない。

第15号墓；非塔形墓標で、方柱形で頂部は半円形を呈する。正面に「□（梵字）西往常仙信士」、左側面に「俗名鶴太」、右側面に「文政二卯七月廿四日」と読める銘文を配する。

第16号墓；半円形墓標で、銘文はない。

第17号墓；非塔形墓標で、方柱形で頂部は半円形を呈する。正面に「□（梵字）□我宏信士」、左側面に「□□□九年八月十一日」、右側面に「俗名圭平」と読める銘文を配する。

なお、墓坑は第17号墓を例にとると、深さ90cm前後の豊坑で底はすり鉢状となる。人体を座った形に曲げ直接埋葬したものと考えられる。付近で多量に出土した寛永通宝は、直接墓坑から出土したものではないものの、この墓群に関連するものと考える。

第4章　まとめ（第4・16・17図）

前章で見てきたように、善門池西遺跡では、主に弥生時代、古墳時代、中世の3時期の遺構を検出した。本章では、各時代の遺構をまとめることにより、遺跡全体の歴史的変遷を跡付けたい。

縄文時代

縄文時代後期の土器細片が1点だが出土した。ここではこの時期に人間の生活の痕跡が残されていたことをもって、成果としたい。

弥生時代

弥生時代をとおして、遺物の出土量が最も多いのはⅡ～Ⅳ様式の弥生時代中期である。弥生時代の竪穴住居3棟のうち2棟がこの時期に属する。とはいえた前期（I様式）や後期（V様式）に属する土器も出土している。弥生の全時代を通して人間の存在が認められるということで、当然東の池の奥遺跡・西の成重遺跡という大きな遺跡をつなぐ線上に位置することが大きな原因であろう。量がわずかとはいえた前期の土器が出土したことは、同様にわずかの出土である成重遺跡とあわせて、この一帯に人間の姿が見られるようになった当初から、成重遺跡と善門池西遺跡が同じ生活圏に入っていたことを示すものと考える。

竪穴住居3棟は残る1棟も後期の初めであり、すべて時期が重ならない。各時期1棟が善門池西遺跡には建っていたことになる。とはいえた竪穴住居1棟の継続時期を考えれば、この3棟は連続するものではなく、1家族の継続した居住を示すものではない。この竪穴住居が建てられた理由は、もちろん成重遺跡と異なり直視でき時期も重なる池の奥遺跡の存在が大きな要因であるが、これ以上のことは判明しなかった。石器製作に関わる特異な傾向も見出せず、サヌカイト剥片の少量の出土から、多少のサヌカイト石器の製作は行っていたことがわかった。他石材の石器も出土しているが、遺跡相応で少量である。東西の遺跡とも近すぎ、石器を多く出土した池の奥遺跡からの石器の中継地点とはなりえなかったのである。

遺跡内は中央の尾根とそれに隔てられた2つの谷からなり、起伏が多い。竪穴住居はⅢa区とⅦa区の2つの谷の緩傾斜地に建てられ、一定の土地を占める事はない。割れた土器などの廃棄を行った場所はⅠ区やⅢa区・Ⅴ区で見つかり、斜面下に落とし込むように捨てていたことがわかった。また、Ⅲa区では石の集められたⅢa下SX02がある。弥生時代の終わりに付近の不要な石が集められたようであり、成重遺跡の集石墓とは性格が異なる。

Ⅲa区では複雑に入り組んだ流れの痕跡が多数見つかった。土石流が東側の谷で発生したようである。

古墳時代～古代

竪穴住居3棟が見つかった。Ⅵa・Ⅶa区という西側の谷にかたまる。包含層出土遺物の傾向からも、こちら側の谷が生活域であったことは明らかである。時期の明らかな竪穴住居2棟は、6

世紀第2四半期（TK 10）～7世紀中葉（TK 217）が存続期間である。また包含層からは、6世紀初頭ごろ（TK 10）の土器が少量出土している。この間、池の奥遺跡は既に廃絶し、成重遺跡でも古墳時代前期に栄えた後集落はいったん途切れる。つまりこの一帯で、善門池西遺跡でのみ集落が認められるわけである。およそ県下ではこの時期の集落は比較的発見例が少なく、貴重な発見といえる。暮らしやすい平野を避け（逆に平野にある成重遺跡では7世紀後半に古墳が築かれている。）、谷の出口に隠れるよう小規模で暮らす必然性を検討する必要があるが、あまりにも資料が少なく、その段階に至っていない。湊川流域における古墳分布の希薄さ（神越古墳は尾根裏の原間遺跡側との関連を考えておく。）は、大集落の不在の傍証かも知れない。

なお、原間遺跡では7世紀前半の掘立柱建物跡が1棟見つかっている。この時期、竪穴住居から掘立柱建物へ居住様式が変化する中で、集落の出現にあたってより前進的である掘立柱建物を採用したのは、官道沿いであることに原因を求めるようであり、それと関連するのか原間遺跡の集落は8世紀前半まで継続する。集落の廃絶もまた南海道の整備による官道の移動が原因と考えられている。善門池西遺跡の集落は、掘立柱建物を採用することなく、廃絶した。

ピットから、7世紀第4四半期～8世紀第2四半期及び10世紀の須恵器が出土している。

中世

善門池西遺跡を最も特徴付けるのは、中世である。とはいっても、遺構には見るべきものはない。ピットは多数検出したが、調査中の検討にもかかわらず掘立柱建物跡を構成することはできていない。検出した溝は小規模で、規則性は窺えない。唯一直線的で規模が大きくその性格を強く主張していたのがⅦ S X 01であり、この中に含まれていた遺物が善門池西遺跡を香川県における中世史研究の中に位置づけることになった。

一方、出土した遺物の大部分を占めるのは、年代観が与えられている遺物より、12世紀後半から15世紀前半であり、集落の存続もおよそこの中で考えることができる。また、この時期の土師器杯で分類を試みた結果（49頁）、大きく3群に分かれた。③群は12世紀末から14世紀前半、①群は14世紀末から15世紀初頭の時期を与えた。それらと出土地点の関係を見ると、③群はⅠ区、①群がⅦ区で主に出土している。両地区は尾根を間に挟んでおり、14世紀後半を中心とした若干の空白期間も生じているため、Ⅰ区のピット・遺物を残した集団とⅦ区のピット等・遺物を残した集団は、継続しない別の集団と捉えられる。

まずⅠ区の集団について検討する。残された遺構は掘立柱建物跡を構成できなかったピット多数と小溝少しである。遺物は土師器・東播系こね鉢・備前焼・中国産青白磁碗・石鍋などで、この時期一般の集落で使われていたものである。出土量全体も少なく、小集落であったことが推測される。時期判断の決め手がないが、Ⅰ上 S P 111やⅢ a 上 S X 01を検出地点によってこの集落に伴うものとすれば、家屋の焼失が発生している。これが集落の廃絶の原因となったかは明らかでない。

次にⅦ区の集団について考える。こちらも掘立柱建物跡を構成できなかったピット多数と土坑・溝少しを検出したのみで、他にⅦ b 区の石敷き遺構が含まれるかもしれない程度である。遺物の出土量もそれほど多いものではなく、ここまではⅠ区同様小集落の条件を備えている。しかし、出

した遺物内容は小集落とはいえないものである。

VII S X 01 から出土したものには、まず「威信財」に含まれうる小野正敏氏の言われる中国産の天目・青磁盤がある。これらは人をもてなしたり部屋を飾ったりする際に使われるもので、その場面にどのようなものが用いられるかで主の身分階層を示すものである。戦国大名の少し下の階層までなら「威信財」のどれかを必ず持つなければならないといったもので、当然一般の集落からは出土しない。更にその場面には香炉や瓶子も使われるが、VII S X 01 では中国陶磁のコピー商品である古瀬戸で補っている。ここに、「威信財」も少しは持っているが、多量に持つこともできないといった身分が示されている。古瀬戸には天目も含まれ、同一器種での量の不足もコピー商品で補っているのである。

もうひとつ重要なのは丹波焼の存在である。丹波焼は操業開始以来、16世紀まで流通は丹波・播磨・京・堺など近畿でもごく一部に限られていた。流通範囲が一気に拡大したのは備前焼すり鉢の衰退を受け、すり鉢を中心として大坂商人に販売を請け負わせた江戸時代に入ってからである。中世段階の近畿以外での丹波焼の分布は、静岡県の中世城館跡から出土した壺、徳島県勝瑞城跡付近出土の藏骨器、福井県一乗谷遺跡、愛媛県湯築城跡等が知られる程度である。静岡県の壺は丹波焼そのものが目的でなく、中に入れたものを運ぶために使われたと考えられ、善門池西遺跡資料もその可能性が高い（注）。またいずれの遺跡も中世城館である点が共通し、通常の流通でなく、城主が、焼き物あるいは容器に入れられたものを、特に求めて運ばせたことが窺える。更に 311 も産地不明だが、刻印を持つ有力な中世陶器と考えられ、同様な入手意図が感じられる。ちなみに善門池西遺跡前の湊川を下ると、15世紀中頃の『兵庫北関入船納帳』に東讃で入闘回数が最も多く記録される三本松港が間近である。鎌倉時代の丹波焼が多く出土した大野遺跡の所在する加古川の河口とは瀬戸内海をはさんで向かい合っており、壺は加古川舟運と瀬戸内海の淡路あるいは塩飽を伝て運ばれたと想定できる。このような地の利が一地方の富裕層に稀な丹波焼をもたらしたのではないだろうか。

VII区には富裕層が住んでいたことが明らかになった。であれば、狭い範囲であり、VII区の集團は一家族で、複数の家族からなる「集落」とは考えにくい。居住期間を無視すれば、検出したピットもVII区は I 区の数分の一であり、ピットの中に含まれる柱穴そしてそれにより構成される掘立柱建物が少なかったと読むことには無理がない。ただ、富裕層一家族の屋敷とすると、通常想定される屋敷の区画溝もなく、何より立地条件が悪い。時代が下るが 16世紀後半から 17世紀初頭の高松市東山崎・水田遺跡 C 地区屋敷は、これに近い出土遺物に四角い区画溝を持つ広い屋敷である。このような土地を選べなかつた点に、当時の状況が明瞭に反映されていると考える。この屋敷が焼失しその残骸がVII S X 01 に埋められたのは明らかであるが、埋められた事実は焼失後の整地・屋敷の再建が行われた可能性を示唆している。この地での居住の放棄は、別の要因を考えるべきであろう。V～VII区で多数認められた土石流の痕跡はそのひとつの回答である。なおVII S P 003 はこの屋敷に伴う地鎮遺構で、VII S K 01 は小さな儀式宴会で使われた「かわらけ」を捨てた穴であると考える。

最後に、あえて富裕層の正体を具体的に求めるなら、北数百mの地点にある白鳥城跡が浮かんでくる。白鳥城跡の詳細は不明だが、城主白鳥玄蕃は小範囲を支配した武士であると考えられて

る。文献には16世紀初頭には存在したことが記録され、居館も隣接して存在したとの地名伝説も残る。白鳥城と結びつけるなら、一族の屋敷ということにでもなるのであろうが、証拠は何もない。

注：篠山市教育委員会河野克人氏のご教示による。

参考文献

- 小野正敏 1999 「物価から見る中世の消費とりサイクル」『歴博』94号、国立歴史民俗博物館
2002 「講演「湯築城と戦国城館の発掘」の要旨」『湯築城だより』2、湯築城資料館

遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
I 上 SP001	弥生土器・土師器小皿僅少	I 上 SP087	土師器僅少
I 上 SP002	土師器杯系切・甕僅少、炭、焼土	I 上 SP089	土釜・土師器杯系切少量、焼土
I 上 SP003	弥生土器・土師器僅少	I 上 SP091	亀山焼・土師器杯系切・土釜僅少
I 上 SP006	土師器少量	I 上 SP092	土師器杯系切僅少
I 上 SP007	須恵器・土師器杯僅少	I 上 SP093	土師器小皿 ハ切 1
I 上 SP008	土師器杯僅少	I 上 SP095	土師器僅少
I 上 SP009	土師器杯系切僅少	I 上 SP098	土師器僅少
I 上 SP010	土師器僅少、焼土	I 上 SP104	須恵器僅少
I 上 SP012	土師器僅少	I 上 SP106	土師器僅少
I 上 SP017	弥生土器僅少	I 上 SP108	弥生土器僅少
I 上 SP018	土師器僅少	I 上 SP109	備前焼・土師器僅少
I 上 SP019	土師器僅少	I 上 SP110	土師器僅少
I 上 SP020	土師器僅少	I 上 SP111	焼土大量;平坦面や隣り合わせの平坦面を持つもの多数。厚さ4~6cmの壁で、中心に5cm間隔で径2cmの円形の材を縦横に組み合わせたものを木舞としている。
I 上 SP022	土師器僅少	I 上 SP123	焼土
I 上 SP024	赤燒土器僅少	I 上 SP124	土師器杯系切 1・小皿系切 1、東播系こね鉢 1
I 上 SP026	土師器僅少、焼土?	I 上 SP125	土師器杯系切 1・小皿系切 1
I 上 SP028	土師器杯系切僅少	I 上 SP126	東播系こね鉢 1
I 上 SP029	土師器杯系切僅少	I 上 SP127	焼土
I 上 SP032	弥生土器僅少	I 上 SP130	焼土
I 上 SP034	土師器・弥生土器僅少	I 上 SP131	炭、焼土多量;平坦面の2cm内側で凸形の平坦面がある
I 上 SP035	赤燒土器僅少、焼土多量	I 上 SP134	鉄器片、焼土
I 上 SP036	土師器僅少	I 上 SP140	土師器杯系切 1
I 上 SP039	土師器僅少	I 上 SP144	焼土少量;平坦面の2cm内側で凸形の平坦面がある。厚さ3.5cmで両面に平坦面を持つもの
I 上 SP043	土師器杯僅少、炭	I 上 SP150	焼土
I 上 SP044	土師器僅少、焼土	I 上 SP151	焼土;平坦面が直角に隣り合わせるものがある
I 上 SP045	須恵器・土師器僅少	I 上 SP155	焼土?
I 上 SP046	土師器僅少	I 上 SP162	焼土
I 上 SP050	炭	I 上 SP166	炭
I 上 SP051	土師器僅少	I 上 SP168	焼土
I 上 SP053	赤燒土器僅少	I 上 SP170	焼土
I 上 SP054	赤燒土器僅少	I 上 SP179	焼土?
I 上 SP055	土師器僅少	I 上 SP183	焼土
I 上 SP056	土師器僅少、炭	I 上 SP184	焼土
I 上 SP057	土師器杯僅少、焼土	I 上 SP195	弥生土器甕 1 高杯 1
I 上 SP059	土師器杯僅少、焼土	I 上 SP197	サカナ片 1
I 上 SP060	土師器僅少	I 上 SP199	サカナ片 1
I 上 SP062	土師器杯僅少	I 上 SP205	サカナ片 1
I 上 SP064	赤燒土器僅少	I 上 SP208	土師器杯系切 1
I 上 SP066	土師器僅少	I 上 SP221	炭
I 上 SP068	土師器僅少	I 上 SP232	亀山焼甕 1
I 上 SP069	須恵器・土師器杯 ハ切僅少	I 上 SP240	焼土
I 上 SP070	土師器僅少	I 上 SP257	炭、焼土
I 上 SP071	土釜・土師器杯僅少	I 上 SP258	焼土?
I 上 SP072	土師器杯系切・和泉型瓦器楕・口禿 磁器僅少	I 上 SK01	弥生土器少量
I 上 SP073	亀山焼・土師器杯・弥生土器僅少、燒 土	I 上 SD02	焼土
I 上 SP074	赤燒土器僅少		
I 上 SP076	土師器僅少		
I 上 SP077	土師器僅少		
I 上 SP078	土師器僅少		
I 上 SP080	土師器僅少		
I 上 SP081	土師器僅少		
I 上 SP086	土師器僅少		

第3表 遺構別出土遺物一覧 (1)

遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
I 上 SD03	土師器杯 ハレ切 1・束播系こね鉢 1 弥生中期土器大量。磨滅細片多く、流れ込みか。サバ付片 138・石包丁片 3、結晶片岩石包丁片 1	III a 下 SP036	弥生土器・古墳時代土器・サバ付片僅少
I 上 SR01		III a 下 SP037	弥生土器・サバ付片僅少
I 下 SP006	弥生土器少量	III a 下 SP038	弥生土器僅少
I 下 SP007	弥生土器僅少	III a 下 SP039	弥生土器僅少
I 下 SP008	弥生中期土器僅少	III a 下 SP043	弥生土器・サバ付片僅少
I 下 SP012	弥生中期土器僅少	III a 下 SP050	サバ付片 2
II cSP01	赤焼土器僅少	III a 下 SP060	赤焼土器僅少
II cSP02	弥生中期土器僅少	III a 下 SP061	サバ付片 1
II cSP04	弥生土器僅少	III a 下 SP064	弥生土器僅少
II cSP05	土師器僅少、サバ付片 1	III a 下 SP069	赤焼土器僅少
II cSP06	赤焼土器僅少	III a 下 SP072	古墳時代土器器僅少
III a 上 SP001	土師器僅少	III a 下 SP073	赤焼土器・サバ付片僅少
III a 上 SP005	土師器僅少	III a 下 SP075	弥生土器・磨製石斧片僅少
III a 上 SP006	弥生土器僅少	III a 下 SP078	赤焼土器僅少
III a 上 SP007	弥生土器僅少	III a 下 SP079	弥生土器僅少
III a 上 SP010	金黃? 僅少	III a 下 SP080	弥生土器僅少
III a 上 SP018	弥生土器僅少	III a 下 SP081	弥生土器僅少
III a 上 SP040	弥生土器僅少	III a 下 SP085	弥生土器僅少
III a 上 SP042	弥生土器僅少	III a 下 SP086	弥生土器僅少
III a 上 SP048	弥生土器僅少	III a 下 SP094	赤焼土器僅少
III a 上 SP051	弥生土器僅少	III a 下 SP096	弥生土器僅少
III a 上 SP056	弥生土器僅少	III a 下 SP097	弥生土器僅少
III a 上 SP058	弥生土器僅少	III a 下 SP103	弥生中期土器・サバ付片僅少
III a 上 SX01	弥生土器・須恵器・土師器少量、石鏃?、サバ付片 8、焼土; 壁土内の工法に 2 種あるか	III a 下 SP105	弥生土器僅少
III a 上 SD01	弥生土器・土師器・土師質土器僅少	III a 下 SP108	弥生土器僅少
III a 上 SD03	弥生土器僅少	III a 下 SP109	弥生土器僅少
III a 上 SD04	弥生土器僅少	III a 下 SP011	小鉄塊、焼土?
III a 下 SH01	弥生中期土器・古墳時代土師器少量、サバ付片 9	III a 下 SP110	弥生土器僅少
III a 下 SH01 -SK1	赤焼土器僅少	III a 下 SP117	弥生土器僅少
III a 下 SH01 -SP04	弥生土器僅少	III a 下 SP118	弥生土器僅少
III a 下 SH01 -SP08	サバ付片 1	III a 下 SP120	弥生土器僅少
III a 下 SH01 -SP10	赤焼土器僅少	III a 下 SP125	弥生土器僅少
III a 下 SK01	弥生土器僅少	III a 下 SP134	弥生土器僅少
III a 下 SK02	弥生土器僅少、サバ付片 1	III a 下 SP137	弥生土器僅少
III a 下 SP002	赤焼土器僅少	III a 下 SP138	赤焼土器僅少
III a 下 SP012	弥生土器僅少	III a 下 SP143	弥生土器僅少
III a 下 SP013	赤焼土器僅少	III a 下 SP145	サバ付片 1
III a 下 SP015	赤焼土器僅少	III a 下 SP150	弥生土器僅少
III a 下 SP016	赤焼土器僅少	III a 下 SP151	弥生土器僅少
III a 下 SP017	赤焼土器僅少	III a 下 SP189	弥生土器僅少
III a 下 SP020	弥生土器僅少	III a 下 SP195	赤焼土器僅少
III a 下 SP022	弥生土器・サバ付片僅少	III a 下 SP207	赤焼土器僅少
III a 下 SP023	弥生土器僅少	III a 下 SP211	弥生土器僅少
III a 下 SP029	弥生土器僅少	III a 下 SP213	炭
III a 下 SP032	サバ付片 2	III a 下 SP219	弥生土器僅少
		III a 下 SP231	弥生土器僅少
		III a 下 SP242	弥生土器僅少
		III a 下 SP245	弥生土器僅少
		III a 下 SP248	石鏃? 1
		III a 下 SP249	弥生土器僅少
		III a 下 SP254	赤焼土器僅少
		III a 下 SP257	赤焼土器僅少
		III a 下 SP270	赤焼土器僅少、サバ付片 1

第 4 表 遺構別出土遺物一覧 (2)

遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
III a 下 SP274	弥生土器僅少	V SP078	赤燒土器僅少
III a 下 SP286	弥生土器僅少	V SP080	土師器僅少
III a 下 SP290	弥生土器僅少	V SP085	土師器杯糸切僅少
III a 下 SP294	弥生石器 1	V SP086	土師器小皿・須恵器僅少
III a 下 SP299	弥生土器・赤燒土器僅少、サカナ片 1	VI a SH01	弥生土器・須恵器杯・土師器少量、サカナ片 7、炭
III a 下 SP301	赤燒土器僅少	VI a SP011	弥生土器僅少
III a 下 SP303	弥生土器僅少	VI a SP014	土師器僅少
III a 下 SP304	弥生土器僅少	VI a SP015	弥生土器・古墳時代須恵器・土師器僅少、炭
III a 下 SP305	弥生土器僅少	VI a SP016	弥生土器・須恵質杯糸切・瓦質すり鉢僅少
III a 下 SP306	弥生土器僅少	VI a SP017	土師器僅少
III a 下 SP310	弥生土器僅少	VI a SP018	土師器僅少
III a 下 SX02	弥生前期土器 1、弥生中期土器大量 (磨滅細片がほとんど。オホイの葉痕 が付いた底片あり)、須恵器・瀬戸美濃 窯?天目僅少混入、サカナ片 34・石 鏃 1	VI a SP033	土鍋僅少
III a 下 SD01	弥生土器少量、サカナ片 2	VI a SX03	弥生土器僅少、サカナ片 1
III a 下 SD02	弥生中期土器大量、刀子片 ?1、サカナ片 222・石包丁片 ?10・種不明石器片 1、結晶片岩片 2、綠泥片岩石斧片 2	VI a SD01	弥生土器・須恵器・土釜・土鍋・土 師質すり鉢・備前焼すり鉢・甕・土師 器杯・糸切糸切・小皿・糸切・古瀬戸 ・白磁?碗・多量・瓦片・サカナ片 27、 鉄針 ?1
III a 下 SD03	弥生土器少量	VI a SD03	土師質すり鉢僅少
III a 下 SD04	弥生土器僅少	VI a SD04	瓦僅少
III a 下 SD06	弥生土器僅少	VI b SD01	弥生土器僅少
III a 下 SD08	弥生土器・古墳時代土師器・須恵器 ・近世土器少量、サカナ片 2・石鏃 1、 種不明石器 1	VI b SX01	弥生土器僅少
III a 下 SD09	赤燒土器僅少、サカナ片 1	VII a 上 SH01	須恵器・磨滅弥生土器多量、サカナ片 10、結晶片岩 1、種不明石器片 1
III a 下 SD17	赤燒土器僅少、サカナ片 3	VII a 上 SH01	磨滅弥生土器僅少 -P04
III a 下 SD19	赤燒土器僅少	VII a 上 SH01	弥生土器・赤燒土器僅少、磨滅 -甕
V SP019	赤燒土器僅少	VII a 上 SH02	弥生土器・赤燒土器少量、磨滅サカナ 片 5
V SP020	弥生土器僅少	VII a 上 SH02	磨滅弥生土器僅少 -P04
V SP024	赤燒上器僅少	VII a 上 SH02	绳文土器?僅少 -P06
V SP026	備前焼僅少	VII a 上 SH02	赤燒土器僅少 -P07
V SP028	赤燒土器僅少	VII a 上 SH02	磨滅弥生土器僅少、サカナ片 1 -P08
V SP029	土師器僅少	VII a 上 SH02	磨滅赤燒土器僅少、サカナ片 1 -P09
V SP036	土師器杯僅少	VII a 上 SH02	赤燒土器僅少 -P10
V SP039	弥生土器僅少	VII a 上 SH02	赤燒土器僅少 -P12
V SP042	燒土?僅少	VII a 上 SH02	赤燒土器僅少、サカナ片 1 -P13
V SP043	土師器・備前焼僅少	VII a 上 SH03	弥生土器少量、サカナ片 13・石包丁 片 ?1、綠泥片岩石斧 2
V SP046	土師器僅少	VII a 上 SH03	弥生土器僅少 -P01
V SP047	赤燒土器僅少		
V SP050	赤燒土器僅少		
V SP053	燒土?僅少		
V SP054	赤燒土器僅少		
V SP056	弥生土器・土師器僅少		
V SP061	赤燒土器僅少		
V SP066	土師器僅少		
V SP067	土師器僅少		
V SP069	土師器僅少		
V SP070	赤燒土器僅少		
V SP071	土師器僅少		
V SP074	土師器・備前焼僅少		
V SP076	土師器僅少		
V SP077	土釜僅少		

第5表 遺構別出土遺物一覧 (3)

遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
VII a 上 SH04	弥生中後期土器少量、竹か片 4・石包丁片 ?1、炭	VII SP010	土師器杯僅少
VII a 上 SP004	磨滅弥生土器僅少	VII SP011	土師器杯僅少
VII a 上 SP005	磨滅弥生土器僅少	VII SP012	土師器僅少
VII a 上 SP006	磨滅弥生土器僅少	VII SP013	土師器僅少
VII a 上 SP009	磨滅弥生土器僅少	VII SP014	土師器僅少
VII a 上 SP011	磨滅弥生土器僅少、竹か片 片 1	VII SP015	土師器僅少
VII a 上 SP013	磨滅弥生土器僅少	VII SP016	備前焼・土師器杯 ハセ 切僅少
VII a 上 SP014	磨滅弥生土器僅少	VII SP017	土鍋少量・土師器杯 ハセ 切僅少、炭
VII a 上 SP016	磨滅弥生土器僅少	VII SP018	開元通宝 1・鐵片 1
VII a 上 SP017	磨滅弥生土器僅少	VII SP019	土師器杯・土釜僅少
VII a 上 SP018	磨滅弥生土器僅少	VII SP020	土師器杯・土鍋僅少
VII a 上 SP019	磨滅弥生土器僅少	VII SP021	土師器杯僅少
VII a 上 SP022	磨滅弥生土器僅少、竹か片 片 1	VII SP022	土師器僅少
VII a 上 SP023	磨滅弥生土器僅少	VII SP025	土師器僅少
VII a 上 SP025	磨滅弥生土器僅少、竹か片 片 1	VII SP028	土師器僅少
VII a 上 SP028	磨滅弥生土器僅少	VII SP029	土師器杯僅少
VII a 上 SP029	磨滅弥生土器僅少	VII SP030	赤燒土器僅少
VII a 上 SP030	磨滅弥生土器僅少	VII SP031	土師器僅少
VII a 上 SP031	磨滅弥生土器僅少	VII SP032	土師器僅少
VII a 上 SP033	磨滅弥生土器僅少	VII SP033	須恵器・土釜・土師器杯 ハセ 切僅少
VII a 上 SP034	磨滅弥生土器僅少	VII SP035	土師器僅少
VII a 上 SP035	磨滅弥生土器・中世土師器? 僅少	VII SP036	土釜僅少
VII a 上 SP038	磨滅弥生土器僅少	VII SP037	土師器僅少
VII a 上 SP040	須恵器高杯・弥生土器僅少	VII SP038	土師器僅少
VII a 上 SP041	磨滅弥生土器僅少	VII SP039	須恵器僅少
VII a 上 SP044	磨滅弥生土器僅少	VII SP040	土釜僅少
VII a 上 SP048	磨滅弥生土器僅少	VII SP041	土師器僅少
VII a 上 SP049	磨滅弥生土器僅少	VII SP042	土師器僅少
VII a 上 SX01	磨滅弥生土器僅少、竹か片 片 1	VII SP043	土師器僅少
VII a 上 SX02	磨滅弥生土器僅少	VII SP044	土師器僅少、炭
VII a 上 SD01	弥生土器・須恵器少量、綠泥片岩石斧片 1	VII SP045	土師器杯僅少
VII a 上 SD02	弥生土器少量。磨滅	VII SP046	土師質土器僅少
VII a 上 SD03	弥生土器僅少。磨滅、竹か片 片 1	VII SP047	土師器僅少
VII a 上 SD04	弥生土器少量。磨滅、竹か片 片 1	VII SP048	土師器杯 ハセ 切僅少
VII a 上 SD07	須恵器・土師器僅少	VII SP049	土師器僅少
VII a 上 SD08	磨滅弥生土器僅少	VII SP050	土師器僅少
VII a 上 SD09	繩文土器? 僅少	VII SP051	土鍋僅少
VII a 下 SP059	磨滅弥生土器僅少	VII SP052	土師器僅少
VII a 下 SP062	磨滅弥生土器僅少	VII SP053	土釜僅少
VII a 下 SP064	磨滅弥生土器僅少、石鏃 1	VII SP054	土師器杯 ハセ 切僅少
VII a 下 SP066	磨滅弥生土器僅少	VII SP055	土師器僅少
VII a 下 SP067	磨滅弥生土器僅少	VII SP056	土釜僅少
VII a 下 SP075	磨滅弥生土器僅少	VII SP057	土釜僅少
VII SP001	土師器杯・小皿系切僅少	VII SP058	須恵器僅少
VII SP002	土師器杯僅少	VII SP060	土師器僅少
VII SP003	須恵器古代杯・土師器杯僅少	VII SP062	土師器杯僅少
VII SP004	土師器杯僅少	VII SP063	土師器杯僅少
VII SP005	弥生土器僅少	VII SP064	土師器僅少
VII SP006	土釜・土師器杯・龜山燒少量、炭、燒土	VII SP065	土師器・須恵器僅少
VII SP007	土鍋僅少	VII SP066	土師器・須恵器僅少
VII SP008	備前焼・土釜・土師器杯 ハセ 切僅少	VII SK01	土師器僅少
		VII SK02	備前焼・土師器 ハセ 切僅少、鐵片 1
		VII SK03	土師器杯僅少

第6表 遺構別出土遺物一覧(4)

遺構名	出土遺物
VII SK04	土師器杯々切少量、炭、焼土:木舞? 平坦面より0.5~2cm内側に径1cm の窪みの痕跡が残る。鉄釘?3
VII SK06	土師器々切僅少
VII SX01	弥生土器・土釜・備前燒甕・小皿・ 土師器杯々切・和泉型瓦器輪・須恵 器甕・古瀬戸瓶子同一個体片・天目 他・青磁碗・盤・白磁碗・古瀬戸天 目・平碗・御皿・筒形香炉・瓶子・ 直縁大皿・丹波燒壺・產地不明陶磁 器・焰烙・土師質取っ手付土鍋大量、 磨石鍋片・磨製石斧片・鉄釘?少量、 高熱のためか曲がっている。青銅製 品が焼けて融けている。焼土大量、 平坦面を持つものが多く、それらは 平坦面より1~3cmの部分が被熱 のため赤変している。それより内へ は黒くなり、植物纖維の炭化した ものが認められる。
VII SX02	弥生土器・土師器僅少
VII SX03	土釜・備前燒・肥前陶器少量、鉄釘?1

第7表 遺構別出土遺物一覧 (5)

遺物番号	標本図版	種類・器種	遺構名	残存率	粘土	色調	釉色調	外面調整	備考
1 13 - 鋼 深鉢	W SP009			小片	細・多 (内)2SY5/4浅黄色 (外)2SY5/2暗灰色		磨滅	磨滅	傾き不确定
2 14 20 尺 瓶	III a 下 SH01			1/8	中・普 (内)10YR5/4褐色 (外)10YR6/4にぶい褐色		横け・行・へき 磨滅・板行・指頭痕 ・へきりは弱い	磨滅	傾き不确定
3 14 20 尺 瓶	III a 下 SH01			1/8	中・多 (内)10YR4/2灰褐色 (外)10YR6/4にぶい褐色		横け・行・へき 磨滅・板行・指頭痕 ・へきりは弱い	磨滅	傾き不确定
4 18 - 尺 瓶	W aSH02			小片	粗・多 5YR6/6褐色		横け・磨滅・刷毛目 ・へき	磨滅	傾き不确定
5 18 - 尺 瓶	V aSH02			小片	粗・少 (外)10YR7/6明黄色		磨滅	磨滅	傾き不确定
6 18 - 尺 瓶	W aSH02			小片	粗・少 (内)10YR6/6褐色 (外)10YR5/4にぶい赤褐色		行・へき 横け・指頭痕・行	磨滅	傾き不确定
7 19 - 尺 瓶	W aSH03			1/8	中・普 (内)2SY7/2灰褐色 (外)2SY6/1黄褐色		横け	横け	凹線2条
8 21 - 尺 瓶	I 上 SP195			底部4/8	中・普 (内)10YR5/3にぶい黄褐色		磨滅	磨滅	
9 21 - 尺 高杯	I 上 SP195			底部2/8	細・普 (内)10YR5/3にぶい黄褐色		行	行	
10 21 - 尺 瓶	III a 下 SP094			2/8	細・少 (内)10YR5/2灰褐色 (外)10YR7/4にぶい黄褐色		横行・刷毛目	横行・指頭痕・行	口輪、頭、肩に擦 描文様文
11 21 - 尺 瓶	III a 下 SP039			2/8	中・普 10YR7/4にぶい黄褐色		磨滅	横け・板行・行	
12 21 - 尺 瓶	III a 下 SP310			小片	中・普 (内)10YR6/6褐色		横行・刷毛目	横け・行	
13 21 - 尺 瓶	III a 下 SP020			底部2/8	中・普 (内)2SY4/1黄褐色 (外)10YR7/3にぶい黄褐色		磨滅・へき 板行・指行	板行・指行	
14 21 - 尺 瓶	III a 下 SP299			底部4/8	中・多 (内)2SY5/1黄褐色 (外)2SY6/3にぶい黄褐色		へき 指行・指頭痕	指行・指頭痕	
15 21 - 尺 鉢	V I tsSP008			小片	粗・普 10YR5/4にぶい黄褐色		矧み目・刷毛 目	行	上面に円形浮文貼 付
16 21 - 尺 瓶	V I aSP040			1/8	粗・普 (内)7SYR6/6褐色 (外)10YR7/4にぶい黄褐色		磨滅	磨滅・行	
17 21 - 尺 瓶	V I aSP040			2/8	中・普 (内)7SYR6/6褐色 (外)10YR7/4にぶい黄褐色		行	行・刷毛目	
21 24 - 尺 瓶	III a 下 SK02			1/8	中・多 10YR8/4浅黃褐色		磨滅	磨滅	
22 26 - 尺 瓶	III a 下 SX02第2層 黒色砂質土			2/8	粗・普 10YR8/4浅黃褐色		行・磨滅	行・磨滅	

遺物	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
23 26 - 弁 盆	III a 下 SX02 第 2 層	頸部 1/8	中・普 褐色粘多	(内)7.5YR7/3 にぶい橙色 (外)7.5YR7/4 にぶい橙色	板け	磨滅			
24 26 - 弁 盆	III a 下 SX02 第 2 層	底部 2/8	粗・普 (外)2.5Y6/2 暗黄色	(内)2.5Y4/1 暗灰色 (外)2.5Y6/2 暗黄色	胎底・板け	△へ削り・指頭痕		△へ削り・指頭痕	△へ削り・少しだけ前り気味
25 26 - 弁 盆	III a 下 SX02	底部 8/8	細・普	(内)2.5Y6/2 暗黄色 (外)2.5Y5/1 暗灰色		指頭痕	指け	指頭痕	
26 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02	1/8	中・多	(外)7.5YR7/4 にぶい黄橙色 (内)7.5YR7/6 橙色	磨滅	磨滅			
27 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 土器群 1	小片	中・少	10YR6/6 明黄褐色	磨滅	磨滅			
28 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02	1/8	中・普 (外)10YR6/4 にぶい黄褐色	(内)10YR6/4 にぶい黄褐色 (外)10YR6/3 にぶい黄褐色	横行・板け	横行			
29 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 第 2 層	小片	中・少	(内)10YR6/2 暗黄褐色 (外)10YR6/2 暗黄褐色	横行・刷毛目	横行・刷毛目	毛目・指頭痕	横行・刷毛目	横行・刷毛目
30 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 土器群 1	1/8	中・多	2.5Y5/2 暗灰黄色	磨滅・刷毛目?	磨滅・刷毛目?	刷毛目・指頭痕	刷毛目・指頭痕	刷毛目・指頭痕
31 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 第 2 層	1/8	中・普 金質母少	5YR6/6 橙色	横行・板け	横行・板け	△へ削り・指頭痕 3 条	横行・板け	△へ削り・指頭痕 3 条
32 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 土器群 1	1/8	中・少	5YR6/6 橙色	横行・板け	横行・板け	△へ削り・指頭痕 2 条	横行・板け	△へ削り・指頭痕 2 条
33 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 第 2 層	底部 4/8	中・普 褐色粘多	(内)10YR6/6 黄橙色 (外)10YR7/4 にぶい黄褐色	刷毛目・磨滅・行	磨滅・指頭痕	磨滅・指頭痕	磨滅・指頭痕	磨滅・指頭痕
34 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 土器群 4	底部 2/8	細・普	(内)6YR6/6 橙色 (外)2.5YR5/6 明赤褐色	磨滅・行磨き・行	磨滅・行磨き・行	△へ削り・行	磨滅・行磨き・行	△へ削り・行
35 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 第 2 層	底部 3/8	中・普 黑色砂質土	(内)2.5Y4/1 黄灰色 (外)2.5Y7/2 暗黄色	磨滅・行磨き	磨滅・行磨き	指頭痕	指頭痕	指頭痕
36 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02	底部 6/8	中・普	(内)2.5Y8/2 暗白色 (外)2.5Y8/2 暗白色	磨滅・指頭痕・行	磨滅・指頭痕・行	板け・指頭痕	磨滅・指頭痕・行	磨滅・指頭痕
37 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 土器群 1	底部 4/8	中・多	(内)10YR7/2 にぶい黄褐色 (外)10YR6/2 暗黄褐色	△・板け	△・板け	△へ削り	△・板け	△へ削り
38 26 - 弁 瓢	III a 下 SX02 土器群 1	底部 2/8	中・普	(内)10YR7/3 にぶい黄褐色 (外)10YR6/2 暗黄褐色	磨滅・△磨き・行	磨滅・△磨き・行	指頭痕	磨滅・△磨き・行	磨滅・△磨き・行
39 26 - 弁 瓶	III a 下 SX02 第 2 層	小片	細・普	(内)10YR4/1 暗褐色 (外)10YR6/2 暗黄褐色	磨滅・△磨き	磨滅・△磨き	磨滅	磨滅	磨滅
40 26 - 弁 瓶	III a 下 SX02	底部 8/8	細・多	10YR8/3 深黄褐色	指け・指頭痕	指け・指頭痕	指け	指け・指頭痕	指け
41 26 - 弁 缶	III a 下 SX02	底部 3/8	中・少	(内)5YR6/6 橙色 (外)5YR5/4 にぶい赤褐色	磨滅・板け	磨滅・板け	板け・行	磨滅・板け	板け・行

第10表 土器觀察表 (3)

遺物番号	標本図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
42 26 - 弥 高杯	III a 下 SX02 第2層	1/8	細・少	10YR6/4にぶい黄褐色				横け・ハラ磨き	横け・ 横け	
43 26 - 弥 高杯	III a 下 SX02 第2層	底部1/8	中・少	(内)2.5Y7/3 淡黄色 (外)2.5Y4/1 黄褐色				胎底・刷毛目・横 行・ 横行	刷毛目・横 行・ 横行	
44 26 - 弥 高杯	III a 下 SX02 土器群1	小片	中・多	7.5YR7/6 橙色				ハラ磨き・胎底	行・磨底	
47 28 - 弥 盖	III a 下 SD01	小片	中・多	7.5YR7/6 橙色				胎底・刻み目	磨底	
48 28 - 弥 盖	III a 下 SD01	小片	粗・多	(内)7.5YR6/6 橙色 (外)10YR6/4にぶい黄褐色	褐色粒少			胎底	磨底	
50 31 - 弥 盖	III a 下 SD04	小片	中・少	10YR8/3 淡黄褐色				横け・ 横け	横け・ 横け	
52 33 - 弥 盖	III a 下 SD08	2/8	中・多	(内)10YR8/4 淡黄褐色 (外)10YR6/4にぶい黄褐色				横け・磨底	横け・磨底	
53 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	小片	中・少	10YR5/2 淡黄褐色				行・ 刻み目・横行	行・ 横行	凹線2条
54 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	小片	粗・普	10YR5/3にぶい黄褐色				刻み目・ナガ	ナガ	外から内へ穿孔
55 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	小片	中・普	(内)10YR6/2にぶい黄褐色 (外)10YR7/2にぶい黄褐色				凹線4条・輪描绘 軌文・直線文	凹線4条・輪描绘 軌文・直線文	
56 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	小片	中・普	(内)10YR7/3にぶい黄褐色 (外)10YR7/4にぶい黄褐色				横け・ 横け	横け・ 横け	
57 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	1/8	中・普	(内)7.5YR6/4にぶい橙色 (外)7.5YR7/6 橙色	金雲母少			ハラ磨き・横け	行・磨底	天地不明・凹線現 存6条
58 34/21 弥 盖	III a 下 SD02	底部8/8	細・少	10YR5/6 黄褐色				磨底・指行	指行	
59 34/21 弥 盖	III a 下 SD02	底部8/8	細・普	10YR7/4にぶい黄褐色				指行	指行	丁寧なつくり
60 34/21 弥 盖	III a 下 SD02	底部8/8	褐色粒・ 金雲母少	10YR6/3にぶい黄褐色				刷毛目・ナガ	ナガ	丁寧なつくり
61 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	1/8	細・少	10YR6/2 淡黄褐色				横け・刷毛目	指頭痕	
62 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	1/8	粗・少	2.5Y8/4 淡黄色				横け・刻み目	横け	
63 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	1/8	細・少	(内)10YR7/4にぶい黄褐色 (外)10YR7/3にぶい黄褐色				横け	指頭痕・ナガ	
64 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	小片	微・普	(内)7.5YR7/4にぶい橙色 (外)6YR6/6 橙色				横け	横け	経状浮文の単位不 明
65 34 - 弥 盖	III a 下 SD02	1/8	中・少	(内)10YR4/1 暗灰色 (外)10YR7/4にぶい黄褐色				横け・板ナガ・ナガ	板ナガ・ナガ	

第 11 表 土器観察表 (4)

遺物番号	標本図版	種類・器種	通査名	残存率	胎土	色調	胎色調	外面調整	内面調整	備考
66 34 弥 壺	III a 下 SD02	小片	(内) 7.5YR6/4 にぶい黄褐色 (外) 10YR6/4 にぶい黄褐色	中・普				機行・板行	機行・板行	
67 34 弥 壺	III a 下 SD02	2/8	(内) 7.5YR5/2 残灰褐色 (外) 12.5Y4/1 黄灰色	中・普				機行・板行・刷み 目・指頭痕・ナ	機行・板行・刷み 目・指頭痕・ナ	
68 34 弥 壺	III a 下 SD02	4/8	(内) 7.5YR8/4 残黄褐色 (外) 17.5YR7/4 にぶい黄褐色	中・多 褐色粒少				刻み目・行・磨減 ナ・唇部	刻み目・行・磨減 ナ・唇部	
69 34 弥 壺	III a 下 SD02	2/8	(内) 7.5YR8/4 残黄褐色 (外) 17.5YR7/4 にぶい黄褐色	細・少 褐色粒少				ナ・指頭痕 ナ・指頭痕	ナ・指頭痕 ナ・指頭痕	
70 34 弥 壺	III a 下 SD02	2/8	(内) 10YR6/4 にぶい黄褐色 (外) 10YR6/6 明黄褐色	粗・普				行・指頭痕・板行 板行・指頭痕	板行・指頭痕	
71 34 弥 壺	III a 下 SD02	1/8	(内) 7.5YR5/2 残黄褐色 (外) 10YR6/2 残黄褐色	中・普	2.5Y8/3 残黄褐色			剥離・磨減・板行	磨減・板行・ナ	
72 34 弥 壺	III a 下 SD02	1/8	(内) 10YR5/2 残黄褐色 (外) 10YR6/2 残黄褐色	微・少				機行・刷り・ナ	機行・刷り・ナ	
73 34 弥 壺	III a 下 SD02	1/8	(内) 7.5YR7/6 残色 (外) 10YR7/4 にぶい黄褐色	細・少				機行・板行・刷毛目	機行・板行・刷毛目	
74 34 弥 壺	III a 下 SD02	小片	(内) 10YR7/3 にぶい黄褐色 (外) 10YR7/3 にぶい黄褐色	中・普				指頭痕・ナ・板行	指頭痕・ナ・板行	径不定
75 34 弥 壺	III a 下 SD02	小片	(内) 10YR6/4 にぶい黄褐色 (外) 17.5YR7/6 残色	微・少				磨減	磨減	
76 34 弥 壺	III a 下 SD02	2/8	(内) 10YR7/4 にぶい黄褐色 (外) 17.5YR7/6 残色	中・普				機行・板行・刷毛 目	機行・板行・刷毛 目	
77 34 弥 壺	III a 下 SD02	底部 2/8	(内) 12.5Y4/1 黄灰色 (外) 10YR4/2 残黄褐色	中・普				刷毛目・指頭痕・ナ 板行・磨減	刷毛目・指頭痕・ナ 板行・磨減	
78 34 弥 壺	III a 下 SD02	底部 4/8	(内) 10YR5/3 にぶい黄褐色 (外) 10YR4/3 にぶい黄褐色	微・普				刷毛目・ナ	刷毛目・ナ	
79 34 弥 壺	III a 下 SD02	底部 3/8	(内) 10YR4/1 残灰色 (外) 17.5YR6/6 残色	中・普				磨減・ナ・磨き・ナ ナ?	磨減・ナ・磨き・ナ ナ?	
80 34 弥 壺	III a 下 SD02	底部 2/8	(内) 2.5Y5/2 残灰黄色 (外) 10YR6/4 にぶい黄褐色	中・多 金翼母少				ナ・磨き・ナ	ナ・磨き・ナ	
81 34 弥 鉢	III a 下 SD02	底部 4/8	(内) 10YR6/3 にぶい黄褐色 (外) 17.5YR7/6 残色	粗・少				ナ・磨き・指頭痕・ナ ナ	ナ・磨き・指頭痕・ナ ナ	
82 34 弥 高杯	III a 下 SD02	小片	(内) 10YR6/3 にぶい黄褐色 (外) 17.5YR5/6 明褐色	中・普				機行・磨減・ナ・磨 板行・指頭痕	機行・磨減・ナ・磨 板行・指頭痕	凹線 3 条

遺物番号	博物館名	種類・器種	遺構名	残存率	出土	色調	輪色調	外面調整	内面調整	備考
83 34 - 弦 高杯	Ⅲ a 下	SD02	小片	中・少	(内)7.5YR7/4にぶい褐色 (外)7.5YR6/6褐色		磨滅・へら削り	磨滅		
84 34 - 弦 高杯	Ⅲ a 下	SD02	小片	中・普	(内)2.5Y8/3淡褐色 (外)10YR8/4淡黃褐色		剥離	剥離		
85 34 - 弦 高杯	Ⅲ a 下	SD02	1/8	細・普 角閃石多・ 褐色粒少	10YR5/4にぶい黄褐色		剥離・磨滅・へら削り き	磨滅・磨滅・へら磨き	下川津B類	
86 34 - 弦 高杯	Ⅲ a 下	SD02	底部3/8	細・普	10YR7/3にぶい黄褐色		行・刻み目 板ナギ・へら磨き・横 け	絞り目・指頭痕・ 板ナギ		
87 34 - 弦 高杯	Ⅲ a 下	SD02	底部1/8	褐色粒多	(内)5YR6/6褐色 (外)5YR6/6褐色		板ナギ	絞り目・へら削り	透し穴の個数不明	
88 34 - 弦 高杯	Ⅲ a 下	SD02	底部1/8	細・普	(内)5YR5/6明赤褐色 (外)5YR6/6褐色		板ナギ	絞り目・へら削り	透し穴の個数不明	
89 34 - 弦 鍋	Ⅲ a 下	SD02	底部3/8	中・普	10YR4/2灰赤褐色		磨滅・指頭痕	指ガサ・指頭痕		
90 34 - 弦 鍋	Ⅲ a 下	SD02	底部8/8	中・普	(内)10YR5/2灰褐色 (外)10YR6/3にぶい黄褐色		指頭痕	指頭痕		
91 34 - 弦 鍋	Ⅲ a 下	SD02	底部1/8	中・普	(内)2.5Y6/3にぶい黄色 (外)2.5Y7/4浅黄色		行・指頭痕	指ガサ		
92 34 - 弦 鍋	Ⅲ a 下	SD02	底部3/8	中・多	(内)10YR7/4にぶい黄褐色 (外)2.5Y7/3浅黄色		磨滅・指頭痕	指頭痕・磨滅		
93 34 - 弦 鍋	Ⅲ a 下	SD02	底部3/8	中・普	(内)10YR6/2灰赤褐色 (外)7.5Y6/4にぶい褐色		指行	指行		
94 34 - 弦 鍋	Ⅲ a 下	SD02	底部8/8	中・少	(内)2.5Y4/1黄褐色 (外)10YR6/2灰黃褐色		刷毛目・指頭痕・ 磨滅	刷毛目・指頭痕・ カゲ		
118 36 - 弦 罐	1 下	SR01	小片	中・普	(内)7.5YR5/4にぶい褐色 (外)5YR5/6明赤褐色		横行	斜格子文		
119 36 - 弦 罌	1 下	SR01	2/8	粗・普	(内)10YR4/2灰赤褐色 (外)10YR5/2灰黃褐色		横行	横行		
120 36 - 弦 罌	1 下	SR01	頸部7/8	中・普	(内)10YR5/3にぶい黄褐色 (外)10YR4/4にぶい黄褐色		行	行・絞り目	凹線は更に下に続 <可能性	
121 36 - 弦 罌	1 下	SR01	底部5/8	粗・多	(内)5YR4/6赤褐色 (外)2.5Y5/4黄褐色		磨滅・へら磨き	磨滅・指行		
122 36 - 弦 罌	1 下	SR01	底部2/8	細・少	(内)7.5YR5/2灰褐色 (外)7.5YR5/3にぶい褐色		へら磨き・行	指行		

遺物番号	種類・器種	遺構名	残存部	胎土	色調	輪色調	外面調整	内面調整	備考
123 36 - 弁 要	I 下 SR01	小片	中・普	(内)2.5Y5/1 黄灰褐色 (外)10YR5/2 灰黄褐色			横行・板行	横行・指け	凹強、上下面に 抵抗強、内面の屈 曲強。
124 36 - 弁 要	I 下 SR01	1/8	中・普	(内)2.5Y8/2 灰白色 (外)10YR7/3 にぶい黄褐色			横行・指け	横行・指け	
125 36 - 弁 要	I 下 SR01	1/8	中・多	2.5Y8/2 灰白色			指け	指け	
126 36 - 弁 要	I 下 SR01	1/8	中・普	(内)7.5YR5/3 にぶい褐色 (外)7.5YR6/4 にぶい褐色			横行・磨滅	横行・磨滅	磨滅
127 36 - 弁 鮮	I 下 SR01	小片	細・中	(内)2.5Y6/2 灰黄色 (外)2.5Y5/1 黄灰色			横行・指頭痕 目?	横行・指頭痕 目?	横行・指頭痕 目?
128 36 - 瓢 盖	I 下 SR01	1/8	中・少	(内)5Y6/2 灰黄色 (外)5Y6/2 灰黄色			磨滅・刷毛目・ △磨き	磨滅・刷毛目・ △磨き	浮文の単位不明
143 37 - 瓢 要	III a 下 SD08	小片	細・普	(内)7.5YR7/3 にぶい褐色 (外)10YR4/1 灰灰色			刻み目・磨滅・△ 磨き	刻み目・磨滅・△ 磨き	
144 37 - 弁 要	III a 下 SD08	底部	7/8	細・普	(内)7.5YR6/4 にぶい褐色 (外)10YR6/3 にぶい黄褐色		回転行	回転行	
145 37 - 弁 要	III a 下 SD08	底部	8/8	中・多	(内)2.5Y5/1 黄灰色 (外)10YR7/4 にぶい黄褐色		△磨き・行	板行・板行	
146 39 22 土 要	V1 aSh101-No. 2 土器部 り	2/8	中・普	(内)10YR6/3 にぶい黄褐色 (外)10YR6/3 にぶい黄褐色			刷毛目・行・△刷り	刷毛目・行・△刷り	
147 39 22 瓢 盖	V1 aSh101	4/8	中・少	(内)N5/1 灰色 (外)7.5Y5/1 灰色			回転行・△刷り	回転行・△刷り	ろくろは上から見 て左回り
148 39 - 瓢 盖	V1 aSh101	小片	細・普	(内)N6/1 灰色 (外)N3/1 灰色			回転行	回転行	
149 39 22 瓢 盖	V1 aSh101-No. 1 土器部 り	8/8	中・普	(内)5Y6/1 灰色 (外)5Y7/2 灰白色			回転行・△刷り	回転行・△刷り	内面に当て具度 (径 3.7cm) 滲敷
150 39 22 土 艶 り	V1 aSh101-No. 2 土器部 り	5/8	粗・少	(内)2.5YR6/4 にぶい褐色 (外)5YR6/4 にぶい褐色			板行・指頭痕・磨 減	板行・指頭痕・磨 減	滑手より下 の肩の傾きは推 定。
151 39 - 弁 要	V1 aSh101	1/8	中・普	(内)5YR4/6 灰褐色 (外)5YR5/6 明赤褐色			横行・板行・刷 毛目	横行・板行・刷 毛目	
152 39 - 弁 鮮	V1 aSh101	2/8	中・普	(内)10YR5/4 にぶい黄褐色 (外)2.5Y4/1 黄灰色			刻み目・△磨き	刻み目・△磨き	
153 41 - 瓢 盖	V1 aSh101	1/8	微・少	N6/1 灰色			回転行	回転行	

第14表 土器観察表 (7)

遺物番号	博物館版圖	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外面調整	内面調整	備考
154 41 22	須 瓶蓋	VII asSH01		3/8	精良	(内)7SY7/1灰白色 (外)10YR7/4にぶい黄褐色	「へ」削り・回転け	回転け	内面天井にあて具 度。へら削りは弱い 外面に櫛状工具擦 痕
155 41	- 須 杯	VII asSH01 電陶刃		2/8	精良	5Y7/2灰白色	回転け	回転け	
156 41 22	須 杯	VII asSH01 電陶刃		4/8	中・少	(内)N6/灰白色 (外)6Y5/1灰褐色	回転け・へら削り	回転け	
157 41	- 須 杯	VII asSH01	小片	細・普	N7/灰白色	回転け	回転け	回転け	
158 41	- 土 壺	VII asSH01 電陶刃		粗・多	(内)10YR6/6明黄褐色 褐色粒多	「へ」削り・磨滅	指頭痕・磨滅		
159 41	- 土 壺	VII asSH01 電陶刃	1/8	粗・多	7.5YR6/6褐色 褐色粒多	磨滅	磨滅		
160 41 23	土 壺	VII asSH01 SH01 電支脚	8/8	中・多	(内)5YR6/6褐色 (外)10YR6/4にぶい黄褐色	端け・刷毛目・磨 擦	板け・板目・磨 擦	板け・板目・磨 擦	口縁直下強い横け。 外面が変あり(電 による二次焼熱)
161 41	- 土 壺	VII asSH01 電陶刃	1/8	粗・多	10YR7/6明黄褐色	磨滅	磨滅	磨滅	
162 41	- 土 壺	VII asSH01 電陶刃	1/8	細・多	10YR6/4にぶい黄褐色 褐色粒多	磨滅	磨滅	磨滅	
163 41	- 土 壺	VII asSH01 電陶刃	2/8	細・多	(内)7.5YR6/6褐色 褐色粒多	磨滅	へら削り		
164 41	- 土師質 土鍋	VII asSH01 電陶刃	小片	中・普	(内)5YR6/6褐色 (外)7.5YR4/3褐色	板け・指頭痕・指 板け	板け	板け	焼き不確定
165 44	- 弥 高杯	VII asSX05	1/8	細・少	(内)10YR7/3灰黄色 (外)12.5Y8/3灰黄色	磨滅・剥離	指け・磨滅		
166 46	- 須 高台付杯	VII SP007	底部1/8	精良	(内)7.5Y7/1灰白色 (外)5Y6/1灰白色	回転け	回転け		
169 46	- 須 杯	I上 SP073	底部2/8	中・普	2.5Y7/2灰白色	磨滅	磨滅	磨滅	
170 46	- 須 杯	V SP086	底部8/8	微・普	5Y7/1灰白色	回転け	回転け	回転け	
171 46	- 須 杯	V SP086	4/8	微・少	(内)12.5Y7/3浅黄色 (外)12.5Y6/2灰黄色	板目	回転け	回転け	内面火 dasiki. ろ くろ石回り
172 46	- 須 盖	I上 SP086	1/8	細・少	(内)N4/灰白色 (外)12.5Y3/2黒褐色	7.5Y5/3板 オリーブ色	回転け・指頭痕 剥離	回転け・指頭痕 剥離	外面部自然輪
173 46	- 平皿	V SP086	小片	微・普	(内)12.5Y8/3淡黄色 (外)12.5Y6/3にぶい黄色	板け・叩目	布目		凸面側目叩き。凹 面に側副版の痕跡

遺物番号	標本図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	胎色調	外面調整	内部調整	備考
174 49 - 土 皿	VII SP001	1/8	細・少	10YR6/4にぶい黄橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			板口缺状? 内底に強い指痕痕。ろくろ右回り
175 50 23 土 杯	VII SP003-No.1	7/8	中・普	(内)7.5YR6/6 橙色 (外)10YR7/4にぶい黄橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			ろくろ右回り
176 50 23 土 杯	VII SP003-No.2	8/8	細・普	(内)7.5YR7/4にぶい橙色 (外)10YR7/4にぶい黄橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			ろくろ右回り
177 50 23 土 杯	VII SP003-No.3	4/8	中・少	(内)2.5Y6/2 深黄色 (外)10YR6/3にぶい黄橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			ろくろ右回り
178 50 23 土 皿	VII SP003	2/8	中・少	(内)10YR6/2 深黄褐色 (外)10YR5/1 海灰色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
179 51 23 土 杯	I上 SP008	3/8	中・少	(内)7.5YR7/6 橙色 (外)7.5YR7/4にぶい橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
180 51 - 土 杯	I上 SP008	6/8	中・普	(内)7.5YR7/6 橙色 (外)7.5YR7/4にぶい橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
181 51 - 土 杯	I上 SP008	6/8	中・普	(内)10YR7/4にぶい黄橙色 (外)7.5YR7/6 橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
182 51 - 土 杯	I上 SP008	2/8	中・普	(内)7.5YR8/6 深黄色 (外)7.5YR7/6 橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
183 51 - 土 杯	I上 SP039	底部1/8 中・普	細・少	(内)7.5YR6/4にぶい橙色 (外)7.5YR6/3にぶい橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
184 51 - 土 杯	I上 SP046	2/8	細・少	(内)7.5YR7/4にぶい橙色 (外)7.5YR7/4にぶい橙色		行 ^ナ	行 ^ナ			回転台右回り
185 51 - 土 杯	I上 SP071	2/8	中・普	(内)7.5YR7/6 橙色 (外)7.5YR7/6 橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
186 51 - 土 杯	I上 SP071	2/8	中・少	7.5YR8/6 深黄橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			密滅
187 51 - 土 杯	I上 SP140	4/8	細・少	10YR8/3 深黄橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			密滅
188 51 - 土 杯	I上 SP057	底部2/8	細・少	(内)10YR8/3 深黄橙色 (外)10YR7/3にぶい黄橙色		行 ^ナ ・ ^ハ 切り	行 ^ナ			行 ^ナ
189 51 - 土 杯	I上 SP125	底部2/8	細・少	(内)10YR6/2 深黄褐色 (外)10YR6/3にぶい黄橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り
190 51 - 土 杯	I上 SP208	底部2/8	中・普	(内)10YR7/4にぶい黄橙色 (外)7.5YR7/6 橙色		回転 ^ナ ・ ^ハ 切り	回転 ^ナ			回転台右回り

第15表 土器観察表 (8)

遺物	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	外表面調整	内面調整	備考
191 51 - 土 杯	I 上 SP006	2/8	中・普 褐色粒少	(内)10YR7/4 にぶい黄褐色	回転行・糸切り	回転行*		
192 51 - 土 杯	I 上 SP124	底部 3/8	微・少 褐色粒少	(内)7.5YR7/6 褐色	回転行・糸切り	回転行*		
193 51 - 土 杯	I 上 SP039	6/8	微・少 褐色粒多	(内)7.5YR6/4 にぶい褐色	回転行・糸切り	回転行*		
194 51 - 土 小皿	I 上 SP039	底部 8/8	細・普 褐色粒多	(内)7.5YR7/6 褐色	回転行・糸切り	回転行*		
195 51 - 土 小皿	I 上 SP002	2/8	細・少 褐色粒少	7.5YR7/6 褐色	回転行・糸切り	回転行*		
196 51 - 土 小皿	I 上 SP125	3/8	細・少 褐色粒多	7.5YR7/4 にぶい褐色	回転行・糸切り	回転行*		
197 51 - 土 小皿	I 上 SP073	3/8	細・少 褐色粒多	7.5YR8/4 浅黃褐色	磨減・回転行 切り	磨減		△切りは左回転
198 51 - 土 小皿	I 上 SP002	2/8	細・少 褐色粒少	7.5YR7/6 褐色	回転行・糸切り	回転行*		
199 51 - 土 小皿	I 上 SP010	1/8	微・少 褐色粒多	7.5YR5/1 褐灰色	回転行・糸切り	回転行*		
200 51 - 土 小皿	I 上 SP124	底部 3/8	微・少	(内)10YR5/2 灰黃褐色 (外)10YR4/1 褐灰色	回転行・糸切り	回転行*		
201 51 - 土師質 壺	I 上 SP127	1/8	中・普 金雲母少	5YR6/6 褐色	指頭痕・板行*	板行*		
202 51 - 土師質 壺	I 上 SP006	小片	中・少	(内)10YR5/1 褐灰色 (外)10YR6/3 にぶい黃褐色	指頭痕	板行*		
203 51 - 土師質 壺	I 上 SP089	小片	細・普 金雲母少	7.5YR7/4 にぶい褐色	指頭痕	板行*		
204 51 - 東播 ごね鉢	I 上 SP126	底部 2/8	細・普	(内)N6/1 灰褐色	指頭痕	指行*		
205 51 - 東播 ごね鉢	I 上 SP124	小片	中・普	(内)5Y6/1 灰褐色 (外)N5/1 灰褐色	板行・板行*	板行*		口縁に輪からな い
206 51 23 優前 鉢	I 上 SP111	2/8	中・少	(内)7.5YR5/2 灰褐色 (外)7.5YR5/1 褐灰色	板行*	板行*		
207 51 23 亀山 壺	I 上 SP232	小片	中・普	(内)10YR6/2 灰褐色 (外)2.5Y4/1 黃褐色	板行・叩き目	板行*		
208 51 23 亀山 壺	I 上 SP091	1/8	細・普	(内)2.5Y7/2 灰褐色 (外)N6/灰褐色	回転行・叩き目	回転行*		

第 16 表 土器觀察表 (9)

遺物番号	種類・器種	通称名	残存率	胎土	色調	輪色調	外面調整	内部調整	備考
209 51 - 土杯	V SP064	底部2/8 褐色粘多	中・少	10YR7/4にぶい黄褐色	(内)10YR8/4 淡黄褐色	暗減・糸切り	暗減		
210 51 - 土杯	V SP034	底部2/8 細・少	少	(外)10YR8/4 淡黄褐色	(内)10YR5/1 浅灰色	回板カバーカット	回板カバ	ろくろ回板方向不明	
211 51 - 土杯	V SP074	小片	微・少	(内)10YR5/1 浅灰色	(外)10YR6/2 淡黄褐色	暗減	模カバ・磨減		
212 51 - 土杯	V SP074	小片	微・少	10YR8/4 淡黄褐色	10YR5/1 淡黄褐色	回板カバ	回板カバ	ろくろ回板方向不明	
213 51 - 東櫛 こね鉢	V SP076	小片	中・普	(内)10YR5/1 淡黄褐色	(内)10YR5/1 淡黄褐色	模カバ・指頭痕	模カバ	重ね焼きの風跡なし	
214 51 - 土師質 壺	VII SP035	1/8	中・多	(内)10YR6/6 橙色	(外)10YR6/4 にぶい黄褐色	暗減・模カバ・指頭痕	模カバ・指カバ	ろくろ回板方向不明	
216 52 - 土杯	VII SP022	底部1/8	中・少	(内)10YR7/4 にぶい黄褐色	(外)10YR5/2 淡黄褐色	回板カバ・ハカタ	回板カバ	ろくろ右回り	
217 52 - 土杯	VII SP002	7/8	中・普	(内)10YR6/2 淡黄褐色	(外)10YR5/2 淡黄褐色	回板カバ・ハカタ	回板カバ	ろくろ右回り	
218 52 - 土杯	VII SP028	1/8	中・普	(内)10YR7/4 にぶい黄褐色	(外)10YR6/3 にぶい黄褐色	回板カバ	回板カバ	ろくろ右回り	
219 52 - 土杯	VII SP034	底部4/8	中・普	(内)10YR8/4 淡黄褐色	(外)10YR7/4 にぶい黄褐色	回板カバ・ハカタ	回板カバ	ろくろ右回り	
220 52 - 傷前 すり鉢	VII SP062	1/8	中・少	(内)10YR4/2 淡黄褐色	(外)10YR5/3 にぶい赤褐色	回板カバ	回板カバ	切目8本。使用して少し磨耗している	
221 52 - 傷前 壺	VII SP016	小片	中・少	(内)10YR5/2 淡黄褐色	(外)10YR4/2 淡黄褐色	回板カバ	回板カバ	ろくろ右回り。	
222 52 - 傷前 すり鉢	VII SP028	底部2/8	中・少	(内)10YR4/2 淡黄褐色	(外)10YR5/2 淡黄褐色	回板カバ・指頭痕	御し目	ロウモウ	
223 52 - 土壺	VII SP066	6/8	中・多	2.5Y5/2 淡灰黄色	10YR7/3 にぶい黄褐色	暗減	暗減	重さ 15.44g	
225 53 - 土杯	VII SK01	2/8	細・普	10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/6 橙色	回板カバ・回板ハカタ	回板カバ	ろくろ右回り。ハカタ	
226 53 24 土杯	VII SK01	7/8	微・少	10YR7/6 橙色	(内)10YR7/3 淡黄褐色	暗減	暗減	切り後板行	
227 53 - 土杯	VII SK01	1/8	微・普	(外)10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	回板カバ・ハカタ	回板カバ	ハカタ切り後比較的丁寧な行。ろくろ右回り	
228 53 - 土杯	VII SK01	6/8	細・少	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	回板カバ・ハカタ	回板カバ	ハカタ	

第17表 土器観察表 (10)

遺物番号	種類・器種	遺構名	地質	色調	外表面調査	内面調査	備考
229 53 24 土 瓶	VII SK01		7/8 細・普	7.5YR7/6 棕色 (内) 12.5Y8/4 淡黄色 (外) 12.5Y7/3 淡黄色	回転「げ・へ」切り	回転「げ・へ」	ろくろ右回り ろくろ右回り。へ 切り後板「げ」
230 53 - 土 瓶	VII SK01		底部 8/8 細・少	△切り・板目	底減		
231 53 - 土 瓶	VII SK01		1/8 細・少	7.5YR7/6 棕色	回転「げ」	回転「げ」	
232 53 - 土 瓶	VII SK01		1/8 微・少	10YR7/4 にぶい黃橙色	回転「げ」	底減	
233 53 - 土質土金	VII SK01	脚部 7/8 中・普	10YR6/3 にぶい黃橙色	△切「げ」	接合面で剥離		
234 55 - 土 瓶	VII SK03	小片 細・普	7.5YR7/4 にぶい黃橙色	回転「げ」	回転「げ」		
235 56 - 土 瓶	VII SK04	精良 (外) 12.5Y3/1 黑褐色	(内) 10YR4/1 黑褐色 (外) 12.5Y3/1 黑褐色	△切「げ」	△切「げ」	内底強い指痕痕 行	内底強い指痕痕 行
236 56 - 土 瓶	VII SK04	底部 4/8 中・少	10YR7/4 にぶい黃橙色	板「げ」	板「げ」		
237 56 - 土 瓶	VII SK04	3/8 中・普	(内) 10YR4/1 橙灰色 (外) 10YR6/3 にぶい黃橙色	△切「げ」	△切「げ」		
238 56 - 土 瓶	VII SK04	2/8 中・普	2.5Y7/3 淡黄色	△切「げ」	△切「げ」		
239 56 - 土 瓶	VII SK04	1/8 微・少	(内) 10YR7/4 にぶい黃橙色 (外) 12.5Y6/3 にぶい黃色	△切「げ」	△切「げ」		
240 56 - 土 瓶	VII SK04	1/8 中・少	10YR7/4 にぶい黃橙色	△切「げ」	△切「げ」	内底顯著な指げ痕	
241 56 - 土 瓶	VII SK04	2/8 細・少	10YR6/3 にぶい黃橙色	板「げ」	△切「げ」	ろくろ右回り。 外面上に強い指げ痕	
242 56 - 土 瓶	VII SK04	1/8 微・少	(内) 10YR6/2 底黄褐色 (外) 12.5Y6/2 底黃色	△切「げ」	△切「げ」	△切「げ」	
243 56 - 土 瓶	VII SK04	1/8 1/8	(内) 15YR6/4 にぶい黃橙色 (外) 10YR7/4 にぶい黃橙色	△切「げ」	△切「げ」	△切「げ」	
244 56 - 土 瓶	VII SK04	1/8 中・少	(内) 10YR7/4 にぶい黃橙色 (外) 10YR8/4 底黃褐色	板「げ」	△切「げ」	△切「げ」	ろくろ右回り。内 底強い指げ痕
245 56 24 土 小皿	VII SK04	7/8 微・少	(内) 10YR7/4 にぶい黃橙色 (外) 12.5YR6/4 にぶい黃色	△切「げ」	△切「げ」	△切「げ」	内面に強い指げ痕
246 56 24 古編芦 天日	VII SK04	底部 4/8 細・少	2.5Y7/2 底黄色	N2/ 黒色	△切「げ」	△切「げ」	高台部分に糸切痕

遺物 番号	図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
247 56 24 優前 すり鉢	VII SK04		底部	2/8 中・少	(内)7.5YR6/4にぶい褐色 (外)7.5YR6/4にぶい褐色		回転け・回転ハ 剤+・+	鉢し日・磨滅	内面は使用により、 ほとんど磨耗して いる。鉢し目7条	
248 57 24 土 杯	VII SK06		6/8 中・普	(内)2.5Y7/3 淡黄色 (外)10YR8/3 淡黃褐色			回転け・+う切り	回転け	ろくろ右回り	
249 57 - 土師質 土釜	VII SK06		脚部	5/8 中・普	(内)7.5YR6/6 棕色 (外)7.5YR6/4 棕色		指行	指行	接合面で剥離	
250 58 - 茶 鉢	III a 下 SX01		小片	細・少	(内)7.5YR6/4にぶい褐色		磨滅・+う磨き?	+・磨滅		
251 60 - 土 杯	VII SX01		小片	細・少	10YR7/4にぶい黃褐色 (外)7.5YR7/4にぶい黃褐色		横行・+う切り	横行		
252 60 24 土 杯	VII SX01		7/8 中・普	(内)7.5YR6/4にぶい褐色 (外)10YR6/4にぶい黃褐色			回転け・+う切り	回転け	ろくろ右回り	
253 60 - 土 杯	VII SX01		1/8 細・少	(内)2.5Y7/1 黄白色 (外)2.5Y8/2 黄白色			横行・+う切り	横行	ろくろ右回り	
254 60 - 土 杯	VII SX01		2/8 中・普	10YR8/4 淡黃褐色			回転け・+う	回転け		
255 60 - 土 杯	VII SX01		7/8 中・少	(内)2.5Y5/2 前灰黄色 (外)10YR8/4 淡黃褐色			回転け・+う切り	回転け	ろくろ右回り	
256 60 - 土 杯	VII SX01		1/8 中・普	(内)10YR7/4にぶい黃褐色 (外)2.5Y8/3 黄色			回転け・+う切り	回転け	ろくろ右回り	
257 60 - 土 杯	VII SX01		底部	1/8 中・少	10YR7/4にぶい黃褐色		磨滅・+う切り	回転け	ろくろ右回り	
258 60 - 土 杯	VII SX01		1/8 細・少	5Y6/1 黄色			横行・+う切り	横行		
259 60 24 土 三脚付杯	VII SX01		1/8 中・普	2.5Y7/2 淡黄色			回転け・指行・+う	回転け	ろくろ右回り	
260 60 - 土 杯	VII SX01		2/8 微・少	(内)2.5Y7/4 淡黄色 (外)2.5Y8/2 黄白色			横行・+う切り	横行		
261 60 - 土 小皿	VII SX01		2/8 中・少	(内)10YR7/4にぶい黃褐色 (外)2.5Y4/1 黄灰色			回転け・+う切り	回転け	ろくろ右回り	
262 60 - 土 杯	VII SX01		2/8 細・普	10YR7/4にぶい黃褐色			横行・+う切り	横行		
263 60 - 土 小皿	VII SX01		2/8 中・普	(内)10YR6/4にぶい黃褐色 (外)10YR7/4にぶい黃褐色			回転け	回転け	上部外反。厚手で 大きく丁寧な仕上げ	
264 60 - 土 杯	VII SX01		底盤	4/8 構造	(内)5Y4/1 黄色 (外)2.5Y7/2 淡黄色		回転け・+う切り	回転け		
265 60 - 土師質 すり 鉢	VII SX01		小片	細・少	(内)2.5Y7/2 淡黄色 (外)10YR6/4にぶい黃褐色		指頭痕	+・削し日	傾き不确定	

遺物番号	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
266 60 - 備前 すり鉢	W SX01	小片	細・普	2.5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5YS/1灰色 (外)10YR5/2灰黄褐色		楕円・指頭痕	剥離・御し目		傾き不确定
267 60 - 瓦質 焼焰	W SX01	小片	細・少	(内)5YS/1灰色 (外)10YR5/2灰黄褐色		楕円・指頭痕	楕円・板ガ		
268 60 25 瓦質 火鉢	W SX01	小片	微・多	(内)12.5YS/1灰灰色 (外)10Y4/1灰色		楕円・板ガ	板ガ		印花文
269 60 25 土師質 火鉢	W SX01	体部小片	粗・多	10YR8/4 灰・黄褐色		削減	板ガ		傾き不明 外面は丁寧なうるき
270 60 25 瓦質 火鉢	W SX01	小片	微・普	(内)10YR6/4にぶい橙色 (外)12.5Y6/1黄灰褐色		うるき	楕円・板ガ		外面は櫻花形。県外產か。
271 60 - 土師質 土鍋	W SX01	小片	粗・普	(内)10YR7/1にぶい黄褐色 (外)10YR4/1灰灰色	5Y7/2灰白色	楕円・板ガ	板ガ		森田V-3類。眞入が全面に入る
275 61 25 白磁 磁	W SX01	1/8	緻密	2.5Y7/2灰黃色		楕円・うら刷り	楕円・板ガ		内面見込み部に花文印刻
276 61 25 青磁 磁	W SX01	1/8	微・少	5Y7/1灰白色	2.5GY7/1明 オリーブ灰	楕円・うら刷り	楕円・板ガ		内面見込み部に花文印刻
277 61 25 青磁 磁	W SX01	小片	微・少	N6/灰褐色	10Y6/1灰白色				体部外面上位まで うら刷り。船は全体にやや青い
278 61 25 青磁 磁	W SX01	2/8	微・少	5Y7/1灰白色	5GY7/1明 オリーブ灰 色	楕円・うら刷り	横行		
279 61 25 青磁 磁	W SX01	小片	緻密	5Y5/1灰白色	10Y6/1灰白色				高台盤付部分のみ 無地。全体に薄い 輪郭がある
280 61 - 青磁 盆	W SX01	小片	精良 黒 色粒多	2.5Y8/1灰白色	7.5GY7/1 明 緑灰色	うら刷り			内面見込み部に文様有。輪郭不明
281 61 26 青磁 盆	W SX01	1/8	精良 黑 色粒多	5Y7/1灰白色	7.5Y6/2灰 オリーブ色				
282 61 26 青磁 盆	W SX01	3/8	精良 黑 色粒含む	5Y7/1灰白色	10GY7/1 明 緑灰色	うら刷り			
283 61 - 青磁 盆	W SX01	小片	微・少	5Y8/1灰白色	10Y6/2オ リーブ灰				
284 61 26 青磁 盆	W SX01	小片	微・少	N8/灰白色	10Y6/2オ リーブ灰				全面施釉。外底に 蛇ノ目釉剥ぎ。内 底草花文?

第20表 土器観察表 (13)

遺物番号	種類・器種	遺構名	残存部	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
285 61 26	青磁 磁	VII SX01	小片	微・少	5Y8/1 灰白色	10Y6/2 オ リーブ灰褐色			内外面施釉
286 61 26	古漁戸 平輪	VII SX01	2/8	微・少	5Y7/1 灰白色	5Y6/4 オ リーブ黄色	横行・矢刺り		内外面重ね施き痕 跡。内外面の施は 入が認められる
287 61 26	古漁戸 平輪	VII SX01	底部 1/8	微・少	2.5Y7/1 灰白色	5Y6/3 オ リーブ黄色	矢刺り・糸切り		内面施釉。高台底 に糸切り痕。須恵 質に近い
288 61 27	古漁戸 天目	VII SX01	4/8	微・少	5Y6/1 灰色	N2/ 黒色	矢刺り		輪が剥離して泡立 つてしまっている
289 61 27	古漁戸 鉄輪	VII SX01	底部 1/8	精良	7.5Y6/1 灰色	7.5Y3/1 オ リーブ黒色	回転・矢刺り		内外面施釉。径不 規則のため、半径 6.5cm で復元
290 61 27	古漁戸 天目	VII SX01	1/8	微・少	2.5Y7/2 灰黄色	5Y7/3 浅黄 色	横行・矢刺り		やや焼まりが悪い
291 61 27	古漁戸 鉄輪	VII SX01	2/8	微・少	7.5Y6/1 灰色	7.5Y3/1 オ リーブ黒色	矢刺り		二度輪をかけたよ うになっている
292 61 26	古漁戸 鉄皿	VII SX01	小片	微・少	2.5Y6/1 灰灰色	5Y7/3 浅黄 色	横行		輪には買入が認め られる。やや焼ま りが悪い。
293 61 27	古漁戸 直線	VII SX01	2/8	微・少	2.5Y8/4 淡黄色	2.5Y6/4 に ぶい黄色	横行・矢刺り		内面と外面下半部 で施釉。
294 61 27	古漁戸 直線	VII SX01	小片	微・少	5Y6/1 灰色	7.5Y6/3 オ リーブ黄色	横行・矢刺り		陶土は須恵質に近 い。
295 61 27	古漁戸 直線	VII SX01	小片	微・少	2.5Y7/1 灰白色	5Y7/3 浅黄 色	横行・矢刺り		陶土は輪まりが悪 い。
296 61 30	古漁戸? 水注?	VII SX01	細・少		(内) 5Y7/1 灰白色 (外) 12.5Y7/2 灰黄色	横行・矢刺り	横行・指行		体部膨大後より上 部に自然輪が付着

遺物番号	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
297 61 26 古窓戸 简形 香炉	VII SX01		2/8	微・少	5Y7/1 灰白色	7.5Y7/2 灰白色	横行・指頭痕・行 ・糸切り	横行	内底面及び 口縁部内外面及び 体部外面上に施釉。 脚は現存は1個。 おそらく3個か
298 61 28 古窓戸 瓶子	VII SX01		微・普	5Y7/1 灰白色	7.5Y6/2 灰 オリーブ色	7.5Y6/2 灰 オリーブ色	指頭痕・横行	指頭痕・横行	外施釉。内面無 施貫入する
299 61 28 古窓戸 瓶子	VII SX01		微・普	2.5Y7/1 灰白色	7.5Y6/2 灰 オリーブ色	7.5Y6/2 灰 オリーブ色	刺繡	外施釉	
300 61 28 古窓戸 瓶子	VII SX01		微・普	5Y7/1 灰白色	7.5Y7/2 灰 白色	7.5Y7/2 灰 リーブ色	横行	内底施釉。外施 輪。	
301 61 28 古窓戸？ 甕 子小水注	VII SX01		底部2/8 微・少	5Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白 色	10Y7/1 灰白 色	回転行	回転行	全面施釉
302 62 - 備前 蔷	VII SX01	小片	中・少	7.5YR5/4 にぶい褐色	5Y5/3 医 リーブ色	5Y5/3 医 リーブ色	回転行	回転行	
303 62 - 備前 蔷	VII SX01	小片	細・少	10YR6/3 にぶい黃褐色	回転行・うけり	回転行	回転行	回転行	外施釉
304 62 - 備前 蔷	VII SX01	1/8	細・少	((内)10YR5/2 灰黄褐色 (外)5Y5/2 灰 オリーブ色	回転行	回転行	回転行	回転行	外施釉
305 62 28 備前 蔷	VII SX01	1/8	中・普	((内)5Y6/1 灰色 (外)2.5Y7/4 浅黄色	回転行	回転行	回転行	回転行	外施釉かぶり自然 施
306 62 28 備前 蔷	VII SX01	1/8	中・少	((内)7.5YR4/1 棕灰色 (外)6Y5/1 黄灰色	板行・板 行	板行・板 行	板行	板行	外施釉
307 62 - 備前 蔷	VII SX01	1/8	中・普	((内)2.5Y4/1 黄灰色 (外)2.5Y3/1 黑褐色	回転行	回転行	回転行	回転行	外施釉
308 62 28 備前 蔷	VII SX01	小片	細・普	((内)2.5Y4/1 黄灰色 (外)2.5Y4/1 黄灰色	回転行	回転行	回転行	回転行	外施釉
309 62 - 備前 蔷	VII SX01	1/8	細・少	((内)10YR6/2 灰黄褐色 (外)10YR4/3 にぶい黄褐色	板行	板行	板行	板行	外施釉
310 62 - 備前 蔷	VII SX01	4/8	中・少	((内)10YR5/2 灰黄褐色 (外)10YR4/2 灰黄褐色	板行・脚目 ・うけり	板行・脚目 ・うけり	板行	板行	内底板ナビの道具2 ～3種使用。
311 62 29 陶器 不明	VII SX01	細・少		((内)6GY4/1 晴オリーブ灰 色 (外)5Y5/1 黄色	行	行	行	行	肩部に刻印

遺物番号	標本図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
312 62 29	丹波 壺	VII SX01		1/8	中・普	(外)7.5YR3/1 黒褐色 (内)10YR7/1 灰白色	7.5Y4/3 喙 オリーブ色	回転けず	回転けず・指頭痕	外面とび色の自然 輪が重れ、窓壁片 一部付着
313 63 -	古瀬戸 天目	VII SX03		小片	精良	5Y7/2 灰白色	7.5Y6/2 灰 オリーブ色	回転けず	回転けず	全面施釉
314 64 -	弥 壺	I 上 SD02		底部 1/8	中・普	(内)7.5YR5/4 にぶい褐色 (外)10YR4/1 灰灰色	10YR6/3 にぶい黄褐色 (外)10YR7/3 にぶい黄褐色	△	△	
315 65 -	土 杯	I 上 SD03		6/8	細・普	(内)10YR6/3 にぶい黄褐色 (外)10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色 (内)10YR5/4 にぶい黄褐色 (外)10YR5/3 にぶい黄褐色	△	△	
316 65 -	東播 こね鉢	I 上 SD03		1/8	細・少	(内)6/6 灰色(外)6/6 灰色	N3/3 喙灰色	△	△	口縁に重ね焼痕
319 67 -	青磁 茶碗	VI asSD01		小片	微・少	2.5Y7/3 淡黄色	10YR6/2 オ リーブ灰褐色	△	△	全体に貫入
320 67 -	土 杯	VI asSD01		1/8	細・普	10YR7/4 にぶい黄褐色 (内)10YR5/4 にぶい黄褐色 (外)10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色 (内)10YR5/4 にぶい黄褐色 (外)10YR5/3 にぶい黄褐色	△	△	底部△切りか
321 67 -	土師質 梶	VI asSD01		小片	中・普	褐色粒少	磨滅・刷毛目	△	△	
322 67 -	土 土鍋	VI asSD01		小片	中・普	5Y5/6 明赤褐色	横け・板け・板行	△	△	外面焼。傾き不確 実
323 67 -	土 土鍋	VI asSD01		小片	中・普	(内)10YR6/3 にぶい黄褐色 (外)10YR5/4 にぶい黄褐色	磨滅・△?	△	△	
324 67 30	土師質 土釜	VI asSD01		3/8	中・普	(内)6YR6/6 橙色	△・板け・指頭痕 △・板け・板行	△	△	外面焼より下に媒 付着
325 67 -	土 土釜	VI asSD01		小片	細・少	10YR6/4 にぶい黄褐色	△・指頭痕 △・板け	△	△	
326 67 30	備前 すり鉢	VI asSD01		1/8	精良	(内)6Y6/1 灰色 (外)12.5Y5/3 黄褐色	回転けず・指頭痕 △・△削り	△	△	
327 67 -	備前 すり鉢	VI asSD01		1/8	中・普	5YR5/3 にぶい赤褐色	△	△	△	△
328 67 -	備前 すり鉢	VI asSD01		底部 1/8	中・普	(内)6YR4/2 灰褐色 (外)7.5YR5/2 灰褐色	指頭痕・△	△	△	見込みに鉛し目な し
330 68 30	備前 すり鉢	VI asSD03		小片	粗・少	(内)2.5YR4/3 にぶい赤褐色 (外)2.5YR5/3 にぶい赤褐色	△	△	△	
331 70 -	土 小皿	VI bsSD01		小片	中・少	7.5YR8/4 淡黄褐色	磨滅・△切り	△	△	
332 71 -	勞 壺	VII asSD01		1/8	中・多	2.5YR8/1 灰白色 (内)10YR7/6 明黄褐色 (外)10YR8/6 明黄褐色	磨滅	△	△	穿孔現存 1ヶ所
333 72 -	勞 壺	VII asSD02		2/8	粗・多	(内)10YR7/6 明黄褐色 (外)10YR8/6 明黄褐色	磨滅	△	△	

遺物番号	博物館・図版	種類・器種	遺構名	残存率	施土	色調	外面調整	内面調整	備考
334 73 - 頸 壺	I 区包含層			3/8	細・少	(内)10Y5/1 灰色 (外)10Y4/1 灰色	回転ナゲ	回転ナゲ	
335 73 - 土 壺	I 区包含層			1/8	細・普 金環少	(内)10Y6/4 にぶい黃褐色 (外)10Y7/4 にぶい黃褐色	げ・刷毛目・刷毛 刷毛目・指彌痕	刷毛目・指彌痕	口縁外側も刷毛目
336 73 - 土 壺	I 区包含層			2/8	中・普	(内)10Y6/3 にぶい黃褐色 (外)10Y6/4 にぶい黃褐色	げ・刷毛目 磨滅・回転ナゲ・ナ 切り・ナ	刷毛目・指彌痕	口縁外側も刷毛目
337 73 - 土 杯	I 区包含層			7/8	細・少	(内)25Y5/2 皮黄褐色 (外)25Y5/1 黄灰色	回転ナゲ・板ナゲ	回転ナゲ・板ナゲ	
338 73 - 土 杯	I 区包含層			2/8	細・少 褐色少	(内)10Y6/2 皮黄褐色 (外)10Y5/2 皮黄褐色	回転ナゲ・系切り	回転ナゲ	
339 73 - 土 小皿	I 区包含層			4/8	中・少	7.5YR8/6 淡黄褐色	剥離・回転行	剥離・回転行	
340 73 - 土 小皿	I 区包含層			底部8/8	褐色少	(内)25Y6/1 黄褐色 (外)25Y5/2 皮黄褐色	回転ナゲ・系切り	回転ナゲ	
341 73 30 青磁 瓶	I 区包含層			1/8	緻密	5Y7/1 灰白色	7.5Y6/1 灰 色	1-5.瓶. 片切端の 強井文	
342 73 30 白磁 盆	I 区包含層			2/8	緻密	10Y8/1 灰白色	10Y7/1 灰白 色	口壳げ白磁 IX類	
343 73 30 青磁 瓶	I 区包含層		底部2/8	歛密	2.5Y6/3 にぶい黄色	7.5Y6/2 破 オリーブ色	回転ナゲ	回転ナゲ	
344 73 - 備前 鉢	I 区包含層		小片	微・少	(内)10Y5/2 皮黄褐色 (外)10Y5/1 褐灰色	回転ナゲ・指彌痕	回転ナゲ	回転ナゲ	
345 73 - 土師質 りすり鉢	I 区包含層		小片	中・多	(内)25Y7/1 灰白色 (外)25Y5/1 灰色	磨滅	御し目	1-4か1-5瓶. 高 台部にも瓶. 瓶底 に砂丘積み垣か。	
346 73 - 土師 りすり鉢	I 区包含層		小片	微・普	(内)25Y6/1 黄褐色 (外)N6/1 灰色	7.5Y4/1 灰 色	回転ナゲ・指彌痕	回転ナゲ	口縁のみ自然輪
348 73 - 土質 士金	I 区包含層			1/8	中・多	10Y7/6 明黄褐色	回転ナゲ・指彌痕	回転ナゲ・ナ	外面側より下に煤。 表面不確定
354 74 - 弦 壺	III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)			1/8	中・普	(内)10Y7/3 にぶい黃褐色 (外)10Y6/2 皮黄褐色	刻み目・ナ 指彌痕	磨ナゲ・ナ 指ナゲ・ナ	突端には爪先で左 から右へと剥む
355 74 - 弦 壺	III a 区包含層(第2層 黑色砂質土)			小片	細・普 金環少	(内)10Y5/2 皮黄褐色 (外)10Y4/1 褐灰色	指ナゲ・ナ 指ナゲ・ナ	ナ・指ナゲ・ナ削り	
356 74 - 弦 壺	III a 区包含層(第2層 黑色砂質土)			小片	細・普	5YR6/6 金褐色	磨滅	磨滅	

第24表 土器調査表 (17)

遺物番号	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	輪色調	外面調整	内面調整	備考
357 74 - 弁 要		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	1/8	中・多	10YR8/3 深黄褐色 (内)7.5YR7/6 橙色 (外)7.5YR6/4 にぶい橙色		横行・指頭痕・断 滅	横行・指頭痕・断 滅	
358 74 - 弁 要		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	小片	中・少			横行	横行	
359 74 - 弁 要		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	1/8	細・普	10YR8/3 深黄褐色		横行・磨滅・刷毛 目	横行・磨滅・刷毛 目	
360 74 - 弁 要		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	小片	中・普	7.5YR7/4 にぶい橙色		横行	横行・げ	凹線3条
361 74 - 弁 要		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	1/8	中・普	5YR5/4 にぶい赤褐色 金雲母多		凹4目・げ・刷毛 目	磨滅・指行・刷毛 目	
362 74 - 弁 要		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	底部 2/8	中・普	10YR6/4 にぶい黄褐色 褐色粒少		磨滅・刷毛目	磨滅	
363 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	小片	中・普	7.5YR7/6 橙色		磨滅・横行・げ 色	磨滅	放射状・げ磨き
364 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	1/8	中・普	10YR7/4 にぶい黄褐色		磨滅・指行・刷 毛目	磨滅	
365 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	1/8	細・普	(内)10YR4/2 深黄褐色 (外)10YR4/1 極灰色		磨滅・板行・げ 磨き	磨滅・板行・げ 磨き	
366 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	1/8	中・普	(内)7.5YR8/4 にぶい橙色 (外)10YR7/4 にぶい黃褐色		横行・磨滅	横行・板行?	凹線2条
367 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	小片	中・普	(内)10YR8/4 浅黄褐色 (外)10YR7/4 にぶい黃褐色		磨滅・板行・げ 磨き?	内外面・げ磨きの可 能性	
368 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	1/8	中・普	2.5Y7/3 浅黄色		指頭痕・げ磨き・ 磨滅	げ・指行・げ磨 き?	
369 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	小片	細・少	(内)7.5YR7/6 橙色 (外)7.5YR6/4 にぶい橙色		横行・磨滅・げ 磨き?	内外も・げ磨きか れ?	
370 74 - 弁 高杯		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	底部 2/8	中・普	7.5YR5/4 にぶい橙色		板行・げ・横行	板行・げ・横行	
371 74 - 弁 盆		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	底部 5/8	中・普	(内)5YR5/6 明赤褐色 (外)7.5YR5/3 にぶい褐色 褐色粒多		板行・げ	板行・げ	
372 74 - 弁 盆		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	底盤 5/8	粗・多	(内)7.5YR7/6 橙色 金雲母少 (外)7.5YR6/6 橙色		指頭痕・げ	磨滅・刷毛目	
373 74 - 箍 盆蓋		III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	小片	微・少	N5/灰褐色		回転・げ	回転・げ	

遺物	種類	器種	遺構名	残存率	胎土	色調	輪色調	外面調整	内面調整	備考
374	74	III 瓶	III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	8/8	中・普	(内)2.5Y6/2 黄褐色 (外)2.5Y6/1 黄褐色		回板け・う側り	回板け・	
375	74	III 瓶	III a 区包含層(第2層 黒色砂質土)	3/8	中・少	(内)5Y6/1 黄褐色 (外)5Y5/1 黄褐色		回板け・回板べ 削り	回板け・	
396	76	II 瓶	II c 区包含層	2/8	中・少	10YR8/4 黄褐色		板け・刷毛目	回板け・板け	内面板けの圧痕
397	76	II 瓶	II c 区包含層	底部4/8	中・普	(内)2.5Y4/2 黄褐色 (外)2.5Y3/2 黑褐色		磨滅・刷毛目	板け・指け	
398	76	II 土杯	II c 区包含層	底部3/8	細・少	(内)10YR8/4 油褐色 (外)2.5Y8/3 黄褐色		行・糸切り	磨滅	底部糸切り
401	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	1/8	細・少	(内)10YR5/2 油褐色 (外)10YR6/4 にぶい黄褐色		磨滅・刷毛目	指け・板け	
402	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	小片	中・普	(内)2.5Y7/2 黄褐色	み目		行	円形浮文(3+×2個 1単位)の単位不明
403	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	1/8	中・少	(内)10YR5/1 黄褐色 (外)2.5Y5/1 黄褐色		横け	横け	
404	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	小片	中・普	(内)10YR6/1 油褐色 (外)10YR6/3 にぶい黄褐色		横け	指頭痕	傾き不定
405	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	1/8	中・普	2.5Y7/2 黄褐色		刻み目・行	行	6分面で刻み と無文を繰り返す
406	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	小片	細・普	(内)10YR5/4 にぶい黄褐色 (外)2.5Y6/2 黄褐色		刻み目・行・刷毛 目	行・v磨き	
407	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	小片	細・普	(内)10YR6/4 にぶい黄褐色 (外)10YR6/2 油褐色		板け・横け?	横け	深い凹線4条
408	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	底部2/8	中・普	(内)10YR5/1 油褐色 (外)10YR6/2 油褐色		v磨き・磨滅	指	
409	77	II b 区包含層	小片	細・普	(内)7.5YR6/4 にぶい褐色 (外)7.5YR5/4 にぶい褐色		刻み目・指頭痕	横け	前期?	
410	77	II 瓶	II C 区包含層	1/8	中・少	(内)10YR7/2 にぶい黄褐色 (外)10YR7/3 にぶい黄褐色			行	
411	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	1/8	細・中	(内)10YR5/3 にぶい黄褐色 金雲母多		横け・磨滅	横け・磨滅	
412	77	II 高杯	II C 区弥生包含層	底部5/8	細・普	7.5YR5/6 黄褐色		磨滅・v磨き?	v磨滅	
413	77	II 瓶	II C 区弥生包含層	底部3/8	中・多	(内)10YR5/1 油褐色 (外)7.5YR5/4 にぶい褐色		磨滅・v磨き	磨滅・指け	

測量号	標本圖版	種類・器種	遺跡名	殘存率	胎土	色調	輪色調	外面調整		内面調整		備考
								磨擦・指頭板	指頭板	指頭板	指頭板	
414 77 - 弔 鉢	II	c 区你生包含層	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	底部 4/8 粗・普	2.5Y4/1 黄褐色 (内 7.5YR5/6 明褐褐色 (外) 10YR6/6 明褐褐色	2.5Y4/1 黄褐色 (内 7.5YR5/6 明褐褐色 (外) 10YR6/6 明褐褐色	磨擦・指頭板	指頭板	指頭板	指頭板	指頭板	
415 77 - 弔 高杯脚	II	c 区你生包含層	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	底部 8/8 粗・普	10YR7/4E 黄褐色 (内 7.5YR7/2 黄褐色 (外) 12.5YR7/3 黄褐色	10YR7/4E 黄褐色 (内 7.5YR7/2 黄褐色 (外) 12.5YR7/3 黄褐色	磨擦・指頭板	指頭板	指頭板	指頭板	指頭板	
416 77 - 土 小皿	III	c 区包含層	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	底部 8/8 粗・普	10YR7/4E 黄褐色 (内 7.5YR7/2 黄褐色 (外) 12.5YR7/3 黄褐色	10YR7/4E 黄褐色 (内 7.5YR7/2 黄褐色 (外) 12.5YR7/3 黄褐色	磨擦・指頭板	指頭板	指頭板	指頭板	指頭板	
420 78 - 弔 盆	V	区包含層 (灰褐色砂質土)	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	中・普	1/8 中・普	1/8 中・普	横行・行	横行・行	横行・行	横行・行	横行・行	
421 78 - 弔 罐	V	区包含層	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	小片	1/8 中・普	1/8 中・普	横行・行	横行・行	横行・行	横行・行	横行・行	
422 78 - 弔 壺	V	区包含層 (灰褐色砂質土)	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	底部 5/8 粗・少	1/8 中・普	1/8 中・普	横行・行	横行・行	横行・行	横行・行	横行・行	
423 78 - 弔 高杯	V	区包含層 (灰褐色砂質土)	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	底部 1/8 粗・少	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	刷毛目・矢狀き・ 横行・行	刷毛目・矢狀き・ 横行・行	刷毛目・矢狀き・ 横行・行	刷毛目・矢狀き・ 横行・行	刷毛目・矢狀き・ 横行・行	
424 78 - 弔 小型盆	V	区包含層 (灰褐色砂質土)	V 区包含層 (灰褐色砂質土)	底部 8/8 微・少	1/8 中・普	1/8 中・普	磨擦・矢狀き・ 横行・行	磨擦・矢狀き・ 横行・行	磨擦・矢狀き・ 横行・行	磨擦・矢狀き・ 横行・行	磨擦・矢狀き・ 横行・行	
427 78 31 須 杯蓋	V	区包含層 (黑色弱粘質土)	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	粗・少	8/8 粗・少	8/8 粗・少	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	
428 78 31 須 杯	V	区包含層 (黑色弱粘質土)	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 8/8 黑色粘多	1/8 中・普	1/8 中・普	回転行・矢狀き	回転行・矢狀き	回転行・矢狀き	回転行・矢狀き	回転行・矢狀き	
429 78 - 杯 杯	V	区包含層	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 8/8 黃灰色	1/8 中・普	1/8 中・普	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	回転行・回転矢 切り	
430 78 - 土 壺	V	区包含層 (黑色弱粘質土)	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 8/8 黄褐色	1/8 中・普	10YR8/4 黄褐色	磨擦	磨擦	磨擦	磨擦	磨擦	
431 78 - 土 罐	V	区包含層	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 8/8 黄褐色	1/8 中・普	1/8 中・普	横行・磨滅・板行	横行・磨滅・板行	横行・磨滅・板行	横行・磨滅・板行	横行・磨滅・板行	
432 78 - 土 盆	V	区包含層 (黑色弱粘質土)	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 8/8 黄褐色	1/8 中・普	1/8 中・普	磨擦・刷毛目・磨 痕	磨擦・刷毛目・磨 痕	磨擦・刷毛目・磨 痕	磨擦・刷毛目・磨 痕	磨擦・刷毛目・磨 痕	
433 78 31 土 罐	V	区包含層 (黑色弱粘質土)	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 7/8 粗・少	7/8 中・普	7.5YR6/4 黄褐色	刷毛目・橫行	刷毛目・橫行	刷毛目・橫行	刷毛目・橫行	刷毛目・橫行	
434 78 - 土 罐	V	区包含層	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 1/8 粗・少	1/8 中・普	7.5YR6/4 黄褐色	横行・刷毛目	横行・刷毛目	横行・刷毛目	横行・刷毛目	横行・刷毛目	
435 78 31 土 罐	V	区包含層 (黑色弱粘質土)	V 区包含層 (黑色弱粘質土)	底部 8/8 黄褐色	1/8 中・普	1/8 中・普	刷毛目・磨滅	刷毛目・磨滅	刷毛目・磨滅	刷毛目・磨滅	刷毛目・磨滅	
436 78 31 弔 罐	Vlb	自然流路	Vlb 区自然流路	底部 8/8 中・普	8/8 中・普	10YR6/4 黄褐色 (外) 10YR7/6 棕色	叩子目・刷毛目	叩子目・刷毛目	叩子目・刷毛目	叩子目・刷毛目	叩子目・刷毛目	

第 27 表 土器觀察表 (20)

遺物番号	博物館	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
437 78 32 土 鉢	VII区自然流路	VII区自然流路	8/8	中・少	(内)10YR6/6 明黄褐色 (外)10YR7/4 にぶい黃橙色	横け・指頭直・板 痕・行	横け・刷毛目・指頭 痕・行	内面刷毛目で絞形 状文様を彫り、その後に下部の 指頭行	内面刷毛目で絞形 状文様を彫り、 その後に下部の 指頭行	
438 78 32 鋼 鉢	VII区自然流路	VII区自然流路	底部8/8 中・少	2.5YR5/8 明赤褐色	指が・指頭直	指が・指頭直	指が・指頭直	内面刷毛目で意識	内面刷毛目で意識	
439 79 - 狐 杯	V区包含層	V区包含層	1/8	中・普	(内)15Y7/1 亂白色 (外)15Y4/1 亂色	回板が・ら切り	回板が・	口縁重ね焼痕	口縁重ね焼痕	
440 79 - 土 杯	V区包含層	V区包含層	底部6/8 中・普	7.5YR8/4 浅黃褐色	回板が・ら切り	回板が・	回板が・	ろくろ右回り	ろくろ右回り	
441 79 - 土 杯	V区包含層	V区包含層	底部1/8 微・少	10YR7/4 にぶい黃橙色	滑減・行	滑減・行	滑減・行	の可能性あり。 沈線でない。	の可能性あり。 沈線でない。	
442 79 - 土 蓋	V区包含層	V区包含層	2/8	細・多	10YR3/1 黒褐色	行	刷毛目	刷毛目	刷毛目	
443 79 - 土飾質 土鍋	V区包含層	V区包含層	小片	中・少	(内)17.5YR6/4 にぶい褐色 (外)17.5YR3/3 にぶい褐色	行・板が・指頭痕 行・板が・指頭痕 行・板が・指頭痕	行・板が・指頭痕 行・板が・指頭痕	外面口縁焼	外面口縁焼	
444 79 - 備前 すり鉢	V区包含層	V区包含層	小片	細・少	(内)17.5YR4/1 褐灰色	回板が・	回板が・	IV期後半	IV期後半	
445 79 - 備前 すり鉢	V区包含層	V区包含層	小片	中・普	(内)15Y6/1 亂色 (外)15Y4/1 亂色	回板が・	回板が・	回板が・ 切し目	回板が・ 切し目	
446 79 - 平瓦	V区包含層	V区包含層	小片	細・少	(内)15Y5/1 亂色 (外)15Y6/1 亂色	ら切り・糸切り・板 行	布目	幅1.7cmの幅の則 幅が分かれる。端 部は糸切り。須毛 質。	幅1.7cmの幅の則 幅が分かれる。端 部は糸切り。須毛 質。	
447 79 - 弐 蓋	VII区包含層	VII区包含層	小片	中・普	(内)15YR6/6 褐色 (外)15YR5/4 にぶい褐色	横け・指頭痕	横け・指頭痕	回板が・	回板が・	
448 79 - 狐 蓋	VII区包含層	VII区包含層	1/8	細・普	N3.1暗灰色	回板が・	回板が・	回板が・	回板が・	
449 79 - 土 杯	VII区包含層	VII区包含層	2/8	細・少	7.5YR6/6 橙色	回板が・行	回板が・行	ろくろ右回り	ろくろ右回り	
450 79 - 土 杯	VII区包含層	VII区包含層	1/8	中・少	(内)12.5YB7/3 淡黄色 (外)12.5Y6/2 亂黄色	切り	回板が・回板が	内底強い指頭痕。	内底強い指頭痕。	
451 79 - 土 小皿	VII区包含層	VII区包含層	6/8	中・少	10YR6/3 にぶい黃褐色	切り	回板が・回板が	ろくろ右回り	ろくろ右回り	
452 79 - 土 小皿	VII区包含層	VII区包含層	7/8	細・普	(内)7.5YR1/6 棕色 (外)10YR8/3 淡黃褐色	回板が・ら切り	回板が・	ろくろ右回り	ろくろ右回り	
453 79 - 備前 要	VII区包含層	VII区包含層	小片	精良	7.5YR5/2 亂褐色	2.5Y7/3 淡 黄色	横け	焼き不確定	焼き不確定	

第28表 土器調査表 (2)

遺物番号	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外表面調整	内面調整	備考
454 79 33 土鉢	VII区包含層		8/8	中・普	2.5Y7/2 黄灰色		行		重さ 16.3g
455 79 33 土鉢	VII区包含層		8/8	細・少	2.5Y5/1 黄灰色		指行		重さ 9.3g
456 79 33 土鉢	VII区包含層		6/8	微・普	2.5Y7/2 黄灰色		行		重さ 11.6g
464 80 高杯	IV区包含層		底部 1/8 細・多	7.5YR7/6 棕色			磨減・板行?		透かし(15~16ヶ所)を入れる
465 80 土・高台付杯	IV区包含層		底部 8/8 中・少	7.5YR7/6 棕色			回板行		
466 80 土・高台付杯	IV区包含層		細・少	10YR7/4 にぶい黄褐色			回板行		
467 80 土・杯	IV区包含層		6/8	細・少	7.5YR5/4 にぶい褐色		回板行・系切り	回板行	
468 80 土・皿	IV区包含層		3/8	微・少	10YR5/4 にぶい黄褐色		回板行・系切り	回板行	底部回板系切り
469 80 土・小皿	IV・VII区の斜面部		7/8	微・普	10YR6/4 にぶい黄褐色		回板行・行切り	回板行	ろくろ右回り
470 80 唐津 皿	IV・VII区の斜面部	小片	精良	10YR5/2 黄褐色	黄色	5Y6/3オリ一	回板行		板熱部あり、ハケ又し巻きガケかハケ又リ
471 80 33 古瀬戸 小皿	IV区包含層		2/8	軟質	2.5Y8/2 黄白色	5Y5/3板質	横行・回板系切り	横行	内面施釉
472 80 備前 すり鉢	IV・VII区の斜面部	小片	細・少	10YR5/2 黄褐色		リープ色	横行・回板系切り	横行	外面口縁下に重ね焼の痕が薄く残る
473 80 備前 親	IV・VII区の斜面部	小片	1/8	細・普			横行	横行	
474 80 備前 親	IV・VII区の斜面部	小片	細・少	10YR4/1 極灰色	黄色	2.5Y7/4 極	回板行・板行	回板行・板行	外面自然釉
475 80 備前 盖	IV・VII区の斜面部	2/8	粗・少	2.5Y4/1 黄灰色	5Y6/4 にぶい黄色		横行・指行	横行・板行	
476 80 弐 親	VIIa区包含層	1/8	中・普	(内)10YR5/3 にぶい黄褐色 (外)10YR4/1 極灰色	横行・ふら磨き		横行・指行・行	横行	
477 80 弐 親	VIIa区包含層	1/8	中・普	(内)10YR6/4 にぶい褐色 (外)10YR5/4 にぶい褐色	横行・ふら磨き		横行・指行・行	横行	
478 80 弐 親	VIIa区包含層	小片	粗・多	(内)10YR7/8 棕色 (外)10YR7/6 明黄褐色	磨減				
479 80 弐 親	VIIa区包含層	小片	中・多	(内)10YR6/4 にぶい褐色 (外)10YR5/4 にぶい褐色	横行・指頭削・板行		横行・指頭削・行		
480 80 弐 親	VIIa区包含層	底部 2/8 中・多	(内)10YR5/3 にぶい黄褐色 (外)10YR5/4 にぶい褐色	指頭削・行			板行		
481 80 弐 親	VIIa区包含層	1/8 中・多	(内)10YR5/3 にぶい褐色 (外)10YR6/4 にぶい褐色	横行・指頭削・行					

遺物番号	博図版	種類・器種	遺構名	残存率	胎土	色調	釉色調	外面調整	内面調整	備考
482 80	- 弥	纺锤形	VII a 区包含層	微・少	2.5Y5/2 咬灰黄色 (内)5YR6/6 橙色 (外)10YR6/4 ぶい黄橙色		磨滅			穿孔途中 内面指頭痕顯著。 外面ミガキ?
483 80	- 弥	盃	VII a 区包含層	底部 3/8 中・少			板打・打	指打痕		
484 80	- 須	杯	VII a 区包含層	2/8 中・少	5Y6/1 灰色		削り	回板打・打	回板打・打	

第30表 土器觀察表 (23)

遺物 番号	博 物 館 版 図	機種・器種	遺構名	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	種類・材質	備 考
18 21 20	扁平片刃石斧	VII SP028		8.7	5.2	1.6	113.1	石材不明(シルトル岩?)	精緻の可能性のある傷が左面に多数入る
19 21 20	敲き石	III a 下 SP294		10.6	3.5	1.7	93.0	砂岩	
20 21 20	敲き石	III a 下 SP069		16.0	5.0	4.6	594.4	砂岩	下端と両側面上部に産打痕
45 27 -	敲き石	III a 下 SX02 第2層(黒色砂質土)	13.4	8.8	6.0	1024.2	砂岩	頂部は削らかで滑沢があり、磨いた可能性がある	
46 27 -	石鏟	III a 下 SX02 第2層(黒色砂質土)	2.4	1.2	0.4	2.2	サヌカイト		
49 30 -	石鏟	III a 下 SD03	10.9	10.7	5.2	8517.0	花崗岩か	片面に明きにより粗をかけ、凹みを作り出す	
51 32 -	石鏟	VII a 下 SD04	4.2	1.7	0.6	4.5	サヌカイト		
95 35 21	石鏟	III a 下 SD02	4.8	2.0	0.7	5.3	サヌカイト		
96 35 21	石鏟	III a 下 SD02	2.6	1.4	0.6	1.9	サヌカイト	基部がつぶれ崩壊している	
97 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.0	1.7	0.5	2.2	サヌカイト		
98 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.0	2.3	0.3	1.3	サヌカイト		
99 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.3	1.9	0.5	2.9	サヌカイト		
100 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.3	1.5	0.5	2.1	サヌカイト		
101 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.7	1.7	0.4	2.4	サヌカイト	表面少し風化	
102 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.1	1.6	0.6	2.4	サヌカイト		
103 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.0	2.1	0.4	1.9	サヌカイト		
104 35 21	石鏟	III a 下 SD02	2.9	1.7	0.5	2.2	サヌカイト		
105 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.2	1.6	0.3	1.0	サヌカイト		
106 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.0	2.0	0.4	2.4	サヌカイト		
107 35 21	石鏟	III a 下 SD02	2.2	1.7	0.4	1.3	サヌカイト		
108 35 21	石鏟	III a 下 SD02	2.5	1.8	0.3	1.2	サヌカイト		
109 35 21	石鏟	III a 下 SD02	2.8	1.4	0.3	1.0	サヌカイト		
110 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.1	1.1	0.5	2.3	サヌカイト		
111 35 21	石鏟	III a 下 SD02	3.7	2.5	0.4	3.7	サヌカイト		
112 35 21	石切丁	III a 下 SD02	5.0	5.9	0.9	276.6	サヌカイト		
113 35 21	柱状片刃石斧	III a 下 SD02	8.6	5.6	2.8	192.2	綠泥片岩	使用による磨滅	
114 35 21	柱状片刃石斧	III a 下 SD02	7.5	3.8	2.6	145.5	綠泥片岩		
115 35 -	柱状片刃石斧	III a F SD02	6.7	4.4	6.3	63.4	綠泥片岩	上面の光っている部分は擦痕か	
116 35 -	柱状片刃石斧	III a F SD02	6.4	2.5	0.7	18.1	綠泥片岩		
117 35 -	刀子	III a F SD02	2.1	1.0	0.2	4.0	鉄		
129 36 -	石鏟	I F SR01	4.2	1.8	0.6	4.0	サヌカイト		
130 36 -	石鏟	I F SR01	4.5	2.0	0.5	6.4	サヌカイト	両面に輪面が残る	
131 36 -	石鏟	I F SR01	2.9	1.7	0.4	2.0	サヌカイト		
132 36 -	石鏟	I F SR01	2.7	1.7	0.5	2.8	サヌカイト		

第31表 石器・金属器類調査表 (1)

遺物 番号	図 版	種類・器種	遺構名	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	種類・材質		備考	
							柱状片列石斧	柱状片列石斧の破片に刃をつけて再利用		
133 36	-	石機	I 下 SR01	2.9	0.5	2.3	サヌカイト	サヌカイト		
134 36	-	石機	I 下 SR01	5.1	1.3	4.7	サヌカイト	サヌカイト		
135 36	-	石機	I 下 SR01	2.5	2.0	0.4	サヌカイト	サヌカイト		
136 36	-	石機	I 下 SR01	2.1	1.3	0.4	サヌカイト	サヌカイト	未製品か	
137 36	-	石機	I 下 SR01	4.6	1.9	0.5	サヌカイト	サヌカイト	未製品	
138 36	-	石機	I 下 SR01	2.3	2.1	0.7	サヌカイト	サヌカイト	片面に擦面が残る	
139 36	-	石包丁	I 下 SR01	3.2	3.8	0.9	サヌカイト	サヌカイト		
140 36	-	石包丁	I 下 SR01	5.2	4.4	0.7	サヌカイト	サヌカイト		
141 36	-	石包丁	I 下 SR01	2.8	3.0	0.4	サヌカイト	サヌカイト		
142 36	21	扁平片列石斧	I 下 SR01	7.0	2.9	0.4	鈍端片岩	鈍端片岩		
165 41	-	刀子	VII ash01	3.8	0.9	0.8	鉄	鉄		
166 42	23	用途不明	VII ash01	25.8	23.6	5.5	3940.0	砂岩?		
215 51	24	届り手	I SdP258	4.6	5.9	5.5	鉄	鉄		
224 52	-	古錢	VII SdP18	2.5	2.5	0.1	銅	銅	圓元通金 墨付箋	
272 60	24	石硬	VII SX01	2.4	4.1	0.9	不明			
273 60	24	石臼	VII SX01	15.7	3.5	3.8	280.3	花崗岩?		
274 60	-	小刀	VII SX01	2.6	1.6	0.5	鉄	鉄	精巧。木質留存	
317 67	-	石機	VII asD01	3.3	1.7	0.4	3.0	サヌカイト		
318 67	-	石機	VII asD01	4.5	1.6	0.6	3.6	サヌカイト		
329 67	-	針	VII asD01	3.6	0.3	0.3	鉄	鉄		
347 73	30	晶石	I 区包含層				滑石	石鏡片にノミ等で整形し、紐かけのくぎを入れる		
349 73	-	用途不明	鍔器	I 区包含層	8.2	0.6	0.2	鉄	鉄	断面リ字形。何かの線金具か。
350 73	-	鉤釘	I 区包含層	6.8	1.1	1.0	鉄	鉄		
351 73	30	鉄鏃	I 区包含層	8.3	2.2	0.9	鉄	鉄		
352 73	-	石包丁	I 区包含層	4.8	4.5	0.9	サヌカイト	サヌカイト		
353 73	-	石包丁	I 区包含層	4.2	4.1	1.0	15.9	サヌカイト		
376 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	5.3	2.1	0.4	3.2	サヌカイト		
377 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	3.9	1.6	0.5	2.7	サヌカイト		
378 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	3.4	2.0	0.3	2.4	サヌカイト		
379 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.9	1.7	0.5	1.8	サヌカイト		
380 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.7	1.8	0.3	1.3	サヌカイト		
381 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.9	2.0	0.5	1.9	サヌカイト		
382 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	3.1	1.7	0.3	2.0	サヌカイト		
383 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	1.9	1.6	0.4	1.1	サヌカイト		
384 75	-	石機	III a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.3	2.1	0.3	1.3	サヌカイト		

第32表 石器・金属器観察表 (2)

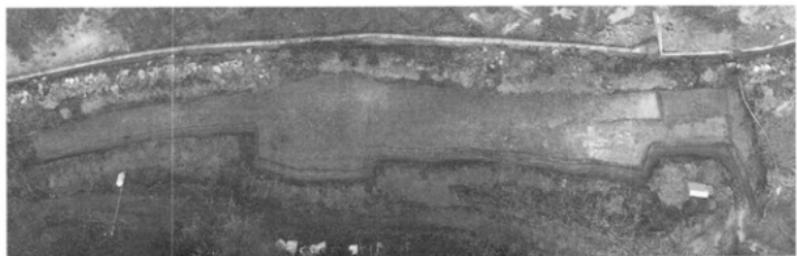
通番号	博物館	図版	種類・器種	遺構名			現存長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	種類・材質	備考
				Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.2	2.3					
385	75	-	石繩	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.5	1.5	0.4	1.6	サヌカイト		
386	75	-	石繩?	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	4.3	1.2	0.5	2.2	サヌカイト		
387	75	-	石繩	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.1	1.7	0.3	3.0	サヌカイト		
388	75	-	石繩	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.4	1.6	0.3	1.6	サヌカイト		
389	75	-	石繩	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	2.8	2.6	0.4	2.2	サヌカイト		
390	75	-	石繩	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	5.9	1.4	2.3	3.8	サヌカイト		
391	75	-	柱状片?为石斧	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	8.9	3.0	2.8	178.9	緑泥片岩		
392	75	-	柱状片?为石斧	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	3.5	3.6	1.1	13.4	サヌカイト		
393	75	-	石包丁	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	4.1	3.2	1.1	24.1	サヌカイト		
394	75	-	石包丁	Ⅲ a 区包含層(第2層黒色砂質土)	5.6	5.8	1.0	46.1	サヌカイト		
395	75	-	石包丁	Ⅲ a 区包含層	3.1	1.4	0.4	1.5	サヌカイト		
399	76	-	石繩	Ⅲ a 区包含層	6.3	6.0	1.3	40.2	サヌカイト		
400	76	-	石包丁	Ⅲ c 区包含層	2.1	0.9	0.3	0.6	サヌカイト		
417	77	-	石繩	Ⅱ c 区包含層	3.6	3.6	0.6	10.0	サヌカイト		
418	77	-	石包丁	Ⅱ c 区包含層	5.2	6.6	4.3	219.3	砂岩か?		
419	77	30	石鍬	V 区包含層(灰褐色砂質土)	2.0	1.4	0.3	1.1	サヌカイト		
425	78	-	石繩	V 区包含層(灰褐色砂質土)	4.7	12.3	0.9	73.9	サヌカイト		
426	78	-	石包丁	V 区包含層	2.4	2.4	0.2	銅	嘉祐宝		
457	79	-	銅錢	VII 区包含層	2.4	2.5	0.1	銅	皇宋通宝		
458	79	-	銅錢	VII a 区包含層	1.6	1.6	0.1		青銅		
459	79	-	筋り金具	VII a 区包含層	4.4	3.7	0.4	6.0	サヌカイト		
460	79	-	石繩	VII a 区包含層	2.9	1.8	0.5	2.7	サヌカイト		
461	79	-	石繩	VII a 区包含層	2.9	2.1	0.5	2.0	サヌカイト		
462	79	-	石繩	VII a 区包含層	3.5	2.6	0.5	4.9	サヌカイト		
463	79	-	石繩	VII a 区包含層	3.9	2.0	0.5	2.8	サヌカイト		
485	80	-	石繩	VII a 区包含層	3.3	0.8	0.5	1.2	サヌカイト		
486	80	-	石繩	VII a 区包含層	4.0	1.3	0.4	1.8	サヌカイト		
487	80	-	石繩	VII a 区包含層	5.4	1.7	0.4	4.0	サヌカイト		
488	80	-	石繩	VII a 区包含層	3.2	2.3	0.8	4.5	サヌカイト		
489	80	-	石鍬	VII a 区包含層	4.1	2.5	0.6	5.3	サヌカイト		
490	80	-	石包丁	VII a 区包含層	3.0	3.9	0.8	10.6	サヌカイト		
491	80	-	石包丁	VII a 区包含層	9.0	4.8	1.9	92.3	滑石?		
492	81	31	溫石	VII 区包含層					石鍋の軸用?。輪の径かなり大きい		

第33表 石器・金属器製表 (3)

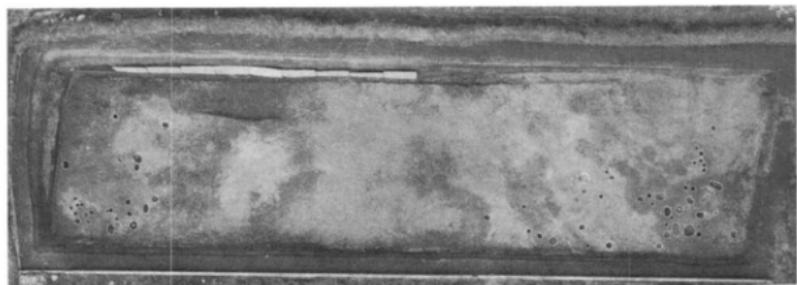
図 版



I・II b・II c 区調査終了（俯瞰）

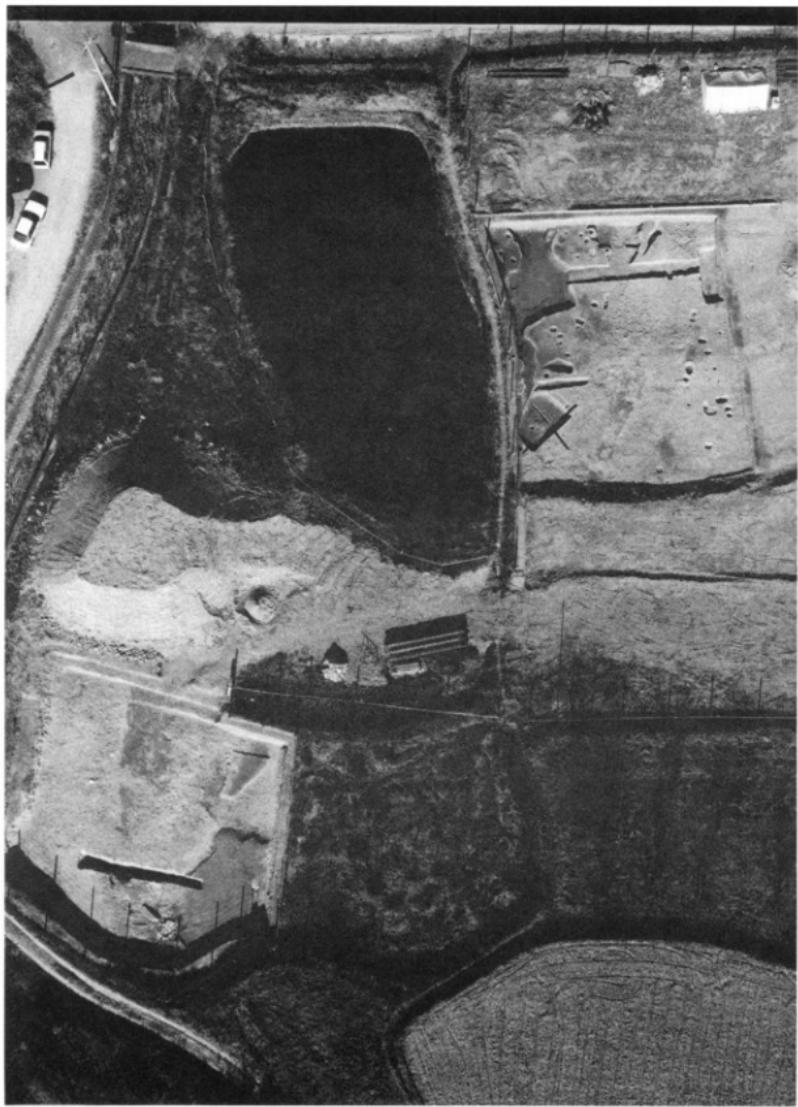


II a 区調査終了（俯瞰）



V 区調査終了（俯瞰）

図版 2

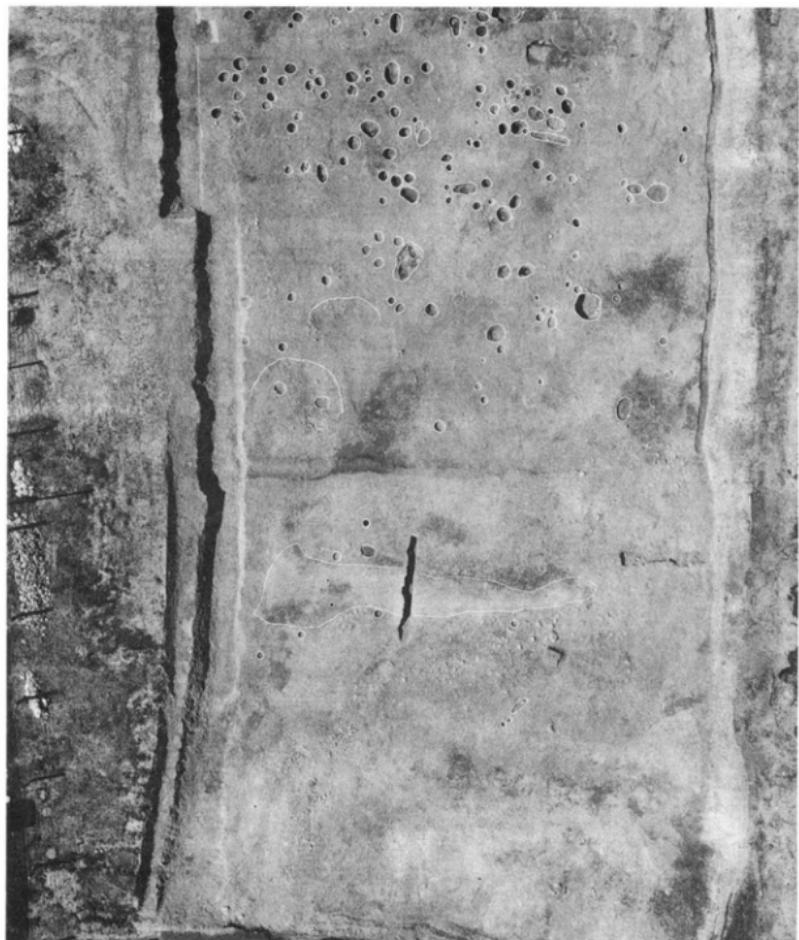


VI b・VII a 区調査終了（俯瞰）



VIa・VIIb 区調査終了（俯瞰）

図版 4



VII区調査終了（俯瞰）



I 区調査前風景（南より）



I 区上層遺構面（西より）

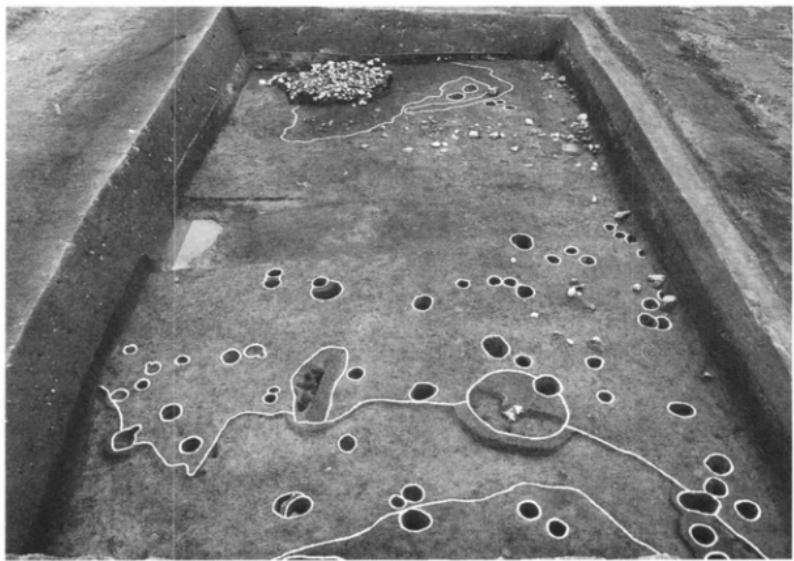
図版 6



I 区下層遺構面（東より）



III a 区上層遺構面（東より）



III a 区下層遺構面北半部（南より）



III a 区下層遺構面南半部（西より）

図版 8



IV区近世墓基壇石散乱状況（南西より）



IV区近世墓基坑（東より）

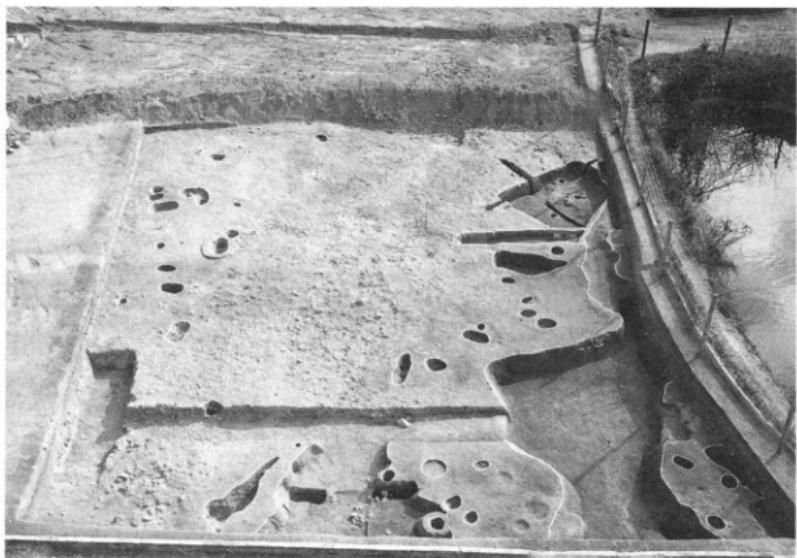


V区南壁土層と上層遺構面（北より）



V区上層遺構面（東より）

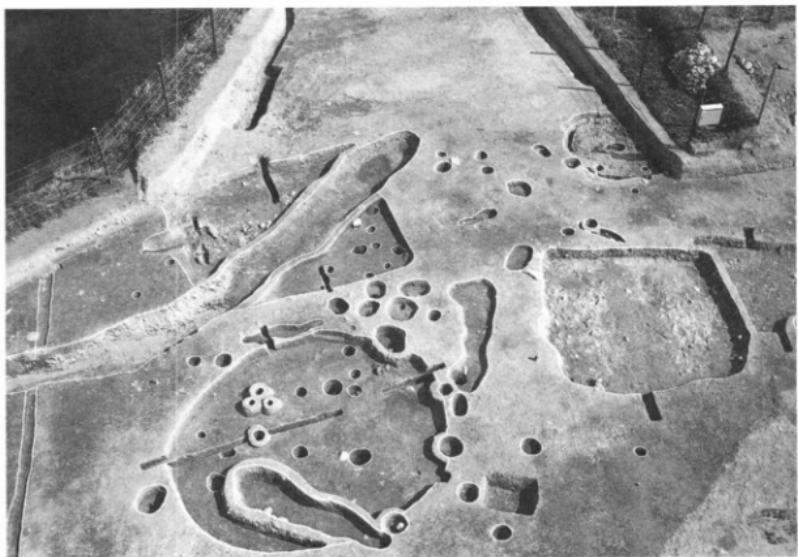
図版10



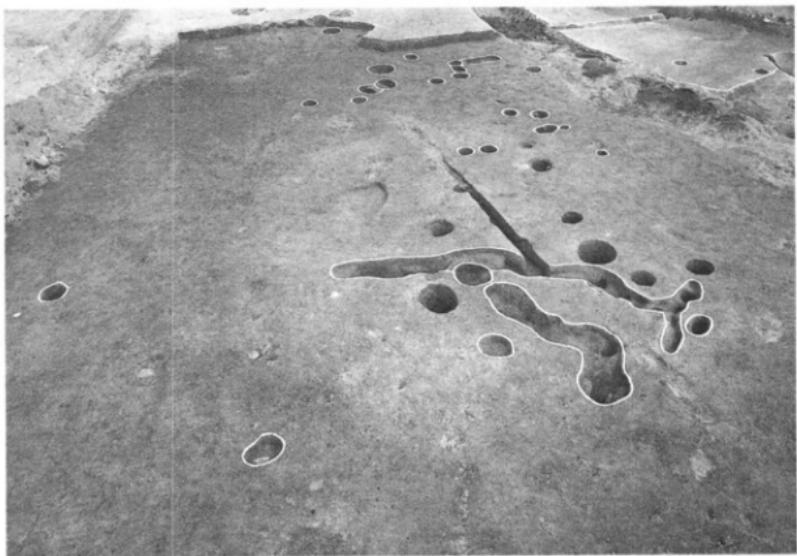
VI a 区調査終了（北より）



VII a 区調査終了（南より）



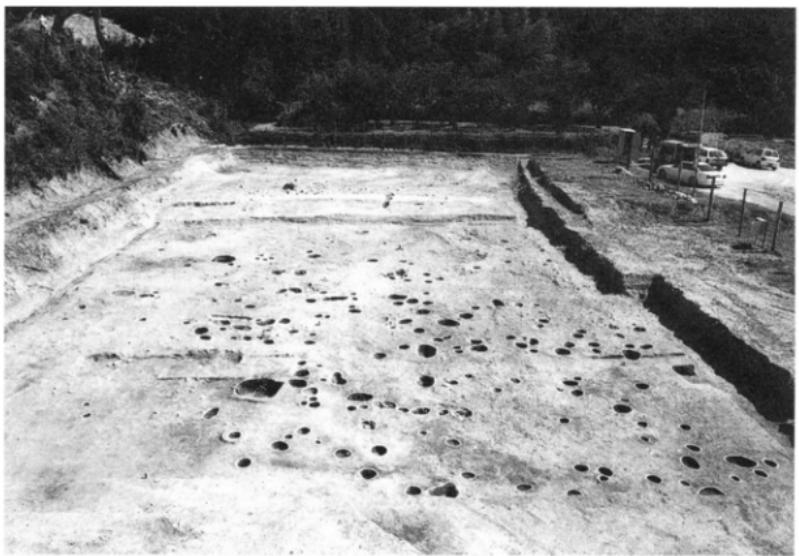
VII a 区調査終了（南上方より俯瞰）



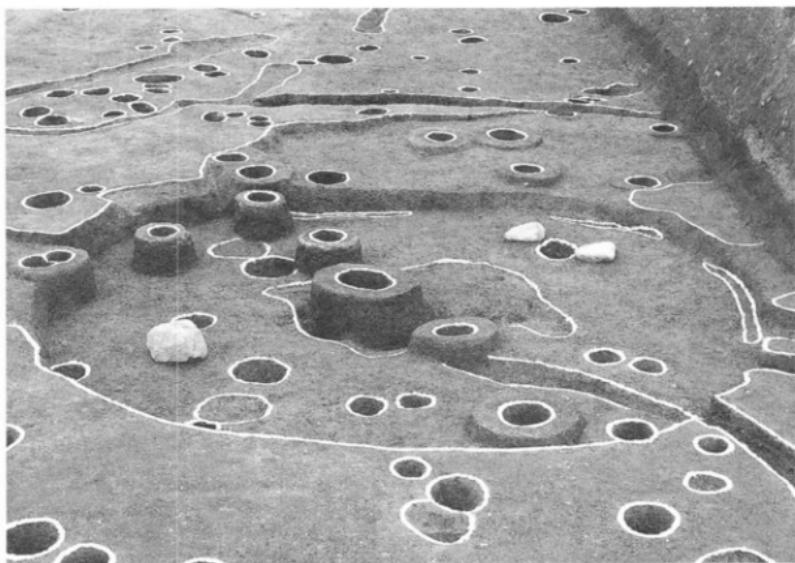
VII a 区下層遺構面（南より）



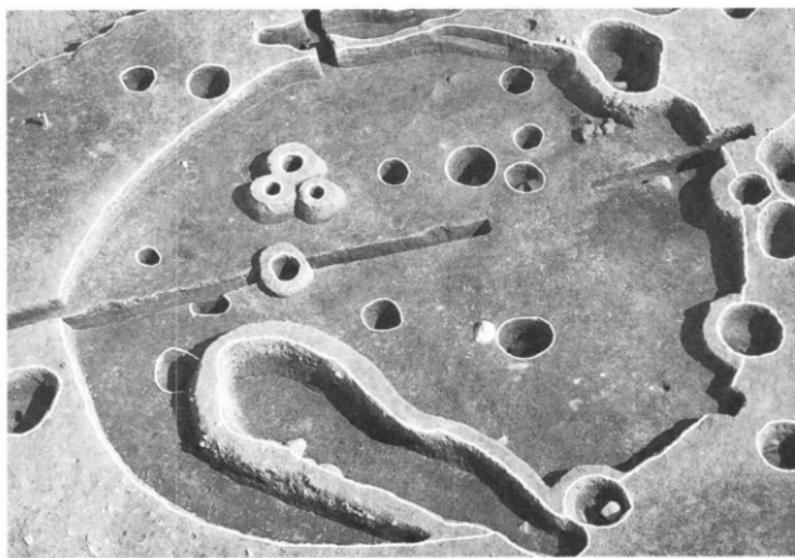
VII S X01検出状況（西より）



VII区北半部調査終了（北から）



III a 下 SH01調査終了（北より）



VII a 上 SH02調査終了（西より）

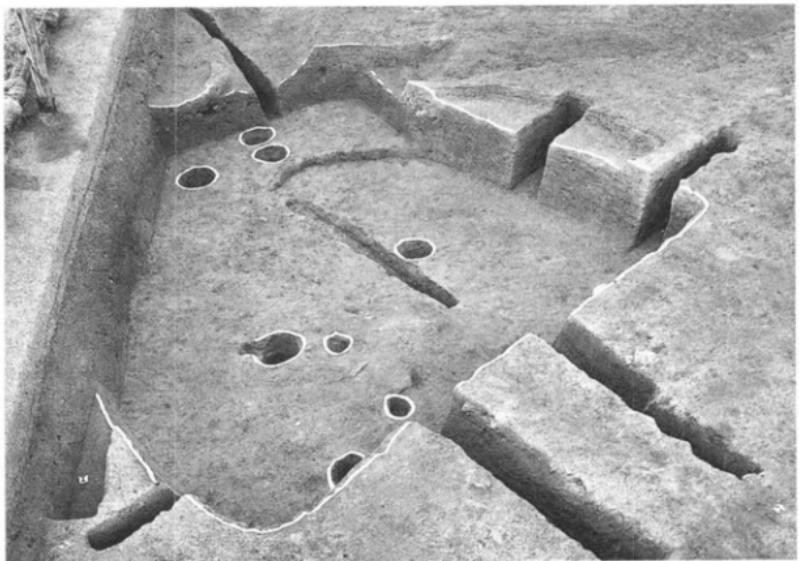
図版14



VII a 上 SH03調査終了（北より）



III a 下 SX02検出状況（北より）



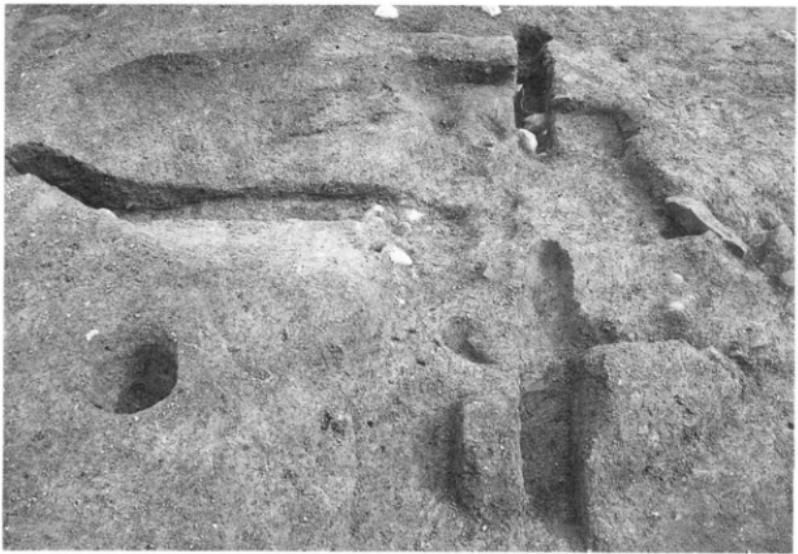
VI a S H01調査終了（南より）



VI a 上 S H01窓部使用土器落下破損状況（南より）



VII a 上 SH01 窓部支脚検出状況（南より）



VII a 上 SH01 窓部調査終了（窓立ち上がりが半円形に残る、西より）



VII S P 003埋納土器検出（3枚重ねの2枚目、南より）



I 上 S P 008土器検出（東より）

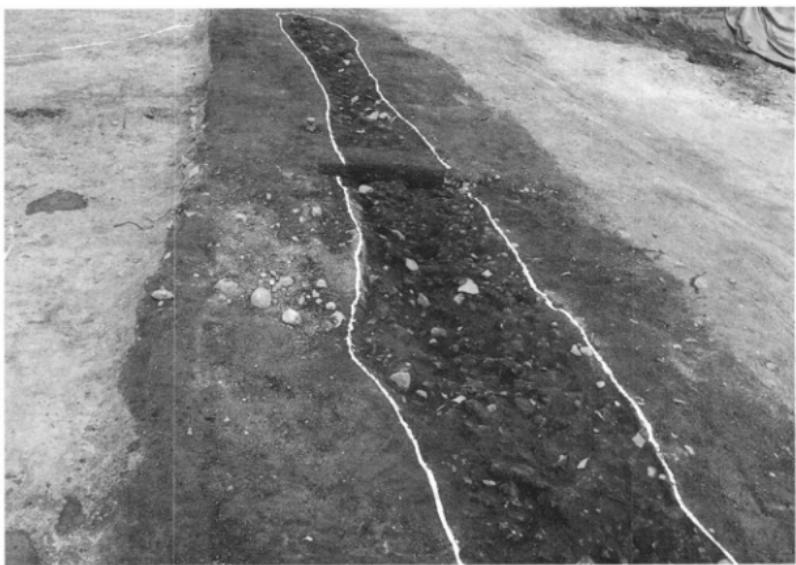
図版18



VII S K01土器検出（北より）



VII b S X01調査終了（北より）



VII S X01焼土・土器埋め立て状況（西より）



VI a S D01埋土断面③（北より）